

田边市文化賞

五十年



田辺市文化賞
50 周年記念誌

目 次

はじめに（田辺市文化賞について）、田辺市民憲章	1
ご挨拶 田辺市長 真砂 充敏	2
祝辞 田辺市議会議長 安達 克典	3
祝辞 田辺市教育長 佐武 正章	4
50年の歩み（歴代受賞者一覧）	5
受賞者の功績	9

高川 格 氏	10	南方 文枝 氏	66
早田 卓次 氏	11	杉中 浩一郎 氏	68
脇村 義太郎 氏	12	岡安 喜久仕 氏	70
池永 浩 氏	13	外山 八郎 氏	72
雑賀 貞次郎 氏	14	木下 伊吉 氏	74
原 勝四郎 氏	15	脇村 孝三郎 氏	76
廣島 鋤和 氏	16	伊勢田 進 氏	78
木村 龍平 氏	17	後藤 伸 氏	80
鈴木 雄三 氏	18	惠中 三市藏 氏	82
益山 英吾 氏	19	坂東 昌子 氏	84
山崎 祥石 氏	20	寄本 勝美 氏	86
野口 民雄 氏	21	中瀬 喜陽 氏	88
福本 鯨洋 氏	22	鈴木 桂一郎 氏	90
森木 啓之 氏	23	中田 昌女 氏	92
坂東 三恵鶴 氏	24	小森 陽太郎 氏	94
野口 利太郎 氏	25	角 莊三 氏	96
中嶋 明 氏	26	田上 實 氏	98
小山 周次郎 氏	27	宇江 敏勝 氏	100
前野 忠道 氏	28	坂本 勲生 氏	102
玉井 武二 氏	29	清水 正治 氏	104
中井 國之助 氏	30	小川 虔道 氏	106
辻村 喜一 氏	32	森本 正男 氏	108
赤木 四郎藏 氏	34	真砂 典明 氏	110
安部 辨雄 氏	36	潮 隆雄 氏	112
太田 耕二郎 氏	38	坂本 フジエ 氏	114
吉田 恒四郎 氏	40	神谷 慧 氏	116
真砂 久一 氏	42	玉井 済夫 氏	118
田ノ岡 鉄一 氏	44	牛尾 武 氏	122
稗田 一穂 氏	46	小坂橋 淳 氏	124
曾我部 玄雄 氏	48	政井 和子 氏	126
吉信 英二 氏	50	古久保 健 氏	128
原 盾二郎 氏	52	芝 安雄 氏	130
森内 富三郎 氏	54	酒井 滋子 氏	132
水本 愛堂 氏	56	濱岸 宏一 氏	134
辻本 亮三 氏	58	池田 千尋 氏	136
榎本 はな 氏	60	松本 濱次 氏	138
吉田 彌左衛門 氏	62		
神谷 幸 氏	64		

〔寄稿〕50年の歩みに寄せて（受賞者のことば）	141
-------------------------	-----

第1回受賞者 早田 卓次 氏	142
第17回受賞者 原 盾二郎 氏	143
第36回受賞者 宇江 敏勝 氏	144
第44回受賞者 玉井 済夫 氏	145
第46回受賞者 政井 和子 氏	146
第46回受賞者 古久保 健 氏	147

あとがき（田辺市文化賞に携わって）	149
-------------------	-----

橘 勲 氏	150
-------	-----

は じ め に

田辺市文化賞について

田辺市では、田辺市民憲章にも謳われている「歴史と伝統に学び、教養を高め、文化のかおるまち」をめざし、毎年 11 月に本市の文化の発展に貢献いただいた方々に『田辺市文化賞』をお贈りしています。

この『田辺市文化賞』は、昭和 45 年に旧田辺市において創設されたものですが、新田辺市においてもこれを受け継いでおります。

創設時である昭和 45 年度から数えますと、今回の令和元年度で 50 回目という節目を迎えたことから、半世紀にわたる伝統の歩みを振り返りながら今一度記録するとともに、これまで受賞された方々のご功績を改めて顕彰するものです。

田辺市民憲章

(平成 17 年 10 月 1 日制定)

わたくしたち田辺市民は、美しい海・山・川の豊かなめぐみに感謝し、先人たちが築きあげた歴史と文化をうけつぎ、自治と福祉のこころにあふれたまちをつくるため、ここに市民憲章をさだめ、力を合わせてその実行につとめます。

1. 豊かな自然を大切にし、調和のとれた美しいまちをつくります。
2. 歴史と伝統に学び、教養を高め、文化のかおるまちをつくります。
3. スポーツに親しみ、心身ともに健康で、希望にみちた楽しいまちをつくります。
4. 人権を守り、たがいに助け合い、明るく平和なまちをつくります。
5. 時と資源を生かし、働くことを喜び、共に栄えるまちをつくります。

ご 挨 拶



田辺市長 真 砂 充 敏

陽光やわらかく木々の息吹あらたなる今日、田辺市文化賞が創設から 50 周年を迎えるにあたり、ご挨拶申し上げることであります。光栄と責任の重さに身の引き締まる思いでございます。

遡ること半世紀前、時代は高度成長期の最中で、ともすれば経済や利益、効率などの価値観が優先されるそのような状況の中であって、関係者のご労苦により田辺市文化賞は産声を上げました。田辺市文化賞を受賞された先輩方は、ご自身が信ずる道を一途に貫き、不断の努力を重ねられ、研鑽を深めてこられました。これは、並大抵の思いや努力で成し得るものではございません。ましてやそのことが広く世間に認知され、大きな称賛を得るに至るまでには、それこそ本人でしか知り得ない様々なご苦勞、そして膨大な時間や並々ならぬ努力を費やされてきたことは想像に難くありません。

長年にわたり築いてこられた業績や文化の発展に果たされた先輩方のご功績は、ご自身、ご家族は申すに及ばず、市民憲章にもございますように、「歴史と伝統に学び、教養を高め、文化のかおるまち・・・」を目指す田辺市にとりましても誠に大きな財産であります。

改めましてここに、先輩方のこれまでのご活躍とご功績に深甚なる敬意を表しますとともに、田辺市文化賞に携わってこられました関係の皆様方に、心から厚く御礼申し上げます。

折しも、昭和、平成という時代を経て令和という元号に改まったタイミングで本賞も 50 回という歴史を数え、令和に込められた『人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つように』という願いが、田辺市文化賞を後押ししている気がしてなりません。

これからも本市が誇る文化の深みの最たる代表として、歴史と伝統を継承しつつ新しい価値の創造も担う田辺市文化賞でありますよう、一層尽力してまいりますので、皆様方におかれましても、引き続き本賞の発展にご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

祝 辞



田辺市議会議長 安達 克典

田辺市文化賞創設 50 周年を機に、このように記念誌が発刊されますこと心よりお慶び申し上げます。

歴史と権威ある田辺市文化賞をこれまでご受賞された皆様方のご功績に改めて深く敬意を表します。

受賞された方々は、歩まれた道こそ異なりますが、各分野において永い歳月にわたり、絶え間ない努力と精進を重ねられ、本市の文化の向上発展に尽くしてこられた方々でございます。

この多大なご業績に対し心から敬意を表し、市民の誇りとして賛辞をお贈りいたしますとともに、ここに、田辺市文化賞 50 年の歴史に刻まれた内容の重さを改めて再認識しているところです。

私たちのまち田辺は、古い歴史を刻み、文化の薫り高い豊かな心を育むまちづくりに努めておりますが、今後もその文化のともし火をいつまでも絶やすことなく引き継ぎ、さらに光り輝かせ、後世に伝えていくことが、今を生きる私たちの使命ではないかと考えているところです。

これまで郷土の先輩の皆様方が示された活動の成果を後世に伝え、更に文化の薫り高い、魅力あふれるまちづくりに努力を重ねてまいりたいと考えております。

結びに、田辺市文化賞の更なる発展と、市民の文化意識が高揚し、個性的で魅力的なふるさと文化の振興が図られますことを祈念申し上げ、田辺市文化賞 50 年のお祝いの言葉といたします。

祝 辞



田辺市教育長 佐 武 正 章

田辺市文化賞が創設から 50 年を迎え、ここに 50 周年記念冊子が発刊されますことを心よりお慶び申し上げます。

そして、田辺市文化賞という輝かしい賞を受賞された 74 名の皆様をはじめ、同賞に携わってこられました関係の皆様方に、改めまして心から敬意を表する次第です。

英語で“文化”や“教養”を表す「culture（カルチャー）」は、“耕す”を意味するラテン語「colere（コレレ）」に由来し、そこから“心を耕す”、“学びを耕す”という意味に転じて今日の使われ方になったといわれています。

受賞者の皆様のご功績を改めて拝見させていただきますと、その分野は実に多岐にわたっておられ、そのご活躍内容は当然ながら一朝一夕に成しえるものではなく、各人が信じる道をコツコツと、まさしく心を耕し、学びを積み上げてきた結果であると、実感いたしております。

また、教育の世界におきましても己の“心を耕す”ことは、人としての成長にもつながり大変重要な意味を持ちます。田辺市教育委員会といたしましても、このように田辺市にゆかりのある先輩方が築かれた偉大なご功績を顕彰するとともに、次代を担う田辺市の児童生徒にも広く伝え、本市の文化の土壌をさらに豊かなものにしてまいりたいと考えております。皆様方におかれましても、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、田辺市文化賞が今回の 50 周年を契機に、更なるご発展を遂げられることを祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

50 年の歩み

(歴代受賞者一覧)

歴代受賞者一覧

(敬称略)

	回	年	氏 名	活 動 内 容	住 所	備 考
1	第1回	昭和45年	高川 格	囲碁	東京都目黒区	
2	〃	〃	早田 卓次	体操	東京都世田谷区	
3	〃	〃	脇村 義太郎	経済学	神奈川県逗子市	
4	〃	〃	故池永 浩	万代記解説	田辺市下屋敷町	
5	〃	〃	故雑賀 貞次郎	地方文化	田辺市湊	
6	〃	〃	故原 勝四郎	洋画	西牟婁郡白浜町	
7	第2回	昭和46年	廣島 勲和	華道	田辺市神子浜	本名 廣島幾太郎
8	第3回	昭和47年	木村 龍平	生活文化	田辺市下屋敷町	
9	〃	〃	鈴木 雄三	弓道	田辺市湊	
10	第4回	昭和48年	益山 英吾	洋画	田辺市中屋敷町	
11	〃	〃	山崎 祥石	書道	田辺市福路町	
12	第5回	昭和49年	野口 民雄	地方文化	田辺市新屋敷町	
13	〃	〃	福本 鯨洋	俳句	田辺市上屋敷町	本名 福本清一郎
14	第6回	昭和50年	森木 啓之	地方文化・邦楽	田辺市上屋敷町	
15	第7回	昭和51年	坂東 三恵鶴	舞踊	田辺市下屋敷町	本名 高橋つる
16	〃	〃	野口 利太郎	地方文化	田辺市栄町	
17	第8回	昭和52年	中嶋 明	剣道	田辺市下屋敷町	
18	〃	〃	小山 周次郎	地方文化	田辺市中屋敷町	
19	第9回	昭和53年	前野 忠道	古文書	田辺市湊	
20	〃	〃	玉井 武二	水彩画	田辺市湊	
21	第10回	昭和54年	中井 國之助	生活文化	田辺市江川榭潟町	
22	〃	〃	辻村 喜一	山藍染	田辺市湊	
23	第11回	昭和55年	赤木 四郎藏	医療・学校保健	田辺市南新町	
24	〃	〃	安部 辨雄	文化財	田辺市湊	
25	第12回	昭和56年	太田 耕二郎	植物学	田辺市湊	
26	第13回	昭和57年	吉田 恒四郎	童話	田辺市新屋敷町	
27	第14回	昭和58年	真砂 久一	植物学	田辺市新庄町	
28	第15回	昭和59年	田ノ岡 鉄一	木版画	田辺市芳養町	
29	第16回	昭和60年	稗田 一穂	日本画	東京都世田谷区	
30	〃	〃	曾我部 玄雄	文化財・体育	田辺市稲成町	
31	第17回	昭和61年	故吉信 英二	社会教育	田辺市湊	
32	〃	〃	原 盾二郎	音楽	田辺市朝日ヶ丘	
33	第18回	昭和62年	森内 富三郎	音楽	田辺市栄町	
34	第19回	昭和63年	水本 愛堂	書道	西牟婁郡白浜町	本名 水本 清
35	第20回	平成元年	辻本 亮三	生活文化	田辺市むつみ	
36	〃	〃	榎本 はな	生活文化	田辺市湊	
37	第21回	平成2年	吉田 彌左衛門	豆本の出版	田辺市湊	
38	第22回	平成3年	神谷 幸	幼児教育	田辺市今福町	

※令和元年12月現在 ※氏名の前に「故」を付している方は、受賞当時、ご逝去されていた方です。

歴代受賞者一覧

(敬称略)

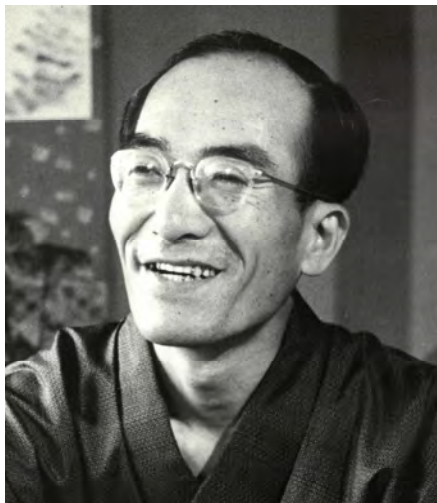
	回	年	氏 名	活 動 内 容	住 所	備 考
39	第23回	平成4年	南方 文枝	地方文化	田辺市中屋敷町	
40	第24回	平成5年	杉中 浩一郎	地方史の研究	田辺市あけぼの	
41	第25回	平成6年	岡安 喜久仕	長唄	田辺市上屋敷町	本名 藤井朝枝
42	第26回	平成7年	外山 八郎	自然保護	田辺市元町	
43	第27回	平成8年	木下 伊吉	生活文化	田辺市秋津川	
44	〃	〃	脇村 孝三郎	生活文化	田辺市上屋敷町	
45	第28回	平成9年	伊勢田 進	考古学	田辺市神子浜二丁目	
46	第29回	平成10年	後藤 伸	生物研究・自然保護	田辺市秋津町	
47	第30回	平成11年	恵中 三市藏	絵画	田辺市江川町	
48	第31回	平成12年	坂東 昌子	舞踊	田辺市中屋敷町	本名 政井昌子
49	第32回	平成13年	寄本 勝美	行政学	東京都東村山市	
50	第33回	平成14年	中瀬 喜陽	地方文化	田辺市神子浜一丁目	
51	第34回	平成15年	故鈴木 桂一郎	地方文化	田辺市北新町	
52	第35回	平成16年	中田 昌女	華道・茶道	田辺市秋津町	
53	〃	〃	故小森 陽太郎	社会教育・生活文化	田辺市上万呂	
54	〃	〃	角 莊三	音楽	田辺市秋津町	
55	第36回	平成17年	田上 實	絵画	田辺市あけぼの	
56	〃	〃	宇江 敏勝	作家	田辺市中辺路町野中	
57	第37回	平成18年	坂本 勲生	語り部	田辺市本宮町本宮	
58	〃	〃	清水 正治	生活文化	田辺市下万呂	
59	第38回	平成19年	小川 虔道	尺八奏者	田辺市明洋二丁目	号：令山
60	第39回	平成20年	森本 正男	地方史の研究	田辺市中辺路町野中	雅号：果無山
61	第40回	平成21年	眞砂 典明	生活文化	田辺市龍神村柳瀬	
62	第41回	平成22年	潮 隆雄	染織工芸	滋賀県大津市	
63	第42回	平成23年	坂本 フジエ	生活文化	田辺市朝日ヶ丘	
64	第43回	平成24年	神谷 慧	合唱指導・音楽教育	田辺市今福町	
65	第44回	平成25年	玉井 済夫	生物研究・自然保護	田辺市高雄一丁目	
66	〃	〃	故牛尾 武	日本画	田辺市稲成町	本名 牛尾武司
67	第45回	平成26年	小板橋 淳	地方文化	田辺市むつみ	
68	第46回	平成27年	政井 和子	地方文化	田辺市中屋敷町	
69	〃	〃	古久保 健	郷土史研究	田辺市龍神村殿原	
70	第47回	平成28年	芝 安雄	伝統工芸	田辺市本宮町皆地	本名 芝 安男
71	第48回	平成29年	酒井 滋子	ひきこもり支援	田辺市本町	
72	〃	〃	濱岸 宏一	文化財保護	田辺市学園	
73	第49回	平成30年	故池田 千尋	地方史研究	田辺市中辺路町野中	
74	第50回	令和元年	松本 濱次	伝統工芸	田辺市中辺路町野中	

※令和元年12月現在 ※氏名の前に「故」を付している方は、受賞当時、ご逝去されていた方です。

受賞者の功績

※第1回から第50回までの歴代受賞者の功績調書につきましては、
受賞当時の背景を記録するため、基本的に当時の資料をそのまま
引用しております。(氏名に(故)を付している方は、受賞当時、ご
逝去されていた方です。

第 1 回（昭和 45 年）



たかがわ

かく

高川

格 氏

生年月日 大正 4 年 9 月 21 日生

住 所 東京都目黒区

大正 4 年（1915 年）9 月、西牟婁郡湊村（現田辺市湊）に生まれる。

囲碁 10 段、名誉本因坊。

「知性の高川」と言われ、従来の力戦本位の技法に理論を導入し、とくにコミ碁の布石に新しい面を開く。

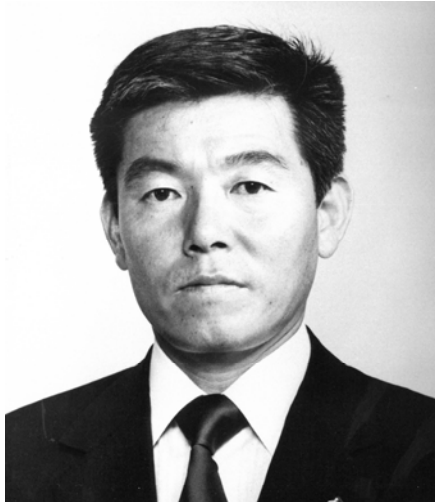
昭和 27 年（1952 年）、第 7 期本因坊戦で橋本昭宇氏からタイトルを奪取、以来、木谷実氏、杉内雅男氏、島村利博氏、藤沢朋斎氏、藤沢秀行氏らの挑戦を退け、本因坊 9 連覇の大記録を達成し、「コミ碁の王者」の名をほしいままにする。

10 期目は、坂田栄男 9 段の挑戦を受け、ついに半目の差で惜敗。昭和 39 年（1964 年）、名誉本因坊、昭和 40 年（1965 年）、10 段位、昭和 43 年（1968 年）、名人位を獲得。

正確な判断で、後半に抜き去る冷静な戦い方は、後進に大きな影響を与える。『高川囲碁読本』ほか著書も多い。

勲三等旭日中綬章、和歌山県文化賞。

第 1 回（昭和 45 年）



はやた た く じ
早 田 卓 次 氏

生年月日 昭和 15 年 10 月 10 日生

住 所 東京都世田谷区

昭和 15 年（1940 年）10 月、西牟婁郡下芳養村（現田辺市芳養松原）に生まれる。

昭和 39 年（1964 年）、東京オリンピック体操競技に出場、団体 1 位、金メダル獲得、個人総合 8 位、個人種目別つり輪 1 位、金メダル獲得。

昭和 43 年（1968 年）、メキシコオリンピック出場。昭和 45 年（1970 年）、ユーゴスラビア（現スロベニア）のリュブリアナでの第 17 回世界体操競技選手権大会に主将として出場、団体 1 位、個人総合 7 位、個人種目別つり輪 4 位、鉄棒 3 位。

昭和 51 年（1976 年）、モントリオールオリンピックに体操男子チームリーダーとして出場。昭和 58 年（1983 年）、日本大学体操男子監督となる。昭和 60 年（1985 年）、ユニバーシアード神戸大会男子体操チーム監督。

日本大学助教授。日本体操協会競技委員長。

朝日体育賞、日本スポーツ賞。日本大学卒。



わきむら よしたろう

脇村 義太郎 氏

生年月日 明治 33 年 12 月 6 日生

住 所 神奈川県逗子市

明治 33 年（1900 年）12 月、西牟婁郡田辺町（現田辺市栄町）に生まれる。
経済学者。

石油問題に関する戦前からの権威者。東京帝国大学経済学部を卒業。同大学助教授となったが、昭和 13 年（1938 年）、教授グループ事件に連座して休職。終戦後、東京大学に教授として復職し、貿易史、経営史を講ずる一方、経済安定本部参与、通商産業省顧問、船員中央労働委員会会長、海運造船合理化審議会委員など多くの政府関係役職を歴任。多くの専門的著書、論文がある。

昭和 36 年（1961 年）、東大退官後も執筆活動とともに経営史学会会長、独占禁止懇談会会長、石油経済研究会座長等として活躍。

東京大学名誉教授、経済学博士、日本学士院会員。

勲一等瑞宝章。

第 1 回（昭和 45 年）



い け な が ひ ろ し
(故) 池 永 浩 氏

生年月日 明治 33 年 12 月 8 日生

住 所 田辺市下屋敷町

明治 33 年（1900 年）12 月、西牟婁郡田辺町（現田辺市下屋敷町）に生まれる。

田辺市文化財調査委員として市の重要文化財万代記の解説の委嘱を受け、「日本語を日本人が読めないはずがない」として困難な解説にあたって約 10 年、昭和 42 年（1967 年）、750 万文字、全 105 巻の解説を終える。その副産物ともいえるべき「万代記、田辺町大帳、御用留対照表」は、当地方の近世史研究家必携の労作。

「義堂」と号し、漢文、漢詩に精通し、その詩は「池永義堂先生詩略解」に収録されている。

書も丹羽海鶴氏に師事、高雅な書風で一家をなす。

東京高等師範学校卒。大阪府内で教諭を歴任後田辺に帰り、田辺高等女学校教諭を経て、田辺高等学校教頭。



さいか ていじろう
(故) 雑賀 貞次郎 氏

生年月日 明治 17 年 1 月 24 日生

住 所 田辺市湊

明治 17 年（1884 年）1 月、名草郡西山東村（現和歌山市）に生まれる。

明治 35 年（1902 年）、牟婁新報社編集員となり、大正 2 年（1913 年）、大阪毎日新聞田辺通信員兼務。

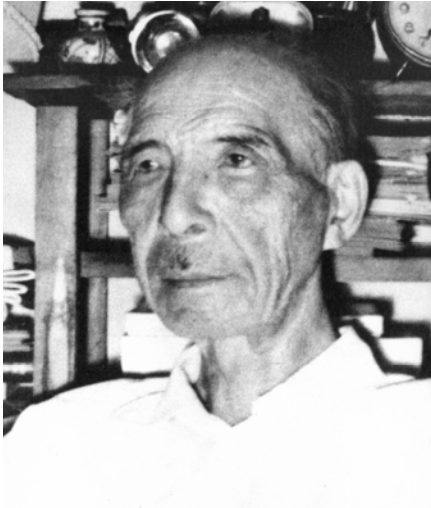
大正 7 年（1918 年）、田辺新報社に入るが、大正 10 年（1921 年）、再び牟婁新報社に帰り編集。大正 14 年（1925 年）「田辺商報」を興し、昭和 6 年（1931 年）、『紀南の温泉』の発行を始め、戦争のため中断したが、戦後復活。

この間、湊村議会議員、田辺町議会議員を務めるとともに、田辺町誌、田辺市誌の編さんを行い、膨大な資料をまとめる。

文化財関係にも尽力し、和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会委員、田辺市文化財調査会副会長等を歴任。

田辺市文化功労者、和歌山県文化教育功労者。

第 1 回（昭和 45 年）



はら かつしろう
(故) 原 勝四郎 氏

生年月日 明治 19 年 4 月 5 日生

住 所 西牟婁郡白浜町

明治 19 年（1886 年）4 月、西牟婁郡湊村（現田辺市湊）に生まれる。

当地の著名な洋画家。

東京美術学校在学中やフランス留学の数年間を除いて、その 78 年の生涯のほとんどを郷里の田辺とその周辺から離れることなく、質朴な隠遁の生活を送った画家である。

戦前は、二科会展に出品したが、戦後は、二紀会に所属。しばしば受賞もしたが、画壇的な名声や栄誉を求めず、ひたすら自ら画工と称して画業に打ち込む。

南紀の明るい太陽や風物を愛し、その情景を絵筆に、また、人物画に秀で、小品や日本画にも佳品が多い。

東京美術学校（現東京芸術大学）卒。

第2回（昭和46年）



ひろはた じょわ
廣島 鋤和 氏

（本名 廣島 幾太郎）

生年月日 明治23年4月19日生

住 所 田辺市神子浜

明治23年（1890年）4月、西牟婁郡田辺町（現田辺市栄町）に生まれる。
幼少より父義甫に、花と絵を学び、のちに大阪・北野恒富画伯、京都・西山翠嶂画伯に師事し、日本画、壁画等を修める。

田辺市内の海蔵寺観音堂や本正寺本堂に「天人と蓮」の絵のほか、下三栖如来本堂の天井絵も納めている。

昭和2年（1927年）、盆景花を創案、同時に華道広円流を創立。文部省主催の日花展や百人展に連続出瓶。この間、大阪府花道協会理事、和歌山県展華道部審査員、日本いけばな芸術協会評議員、県華道連盟会長、同顧問等を務め、華道の普及指導に尽くす。

世界いけばな芸術作家展、現代いけばな芸術家展、いけばな五十人展等に招待出瓶。和歌山県文化功労賞。

第3回（昭和47年）



きむら りょうへい
木村 龍平 氏

生年月日 大正9年7月7日生

住 所 田辺市下屋敷町

大正9年（1920年）7月、西牟婁郡生馬村（現西牟婁郡上富田町生馬）に生まれる。

満州国林務局に勤務、昭和17年（1942年）、東安省平陽附近でイペリット性能試験中の爆発により失明。戦後、鍼灸師を開業し、田辺鍼灸師会の運営に努め、県下にさきがけて紀南盲人福祉協会を結成。白ステッキの無料配布を叫び、点字教室や教養講座を多数開く。

昭和33年（1958年）、世界盲人文芸コンクールに小説「七夕」を応募、第一席に入賞。同39年（1964年）、論文『自立の正三角錘方式論』が最高入選。

その他論文入賞多数。点字図書翻訳、点訳指導等にあたるなど更生援護に尽力。

厚生大臣表彰、全国盲人大会岩橋賞。和歌山県文化奨励賞。和歌山県身体障害者連盟会長、和歌山県盲人会会長、全国盲人会連合顧問。

第3回（昭和47年）



すずき ゆうぞう
鈴木 雄三 氏

生年月日 明治29年7月15日生

住 所 田辺市湊

明治29年（1896年）7月、西牟婁郡下秋津村（現田辺市秋津町）に生まれる。
若くして弓道を志す。

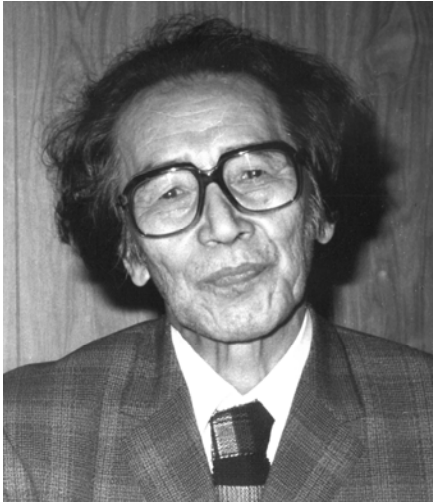
昭和42年（1967年）、弓道8段となり、翌43年（1968年）5月、和歌山県史上初の範士の称号を受け、弓道の普及と後進の指導育成に尽力。

昭和46年（1971年）、和歌山国体弓道大会で、新装の田辺市立弓道場にご臨場の天皇皇后両陛下にご説明。弓道歴50有余年、県下弓道界の重鎮として、一筋に弓道を通じて住民の人間形成に寄与。

和歌山県弓道連盟会長、全日本弓道連盟評議員終身参与会員、和歌山県体育連盟理事を務める。歯科医師。南部小学校、南紀農業学校、南部高等学校、田辺商業高等学校（現神島高等学校）校医として48年余。

和歌山県スポーツ賞、勲五等双光旭日章。日本大学歯学部卒。

第4回（昭和48年）



ますやま えいご
益山 英吾 氏

生年月日 明治41年12月27日生

住 所 田辺市中屋敷町

明治41年（1908年）12月、鹿児島県に生まれる。

当地方美術界の重鎮。昭和10年（1935年）、東京美術学校（現東京芸術大学）卒業。

昭和7年（1932年）、光風会展入選、光風会賞。昭和8年（1933年）、帝展入選。昭和13年（1938年）、光風会友となり、以後 光風会、帝展、文展、日展に出品。

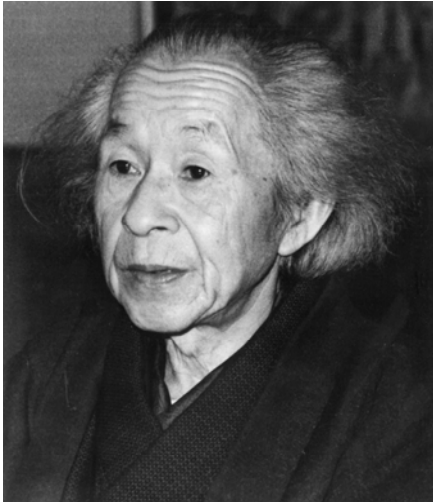
昭和15年（1940年）、紀元二千六百年奉祝美術展入選。昭和17年（1942年）、光風会会員となる。昭和23年（1948年）、田辺に帰り、翌24年（1949年）から昭和43年（1968年）まで田辺高等学校教諭。

昭和25年（1950年）、洋画同好会白風会（田辺美術協会の前身）結成。田辺市展開催に尽力、同26年（1951年）の市展第1回展から審査員。県展審査員。

昭和29年（1954年）、田辺美術協会創立、会長として現在に至る。

昭和31年（1956年）、日展特選、同32年（1957年）、日展無鑑査となる。和歌山県文化功労賞。

第4回（昭和48年）



やま さ き

しょうせき

山崎 祥石 氏

生年月日 明治37年11月28日生

住 所 田辺市福路町

明治37年（1904年）11月、西牟婁郡田辺町（現田辺市北新町）に生まれる。

田辺実業学校（のちの田辺商業高等学校、現神島高等学校）を途中で終え、大阪小島誠三郎商店入店、のち大阪藤樹印判店で修業。

昭和9年（1934年）より東京・関野香雲師、さらに京都・園田湖城師に師事。昭和15年（1940年）、田辺に帰る。

昭和11年（1936年）、泰東書道展に入賞し、中央書道界に進出。同25年（1950年）以後日展入選多数。同27年（1952年）、日本書芸院展で特選、委嘱作家となる。

昭和28年（1953年）、関西総合美術展で最高の関展賞。同30年（1955年）、日本書芸院展特別大賞、翌年から審査員となる。

昭和34年（1959年）から和歌山県展審査員。田辺市展の審査員としても初期から尽力。同40年（1965年）、個展開催。毎日展秀作賞2回。

歌碑、掲額刻字多数。



のぐち たみお
野口 民雄氏

生年月日 明治30年11月24日生

住 所 田辺市新屋敷町

明治30年（1897年）11月、西牟婁郡富里村（現田辺市下川上）に生まれる。

田辺随筆クラブ会長。同クラブの同人随筆誌「土」は、昭和49年（1974年）現在までに94集を発行、「蒼生坊」と号し、連綿として自らその編集を続け、書き続ける活動を通じて地域文芸の発展に尽力。

また、郷土の碑文の研究、当地方の古文書の解説に多年取り組み、当地方の名所、旧跡等を全国に紹介。

長年田辺市文化財審議会委員をつとめる。田辺市内の婦人会、町内会、老人クラブなど各種団体で研修会を開催すること数知れない。

喜寿記念に『田辺よいとこ』発刊。

田辺中学校、大阪府下の青年学校や中学校、田辺高等学校教諭を歴任。和歌山県師範学校卒。



ふくもと げいよう
福本 鯨洋 氏

（本名 福本 清一郎）

生年月日 明治33年7月5日生

住 所 田辺市上屋敷町

明治33年（1900年）7月、西牟婁郡湊村（現田辺市湊）に生まれる。

阿波野青畝氏に師事。大正時代、田辺ホトトギス会を創立。

昭和15年（1940年）、大阪陸軍病院白浜分院の委嘱を受け、戦傷病者に俳句を指導。

昭和22年（1947年）、俳句誌『花密柑』を発行、以来同好者を導く。

その間、高浜虚子の推せんによりホトトギス同人となる。熊野九十九王子跡 74 か所を踏査し、昭和44年（1969年）に句集『熊野九十九王子』を出版。同年、田辺ホトトギス会は、扇ヶ浜公園内に「美しき波と遊びて貝拾はず」の鯨洋の句碑を建立。田辺市俳句連盟顧問、市民俳句大会の選者として指導。ホトトギス同人、かつらぎ同人。

歯科医師、大正12年（1923年）上屋敷町に歯科診療所開設。

第6回（昭和50年）



もりき けいし
森木 啓之 氏

生年月日 明治33年9月15日生

住 所 田辺市上屋敷町

明治33年（1900年）9月、西牟婁郡田辺町（現田辺市今福町）に生まれる。

大正4年（1915年）に湊村書記として地方行政に携わって以来、昭和30年（1955年）退職に至るまで、湊村、田辺町、田辺市の要職を歴任。

その後、田辺市選挙管理委員会委員、田辺市中央公民館長、同中部公民館長、法務省人権擁護委員、行政管理庁行政相談員、田辺市社会福祉協議会会長の公職を務め、とくに昭和23年（1948年）から田辺放送文化協会、田辺地方電波障害防止会の要職にあって地道に活躍、地域の放送文化の向上、ラジオ、テレビ等放送受信障害防止に尽力。

また、邦楽の分野にあって、尺八都山流の普及指導にあたり、邦楽振興に寄与。

都山流大師範、竹琳軒冠称允許。

第7回（昭和51年）



ばんどう みえづる

坂東 三恵鶴 氏

（本名 高橋 つる）

生年月日 明治44年3月29日生

住 所 田辺市下屋敷町

明治44年（1911年）3月、西牟婁郡田辺町（現田辺市今福町）に生まれる。

8歳の頃から日本舞踊を習いはじめ、19歳のとき、日本舞踊で身を立てるとして大阪宗右衛門町で住み込み修業。

その後、結婚のため東京へ転住するが、昭和9年（1934年）、夫死亡により田辺に帰り、田辺新地で料亭を経営しつつ舞踊に精進。

昭和15年（1940年）、坂東流舞踊家元、7代目坂東三津五郎師より師籍（名取り）を許される。その後、田辺市をはじめ、白浜町、新宮市などで坂東流舞踊の師匠として後進の指導にあたり、その門をたたいた人の数は知れず、秀でた舞踊家を多く輩出。

また東京、大阪の一流舞踊家を招き、大がかりな日本舞踊の会を定期的に関き、研究を重ねる。



のぐち り たらう

野口 利太郎 氏

生年月日 明治20年8月8日生

住 所 田辺市栄町

明治20年（1887年）8月、西牟婁郡田辺町（現田辺市南新町）に生まれる。

古谷石の研究家として知られる。昭和10年（1935年）、東京日本橋の三越百貨店で古谷石展覧会を開催し、その真価を紹介。石の学問的探究、故事来歴への考証などを研究。名付けた古谷石は400余にのぼる。

また、文化財研究家としても知られ、近世近代の文人墨客の顕彰に努め、長年田辺市文化財審議会委員、紀南文化財研究会会員として活躍、田辺文化財誌等への寄稿も数多い。

短歌、俳句、版画と広範にわたって取り組み、明治中期以降の生き字引的存在。

昭和27年（1952年）、田辺アララギ会を結成。著書『古谷石私考』など。

明治38年（1905年）以来南新町で陶器店を経営、昭和20年（1945年）、栄町に移る。

第8回（昭和52年）



なかしま

あきら

中嶋

明氏

生年月日 明治42年1月24日生

住 所 田辺市下屋敷町

明治42年（1909年）1月、西牟婁郡田辺町（現田辺市下屋敷町）に生まれる。

剣道教士の父中嶋英太郎氏について6歳から指導を受ける。

昭和5年（1930年）、建武館館長大島治喜太氏の内弟子となり、大学在学中、小野十生範士の指導を仰ぐ。卒業後、旧制中学校教諭を歴任。

昭和22年（1947年）から父創立の道場建武館を主宰し、後進の指導にあたり、地方剣道の振興発展に尽力。

昭和29年（1954年）から同44年（1969年）まで和歌山県警察本部師範、以後、同名誉師範。全日本剣道連盟評議員、全日本剣道道場連盟評議員、和歌山県剣道連盟理事長、和歌山県剣道道場連盟理事長を務める。

昭和38年（1963年）、居合道教士、同44年（1969年）、剣道8段、同52年（1977年）、剣道範士。

勲五等瑞宝章。東洋大学卒。



こやま しゅうじろう
小山 周次郎 氏

生年月日 明治43年3月12日生

住 所 田辺市中屋敷町

明治43年（1910年）3月、西牟婁郡三栖村（現田辺市下三栖）に生まれる。
昭和3年（1928年）、父が経営する紀伊新報の記者となり、翌年から約10年間、同和歌山支局の県庁詰記者として活躍。

昭和17年（1942年）、戦時中の新聞統制により紀伊新報廃刊。

昭和22年（1947年）、紀伊民報創刊、今日に至る。

内容、発行部数和歌山県下一、地方随一の紀伊民報の発行代表者として正論健筆を振るい、善人善行を紹介。昭和52年（1977年）5月には発刊1万号を達成、昭和52年（1977年）現在12,700号を超える。

文化事業にも深い造詣により先頭に立ち、また紀南文化財研究会会長、和歌山県文化財研究会副会長として当地方の文化向上に尽力。

この間、田辺市議会議員、和歌山県教育委員、和歌山県議会議員を務める。

勲四等瑞宝章。



ま え の ちゅうどう
前野 忠道 氏

生年月日 明治39年10月6日生

住 所 田辺市湊

明治39年（1906年）10月、東牟婁郡七川村（現東牟婁郡古座川町）に生まれる。

田辺市の重要文化財である万代記、御用留、田辺町大帳の解説、田辺藩誌、和歌山県誌、熊野巡覧記の出版監修、上屋敷町の秋山文書、富田の柏木文書など市内、近隣の古文書の調査研究のほか、地方の古くからの事件、物語などをわかりやすく地方紙に発表するなど当地方の古文書文化財研究の第一人者、田辺市文化財審議会委員、紀南文化財研究会理事。

和歌山県師範学校卒業後、七川小学校訓導を経て大阪市内の小学校訓導を務めながら関西大学を卒業。

田辺高等女学校、南部高等学校、田辺高等学校の教諭を歴任、昭和38年（1963年）退職。

国立和歌山工業高等専門学校講師をも務める。



た ま い た け じ
玉 井 武 二 氏

生年月日 大正2年10月12日生

住 所 田辺市湊

大正2年（1913年）10月、日高郡南部町（現日高郡みなべ町）に生まれる。

高校で教鞭をとるかたわら、水彩画ひとすじに精進。日展入選多数、日本水彩画展文部大臣賞、関西水彩展大阪市長賞等。

日本水彩画会、一水会、関西水彩画会会員として中央にも名をなす。梅や鯉を画材とした水彩画は有名。画面の明るさと叙情詩的風格ある作風で知られる。市展審査員。

新宮高等女学校教諭を経て田辺中学校教諭で応召して戦地に赴き、タイ国で負傷。戦後、田辺高等学校教諭を務め、昭和47年（1972年）退職。

昭和26年（1951年）、田辺肢体障害者福祉協会結成に尽力し、初代会長を長く務めるなど身体障害者福祉向上に寄与。千葉高等園芸学校（現千葉大学）卒。



な かい く に の す け

中井 國之助 氏

生年月日 明治 35 年 8 月 17 日生

住 所 田辺市江川榑潟町

明治 35 年（1902 年）8 月 17 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市江川）に生まれる。

小学校を終了して以来、家業の漁業に取り組み、今日まで 60 年、ただひとすじ漁業振興のために挺身してきた偉大なる功労者で江川漁浦の育ての親である。常に「漁師のため」を心がけ、「港をよくしたい」と水産業振興にかけた情熱が江川漁業協同組合組合長から田辺漁業協同組合組合長、田辺湾漁業協同組合連合会会長そして和歌山県漁業協同組合連合会会長として指導的活動に花を開き、漁業界の発展と福祉の向上に大きく寄与した。

県中央漁業界における活動もさることながら、特に地域水産業振興に関しては、強力な指導力を発揮し、戦後燃油不足時における蓄電池の共同購入、共同修理、充電場の開設、共同浴場の建設、信用事業の実施、漁業共済事業の実施、製氷冷凍工場の建設、漁業協同組合合併と漁業構造改善事業の推進、漁港修築事業の推進等々、多岐にわたり絶大な力を注ぎ、本市のみならず水産業に携わる県民三万人の父と仰がれ、漁民の大きな支えとなっている。

また、日本水難救済会田辺救難所の所長等幹部として 35 年間率先して救助活動（出動回数 52 回）を行い、生命の危険を顧みず、海上生活者の義務感を超越する使命感をいなく崇高な精神の持主である。

その他、保育所に対する援助、プール建設、海洋少年団に対する援助等健全な青少年の育成への基礎づくりにも力を注いだ。

（略 歴）

15 歳の時から、いわし飼取網漁業に従事したのをはじめとして、秋刀漁流網漁業、焚入網漁業に従事し、かつお、まぐろ漁業船漁労長を経て、焚入網漁業船、棒受網漁業船を経営

昭和 7 年（1932 年）10 月	江川浦漁業協同組合総代
昭和 17 年（1942 年）8 月	同組合理事
昭和 19 年（1944 年）8 月	江川漁業会理事
昭和 24 年（1949 年）5 月	江川漁業協同組合組合長

第 10 回（昭和 54 年）

昭和 39 年（1964 年）10 月	田辺漁業協同組合組合長
昭和 24 年（1949 年）5 月	田辺湾漁業協同組合連合会会長
昭和 32 年（1957 年）5 月	和歌山県漁業協同組合連合会理事
昭和 41 年（1966 年）8 月	同連合会副会長
昭和 49 年（1974 年）1 月	同連合会会長

その他、公的機関の委員、公的団体の役員多数歴任

（受賞歴）

昭和 47 年（1972 年）勲五等瑞宝章

農林大臣表彰、水産庁長官表彰、和歌山県知事表彰（4 回）、第五管区海上保安本部表彰（4 回）、社団法人日本水難救済会表彰（10 回）、大日本水産会長表彰ほか多数の表彰を受ける。

（著 書）

『漁業回顧録』、『漁界一途』



つじむら きいち

辻村 喜一 氏

生年月日 大正 4 年 6 月 15 日生

住 所 田辺市湊

大正 4 年（1915 年）6 月 15 日、西牟婁郡三栖村（現田辺市下三栖）に生まれる。
郷土のすばらしいもの、失われる文化を次代の人たちのために保存したいという信念により、郷土発展に多大の貢献をした。

元来、美術に造詣が深く、自店の二階を開放して郷土芸術家の個展を開催し続け、その顕彰に努めたことにはじまり、郷土民具の収集を通じてこれら祖先の遺品を私することの非を痛感し、亡びゆく民具 600 点を高山寺民具館に寄進。続いて郷土玩具の復元、開発にあたり、これによって「紀州てまり」の郷土玩具を生ぜしめたほか、田辺藩の狩野派絵師真砂幽泉の研究とその顕彰、墨仙鈴木梅仙翁の研究とその業績をたたえての展覧会の開催（昭和 48 年（1973 年）秋）、加えて、昭和 46 年（1971 年）頃から青摺衣すなわち古くから宮中の特別儀式のときなどの衣の摺染に使われたといわれる山藍の研究を始め、染色学界で「藍色でなく緑色」と、幻の色素とされていた山藍による染色に取り組み、苦心研さんによって昭和 51 年（1976 年）末、定説を覆す「幻の藍色」を絹布に再現し学界から注目された。

現在もまだ知られざる謎多きこの研究を続け、常に郷土の何かを求めて地道な努力を重ねている。

なお、昭和 46 年（1971 年）9 月から昭和 49 年（1974 年）5 月まで田辺市の教育委員会委員長を務めた。

（略 歴）

昭和 12 年（1937 年）	金沢医科大学薬学専門部卒業
昭和 12 年（1937 年）4 月	東京六櫻社研究室入社
昭和 13 年（1938 年）5 月	陸軍応召、軍医学校薬剤部派遣
昭和 14 年（1939 年）2 月	大阪陸軍病院附
昭和 21 年（1946 年）6 月	外地陸軍病院貨物廠附を経て復員
昭和 21 年（1946 年）8 月	紀南病院薬局長
昭和 21 年（1946 年）12 月	同退職
昭和 22 年（1947 年）3 月	薬局開設
昭和 31 年（1956 年）1 月	有限会社紀南薬局設立、代表取締役

第 10 回（昭和 54 年）

昭和 44 年（1969 年）12 月 田辺市教育委員会委員

昭和 46 年（1971 年）9 月 田辺市教育委員会委員長

その他 田辺市学校保健協会副会長、田辺西牟婁学校薬剤師会会長、
和歌山県学校薬剤師会副会長及び田辺公衆電話協会会長等歴任

（著 書）

『古典に見る山藍染』、『現代の山藍論説』、『幻の山藍摺の歴史と実験』



あ か ぎ し ろ ぞ う
赤 木 四 郎 藏 氏

生年月日 明治 30 年 3 月 16 日生

住 所 田辺市南新町

明治 30 年 (1897 年) 3 月 16 日、西牟婁郡鮎川村 (現田辺市鮎川) に生まれる。

大正 10 年 (1921 年)、南新町の現在地に医師として開業して以来 60 年になんなんとする間、住民の保健指導、疾病治療に専心、要請があれば昼夜をいとわず往診に走るなど常に誠意をもってあたり幾多の尊い生命を救い、地域住民からは慈しみ深い父親のごとくに敬慕されている。

昭和 5 年 (1930 年) に医学博士の学位を取得し、始終医学の研究に努め、医師として戦前、戦後を通じて当地方の保健指導に貢献した業績は極めて大きく、また保健行政の分野においても積極的な協力を惜しまず、住民の予防接種、乳幼児検診、一般健康診断等率先してその任にあたったほか、学校保健医として児童生徒の保健指導にも永年にわたり献身的な努力を続けた。

さらに、医師会創立当時以来当地方の医界発展にも尽力した。この間、田辺市医師会所属准看護婦養成所を設立し、その所長として看護婦養成にあたり、看護婦の確保に尽力した。

また、医業に携わるかたわら茶道に精進し、茶禅一味の境涯の自得に向け、茶道表千家流に入門、各科目の伝授を受けた。昭和 23 年 (1948 年)、茶道表千家流の道を同じくする者 9 人により田辺松風会を設立し、以来会長として茶道の普及指導にあたっている。この会は、唐物点以上の資格を有する者による権威ある会で現在会員は 70 名を数え、特に会員には年 2 回表千家の宗家が直接指導されている。

83 歳の現在、なお矍鑠 (かくしゃく) として医業に、茶道にと活躍されている姿は頼もしい。

(略 歴)

大正 8 年 (1919 年) 3 月	京都府立医学専門学校卒業
大正 8 年 (1919 年) 4 月	京都府立病院助手
大正 10 年 (1921 年) 10 月	医師開業
昭和 5 年 (1930 年) 4 月	田辺第二尋常高等小学校校医
昭和 5 年 (1930 年) 8 月	医学博士称号取得
昭和 6 年 (1931 年) 3 月	西牟婁郡及び田辺医会理事

第 11 回 (昭和 55 年)

昭和 24 年 (1949 年) 2 月	田辺市医師会副会長
昭和 24 年 (1949 年) 4 月	田辺市立東陽中学校校医
昭和 27 年 (1952 年) 3 月	田辺市医師会長
昭和 27 年 (1952 年) 4 月	田辺市立高雄中学校校医
	田辺保健所運営協議会委員
	田辺市医師会所属准看護婦養成所長
昭和 32 年 (1957 年) 2 月	田辺地区納税貯蓄組合連合会長
昭和 33 年 (1958 年) 3 月	田辺市医師会長
昭和 33 年 (1958 年) 4 月	田辺保健所運営協議会委員
	田辺市医師会所属准看護婦養成所長
昭和 34 年 (1959 年) 7 月	和歌山県納税貯蓄組合連合会副会長
昭和 34 年 (1959 年) 10 月	田辺市国民健康保険運営協議会委員
昭和 36 年 (1961 年) 8 月	南新町町内会長
昭和 39 年 (1964 年) 4 月	田辺市医師会長
	田辺保健所運営協議会委員
	田辺市医師会所属准看護婦養成所長
昭和 39 年 (1964 年) 7 月	田辺市国民健康保健運営協議会委員
昭和 40 年 (1965 年) 7 月	田辺西牟婁地区献血推進協議会委員
昭和 41 年 (1966 年) 5 月	田辺市学校保健協会会長
昭和 47 年 (1972 年) 4 月	田辺市立中芳養幼稚園、小学校、中学校校医

(受賞歴)

昭和 36 年 (1961 年) 10 月	和歌山県知事表彰
昭和 39 年 (1964 年) 11 月	大阪国税局長表彰
昭和 41 年 (1966 年) 11 月	勲五等双光旭日章
昭和 54 年 (1979 年) 5 月	法務大臣表彰



あ べ や す お
安 部 辨 雄 氏

生年月日 明治 39 年 8 月 23 日生

住 所 田辺市湊

明治 39 年 (1906 年) 8 月 23 日、西牟婁郡湊村 (現田辺市湊) に生まれる。

戦争により日本の貴重な文化財は多く散逸した。文化国家として、今後の方向を目指す我が国にとって重要なことは古来より伝わる文化財を保存し、その活用を図り、国民の文化的向上に資するとする文化財保護法の目的を体し、田辺市の歴史の解明を自分に与えられた職務として、文化財を顕彰し、文化財を啓蒙し、失われる文化を次代の人たちのために保存したいという信念によって豊富な田辺の文化財保護に取り組み、多大な成果をあげられている。

特に、文明 3 年 (1471 年) から天保 10 年 (1839 年) までの田辺における一切の出来事を記載した「万代記」105 巻、天正 10 年 (1582 年) から慶応 2 年 (1866 年) までの田辺町会所の記録「田辺町大帳」130 巻、天保 11 年 (1840 年) から明治 2 年 (1869 年) までの役所からの達しなどの記録「御用留」43 巻は、いずれも田辺に関係する諸般のことがらを知り、その時代の庶民生活の実情がうかがわれ、社会事情の変遷を知ることのできる貴重な文献で、これらの解説は他の文化財関係者との合同作業とはいえ、氏の力に負うところが大きく、解説参加による功績は多大である。

また、「田辺文化財」「田辺市の文化財」の編集と「田辺文化財」「くちくまの」「上富田文化」その他多数の文化財関係誌への投稿や、地方史研究誌「紀州田辺藩における宗門改」、文化庁編文化財愛護地域活動事例集「文化財愛護都市宣言への歩みー田辺市」などの寄稿等も多く、文化財保護という地味で息の長い仕事を自分の生きがいとして地道に励んでいる当地方の文化財関係の重鎮の一人である。

なお、昭和 47 年 (1972 年) に文化庁から当市が文化財モデル地区に指定されたことを契機として市の社会教育指導員 (後に文化財指導員となる。) の職に就き、昭和 55 年 (1980 年) 現在も活躍中である。

南部高校在勤当時は、野球部長を約 20 年間務め、スポーツに対する情熱もある一面を見せている。

(略 歴)

昭和 7 年 (1932 年) 3 月 国学院大学国史学科卒業

昭和 8 年 (1933 年) 6 月 大阪市第四西野田尋常小学校教諭

第 11 回 (昭和 55 年)

昭和 10 年 (1935 年) 10 月	大阪市立第四西野田青年学校教諭
昭和 21 年 (1946 年) 1 月	大阪市立海老江東国民学校教諭
昭和 21 年 (1946 年) 4 月	和歌山県立日高高等女学校教諭
昭和 23 年 (1948 年) 4 月	和歌山県立南部高等学校教諭
昭和 30 年 (1955 年) 8 月	田辺市文化財調査会委員
昭和 37 年 (1962 年) 4 月	田辺市文化財審議会委員
昭和 38 年 (1963 年) 12 月	紀南文化財研究会員 (発会)
昭和 43 年 (1968 年) 3 月	紀南文化財研究会理事長
昭和 43 年 (1968 年) 4 月	和歌山県立南部高等学校講師 和歌山県立田辺高等学校講師
昭和 45 年 (1970 年) 5 月	和歌山県文化財保護指導員
昭和 47 年 (1972 年) 5 月	田辺市社会教育指導員
昭和 49 年 (1974 年) 4 月	田辺市文化財指導員
昭和 50 年 (1975 年) 3 月	紀南文化財研究会副会長

その他 和歌山県文化財研究会員、地方史研究協議会員 (東京)、和歌山県誌編さん協力委員、熊野路編さん企画編集委員、紀南文化財研究会機関紙くちくまの編集員

昭和 35 年 (1960 年) 度	和歌山県遺跡調査員
昭和 36 年 (1961 年) 度	同上
昭和 47 年 (1972 年) 度	和歌山県文書調査員 (有田川流域文書)
昭和 52 年 (1977 年) 度	和歌山県文書調査員 (富田川流域、田辺市文書)
昭和 38 年 (1963 年) 刊	上南部誌 (南部川村誌) 編集顧問
昭和 46 年 (1971 年) 刊	田辺市誌 (2) 監修委員

昭和 33 年 (1958 年) 10 月	万代記解読参加
昭和 35 年 (1960 年) 3 月	万代記第 1 巻刊行担当
昭和 46 年 (1971 年)	御用留解読参加
昭和 48 年 (1973 年)	田辺町大帳解読参加
昭和 53 年 (1978 年)	御用留目次作成参加
昭和 54 年 (1979 年)	田辺町大帳目次印刷参加
昭和 55 年 (1980 年)	同上

(受賞歴)

昭和 53 年 (1978 年) 6 月	文化庁長官表彰
----------------------	---------



お お た こ う じ ろ う

太田 耕二郎 氏

生年月日 明治 38 年 5 月 17 日生

住 所 田辺市湊

明治 38 年 (1905 年) 5 月 17 日、西牟婁郡鮎川村 (現田辺市鮎川) に生まれる。

蘚苔植物の研究者として、昭和 56 年 (1981 年) 現在、当地方における第一人者である。日本人の蘚苔に対する愛着は古く、和歌や詩の世界にも表われ、室町時代に発展した禅宗寺院の庭の成り立ちに最も多く表現されている。日本人の精神史ないしは国民的感情の表われと蘚苔のもつ可憐清楚で物静かな姿は、日本的な美の一大要素として強く結びつくものがある。

教職長く、戦前戦後を通じ学校教育の向上、教育行政の発展に多大の貢献をされた氏は、自然科学、中でも植物学の分野に造詣が深く、特に顕花植物の生態についての調査研究を積まれていたが、南方熊楠全集と宇井縫蔵氏の藻汐草などの文献から蘚苔のもつ味わいと奥深さ、それに動植物との関係に心を奪われ、紀南地方における蘚苔植物の生息分布の調査研究の道へと入った。

昭和 56 年 (1981 年) 現在までの収蔵標品点数は蘚類 7,149 点、苔類 1,602 点で、品種は 668 種にのぼり、うち 9 割が紀南地方のものと言われる。現在、日本蘚苔類学会員として活躍し、学会誌に「私のコケ標本」を投稿。また田辺文化財審議会委員として市教育委員会発行の「田辺の文化財」の編さん、解説にもあたり、同委員会の「田辺文化財」に神島の生物、田辺市における特異植物、田辺市における外来植物、田辺市近郊の蘚苔類などについて毎回寄稿、編集を続けている。

一方、南方熊楠生物学の研究も進められ、南方熊楠全集第 10 巻中「神島の調査報告」は、昭和 32 年 (1957 年) の田辺文化財誌第 1 号に掲載した氏の全文を底本とされているほか同全集月報、南紀生物誌、くちくまの誌、すさみ町誌に安藤みかん、当地方の蘚苔類その他について執筆、寄稿を行うなどその他多数の関係誌等に記録を残されている。氏の旺盛な研究心、深い知識は万人の認めるところで、県内における蘚苔目録大成に向かって今もなお採集、調査を続け、その状況を詳細に記録、標品保存を綿密に行い、これらの研究を通し人びとに風光明媚な恵まれた自然環境を保護する正しい理解と認識を深めさせ、その貴重な自然文化財を後世へ譲り伝えようとする氏の心は崇高である。

なお、田辺市が昭和 47 年 (1972 年)、48 年 (1973 年) の両年度文化庁の文化財愛護モデル地区の指定を受け、また昭和 48 年 (1973 年) 文化財愛護都市の宣言をしたが、それらに至る氏の功績は大きい。昭和 56 年 (1981 年) 現在、町内会長をも務め、地域の発展にも努力されているほか、各方面にたゆまざる活躍をされている。

第 12 回 (昭和 56 年)

(略 歴)

大正 15 年 (1926 年) 3 月	和歌山師範学校第二部卒業 西牟婁郡田辺第一尋常高等学校訓導 (昭和 2 年 (1927 年) 3 月和歌山師範学校専攻科乙類修了)
昭和 9 年 (1934 年) 4 月	田辺町立田辺青年訓練所指導員嘱託
昭和 10 年 (1935 年) 3 月	和歌山県立田辺高等家政女学校教授嘱託
昭和 10 年 (1935 年) 6 月	田辺町立田辺第一青年学校助教諭 (昭和 16 年 (1941 年) 6 月教諭)
昭和 16 年 (1941 年) 3 月	和歌山県立田辺高等女学校教授嘱託
昭和 17 年 (1942 年) 3 月	日置町日置国民学校教頭、日置町立日置青年学校教諭
昭和 19 年 (1944 年) 3 月	西牟婁郡生馬国民学校長、西牟婁郡岩田村ほか 4 ヶ村 学校組合立上富田青年学校教諭兼任
昭和 21 年 (1946 年) 3 月	西牟婁郡白浜国民学校長、富田青年学校教諭兼任
昭和 22 年 (1947 年) 3 月	田辺市立田辺第二国民学校勤務、和歌山県視学事務嘱託、和歌山県西牟婁地方事務所学務課長心得
昭和 23 年 (1948 年) 3 月	和歌山県西牟婁地方事務所視学、教育民生課長
昭和 23 年 (1948 年) 5 月	和歌山県西牟婁地方事務所教育課長
昭和 23 年 (1948 年) 11 月	西牟婁地方分局長、田辺市立田辺第一小学校教諭
昭和 24 年 (1949 年) 3 月	和歌山県教育委員会指導主事兼務
昭和 25 年 (1950 年) 3 月	田辺市立明洋中学校長
昭和 34 年 (1959 年) 4 月	田辺市立東陽中学校長
昭和 37 年 (1962 年) 7 月	田辺市教育委員会事務嘱託
昭和 38 年 (1963 年) 8 月	田辺市教育委員会学校教育課長、田辺市立女子文化学園長兼務
昭和 25 年 (1950 年) 5 月	西牟婁地方科学教育研究会会長
昭和 29 年 (1954 年) 4 月	西牟婁地方中学校校長会会長
昭和 30 年 (1955 年) 4 月	田辺市文化財調査会委員
昭和 30 年 (1955 年) 5 月	和歌山県中学校校長会副会長
昭和 31 年 (1956 年) 5 月	近畿地区中学校校長会理事 (うち副会長 1 年歴任)
昭和 32 年 (1957 年) 4 月	田辺市社会教育委員
昭和 33 年 (1958 年) 4 月	田辺市公民館運営審議会委員
昭和 34 年 (1959 年) 2 月	田辺市立図書館協議会委員
昭和 37 年 (1962 年) 4 月	田辺市文化財審議会委員 和歌山県退職校長会西牟婁支部長
昭和 38 年 (1963 年) 12 月	紀南文化財研究会副会長
昭和 42 年 (1967 年) 5 月	大塔村森林組合監事
昭和 44 年 (1969 年) 1 月	田辺市文化財審議会委員
昭和 46 年 (1971 年) 4 月	和歌山県西牟婁郡文化財保護員
その他	日本蘚苔類学会員、田辺市町内会連絡協議会理事 (うち会長 1 年、副会長 2 年歴任)、神田町内会長、田辺市人権擁護連盟理事

(受賞歴)

昭和 53 年 (1978 年) 4 月	勲五等瑞宝章
----------------------	--------



よしだ つねしろ
吉田 恒四郎 氏

生年月日 明治 42 年 8 月 13 日生

住 所 田辺市新屋敷町

明治 42 年 (1909 年) 8 月 13 日、西牟婁郡田辺町 (現田辺市中屋敷町) に生まれる。

無限の可能性を秘めた未来のある子どもたち、その子どもたちに夢と希望を与え、清らかで豊かな心を養い育てようとする信念に燃え、50 余年もの長きにわたり数多くの実演童話と紙芝居を通し児童文化の振興と青少年の情操教育に貢献、昭和 57 年 (1982 年) 現在もなお矍鑠 (かくしゃく) として活躍されている。

昭和 5 年 (1930 年) に「夢と希望と幸福を」を旗印に同志 5 名と田辺童話会を結成し、童話大会の開催をはじめ各地域における土曜、日曜学校、小学校、幼稚園それに子ども会等へ積極的に赴き、子どもたちに童話を聞かせてまわる一方、昭和 10 年 (1935 年) には自塾において童話に親しむ「明朗会」と称する塾生の会を開設して、以来連綿として子どもたちの夢と希望を膨らませ続けてきた。

さらに近年に至って田辺童話会を発展的に改組し、昭和 45 年 (1970 年) に紀南童話連盟を新たに結成、青少年の幸福のために日夜励んで来られている。

実演童話あるいは紙芝居などが、持ち前の巧みな話術、表現の豊かさをもって子どもたちの心をとらえ、そして子どもたちが人生を歩んでいく上における教訓と示唆となった。この地味でしかも根気のいる一連の活動は、戦前戦中そして戦後の混乱時、さらに経済成長時を通して人びとの心にある時は明るい希望を、ある時は反省と指針を与えたことはいうまでもない。そしてまた、全ての人びとにメルヘンの世界のあたたかさを大切に、それを失うことなくいつまでも親しまれ語り継がれていくことを願い、古くから伝わる童話約 200 話を「子どもに聞かせるお話」と題して地方紙に紹介し、意欲的な寄稿活動をしていることは、失いつつある青少年のあたたかい人間味のある心を呼び戻す一つの手立てとして貴重である。

また一方、明治 8 年 (1875 年) に福路町において珠算塾を開いた故吉田光成氏を祖父とし珠算一家の中で育った氏は、昭和 5 年 (1930 年) に父の経営する珠算塾の後継者として多くの子弟に珠算技能の普及と向上の指導にあたられるほか、当市を中心とした百年余にわたる珠算塾の変遷史をまとめあげ紹介されるなど

第 13 回 (昭和 57 年)

珠算の移り変わりの生き字引として、また当地方の珠算界の長老として今なお活躍されており地方文化の向上には欠かせない財産といえる。

(略 歴)

大正 15 年 (1926 年) 3 月	和歌山県立田辺商業学校 (四年課程) 卒業
昭和 5 年 (1930 年) 4 月	吉田珠算研究会教授として父の後を継ぐ
昭和 5 年 (1930 年) 6 月	田辺童話会を結成
昭和 10 年 (1935 年) 4 月	実演童話「明朗会」開設
昭和 12 年 (1937 年) 12 月	昭和幼稚園囑託
昭和 27 年 (1952 年) 11 月	田辺市立田辺第二小学校育友会長
昭和 31 年 (1956 年) 10 月	和歌山県知事認可吉田第二珠算学校長
昭和 33 年 (1958 年) 4 月	和歌山県珠算振興会副会長 田辺市立東陽中学校育友会長
昭和 45 年 (1970 年) 4 月	紀南童話連盟を結成、副会長
昭和 46 年 (1971 年) 4 月	和歌山県各種学校田辺西牟婁支部長
昭和 54 年 (1979 年) 6 月	珠算名誉段位 9 段取得 (文部省認可社団法人全国珠算 学校連盟)
その他	新屋敷町内会顧問 (新屋敷町内会長歴任) 新屋敷町老人会長

(受賞歴)

昭和 48 年 (1973 年) 5 月	感謝状 (社団法人和歌山県計算実務協会名誉会長、日本珠算連盟会長より珠算教育の振興発展に寄与)
昭和 52 年 (1977 年) 10 月	表彰状 (和歌山県下各種学校長より永年功労による)
昭和 53 年 (1978 年) 9 月	感謝状 (日本珠算連盟名誉会長、日本商工会議所会頭より連盟の発展に寄与)
昭和 55 年 (1980 年) 10 月	感謝状 (和歌山県知事より私立学校教育の充実振興に寄与)



ま な ご きゅういち
真砂 久一 氏

生年月日 明治 37 年 3 月 17 日生

住 所 田辺市新庄町

明治 37 年 (1904 年) 3 月 17 日、西牟婁郡新庄村 (現田辺市新庄町) に生まれる。
当地方の植物研究家として知られている。

家業が山林業であるところから、早くから林業そのものの発展に力を注ぎ、森林組合の育成、山村生活の向上、林道の開設に尽力された。

東京帝国大学農学部林学実科を卒業後、約 8 か年、大阪営林局をはじめ各地の営林署勤務を続けたが、根っからの植物好きであったことに加えて、昭和 3 年 (1928 年)、神戸営林署で植生調査を担当するようになって植物に対しての感興が強くなり、牧野富太郎、田代善太郎両先生の指導を受ける。昭和 25 年 (1950 年) 頃から本格的に植物観察研究をはじめ、その数は 1,500 種にのぼる。

“路地に、提防に生えて、ただ「雑草」と片付けられ、人目にとまらぬ草々。時には花をつけて生命の息吹を強く訴えていても、名の知られぬ草々が多い。草々にはみな名前があり、物語、ロマンスがある。”と、昭和 47 年 (1972 年) 1 月 22 日付を第 1 回として地方新聞紙上に、それぞれの時期にひっそりと、あるいはたくましく生きる草木についての解説「道草抄」を連載、草木とその草木にまつわる伝説、歌、詩、俳句、民俗等を紹介し、以来連綿として続けられ、昭和 58 年 (1983 年) 現在まで 370 回余の多くを数える。

また NHK FM ラジオ放送番組「夕べのひととき」で週 1 回の野草歳時記の部門を担当し、昭和 48 年 (1973 年) 4 月から 2 年間、100 回にわたってその放送原稿の執筆に携わった。

一方、野草をみんなで観察し、そして知り、自然愛護に努めようと「みちくさ会」を結成し、市民の自由な参加のもとで野草の観察会を主宰、すでに 65 回にわたって山野をかけめぐり参加者の指導にあたってきたが、こうした研究活動は、郷土の草木の観察研究だけにとどまらず、加えて郷土の草木と文学、民俗などのかかわりあいについての検索研究に特色が見られ、それらを通して草木愛護、自然愛護の心の普及に努められている。

そのほか「紀南文化財」「花蜜柑」「くちくまの」等にも執筆活動が続けられている。

また、幼児教育に対する造詣も深く、多年にわたる幼稚園長の職を通じて、自主的に創造性に富み、自立、自律的な人となる基礎を築く保育のあり方を研究しながら、幼稚園教育の六領域 (健康、自然、社会、言語、絵画制作、音楽リズム) の平均的向

第 14 回 (昭和 58 年)

上を目指して今も活躍が続けられている。

(略 歴)

大正 14 年 (1925 年) 3 月	東京帝国大学農学部林学実科卒業
昭和 2 年 (1927 年) 6 月	農林省大阪営林局勤務 (のち、神戸、高山、岐阜営林署を経て同 10 年 3 月退職)
昭和 10 年 (1935 年) 4 月	山林業
昭和 10 年 (1935 年) 5 月	西牟婁郡鮎川村愛賀合土工森林組合組合長理事
昭和 11 年 (1936 年) 1 月	西牟婁郡三川村深小土工森林組合組合長理事
昭和 14 年 (1939 年) 1 月	西牟婁郡新庄木炭商業組合理事長
昭和 15 年 (1940 年) 4 月	田辺警察署物価調査委員
昭和 19 年 (1944 年) 4 月	和歌山県立田辺中学校教授嘱託、生物学担当
昭和 21 年 (1946 年) 3 月	田辺製材木工株式会社社長
昭和 22 年 (1947 年) 4 月	紀州林業懇話会幹事
昭和 27 年 (1952 年) 7 月	西牟婁郡新庄村教育委員長
昭和 29 年 (1954 年) 4 月	西牟婁木炭協会会長
昭和 29 年 (1954 年) 11 月	日本林業同友会理事
昭和 30 年 (1955 年) 4 月	西牟婁郡大塔村三川森林組合組合長理事
昭和 30 年 (1955 年) 5 月	田辺市議会議員
昭和 31 年 (1956 年) 8 月	田辺文化財調査会委員
昭和 33 年 (1958 年) 8 月	新庄農業協同組合組合長理事
昭和 34 年 (1959 年) 1 月	田辺市立図書館協議会委員
昭和 34 年 (1959 年) 4 月	田辺市立新庄幼稚園園長
昭和 35 年 (1960 年) 9 月	西牟婁郡大塔村森林組合理事
昭和 36 年 (1961 年) 4 月	全国幼稚園施設協議会常任理事
昭和 39 年 (1964 年) 8 月	西牟婁郡幼稚園教育研究会会長
昭和 43 年 (1968 年) 12 月	田辺市立図書館協議会委員長
昭和 45 年 (1970 年) 5 月	和歌山県公立幼稚園教育研究会副会長
昭和 48 年 (1973 年) 5 月	田辺市立幼稚園教育研究会会長
昭和 51 年 (1976 年) 4 月	西牟婁郡幼稚園教育研究会会長
昭和 54 年 (1979 年) 4 月	全国幼稚園教育研究協議会和歌山県支部長
その他	大日本山林会評議員

(受賞歴)

昭和 31 年 (1956 年) 9 月	大塔村深谷隧道建設功勞により「真砂久一頌徳碑」を建立される
昭和 52 年 (1977 年) 4 月	勲五等瑞宝章
昭和 53 年 (1978 年) 11 月	幼稚園勤続 20 年表彰

(著 書)

『米欧林業視察旅行記』、『子ども＝子ども期の人間』
その他、紀南文化財誌、花蜜柑、くちくまの、林業経営者協会月報、地方新聞などに寄稿



た の お か て つ い ち

田ノ岡 鉄一 氏

生年月日 大正 11 年 12 月 20 日生

住 所 田辺市芳養町

大正 11 年 (1922 年) 12 月 20 日、日高郡龍神村 (現田辺市龍神村東) に生まれる。和歌山県下における数少ない木版画家として著名である。

日本の版画は、世界によく知られている。もちろん浮世絵としての版画であり、江戸時代の中期から鈴木春信、喜多川歌麿、葛飾北斎、歌川広重らによって築かれた色彩木版の芸術は、まさしく世界にまれな水準の高さと独自性に達していた。

氏は、示現会に会友として一時期籍を置き水彩画の道を歩むが、日本版画の持つ素朴さの中に深みのある情趣に次第に心をひかれていった。そして、その伝統に学び、受け継ぎ、それを広げていくべく昭和 47 年 (1972 年) 頃から馬淵聖画伯 (現 (昭和 59 年当時) 日本版画会 (以下、「日版会」) 会長) に師事し、本格的に木版画創作の道へと入る。その作風は、郷土の身近な風物を画題とし、精緻で力強い。また、時には版画特有のやさしい素朴な美しさを表現し、その深み、味わいのある作品は鑑賞する多くの人々に深い感銘を与えている。

中でも、屋根風景を画題にした創作が多く、「風雪にさらされ、古く年老いた日本の屋根。そこには働く瓦師の智恵と苦労があり、また瓦一枚一枚には各々異なった表情が生きている。そこに日本の美を感じる。」と語る氏の風景画には定評がある。

江戸時代に発展した錦絵 (多色刷版画、浮世絵版画) は、絵師、彫師それに摺師など多数の専門師の分業制作によって完成され、今に残されている。それほどに一枚の版画を制作するまで、自画、自刻、自摺と、その作業は時を要し、まことに複雑困難なものがある。

氏は、これまでに日本美術展覧会第二科において入選 7 回、日版会新人賞及び日版会賞の受賞をはじめ、光風会展、日版会展、県美術展覧会 (招待出品) 等々に毎回出展し、制作数約 100 点を数え、いずれも力作ぞろいである。

作品「高山寺」は、昭和 56 年 (1981 年) 東京都美術館で開催された第 22 回日版会の案内状挿絵に採用されているほか、昭和 56 年 (1981 年) 田辺郵便局発行の切手帳表紙及び同年 2 月発売の記念葉書にも「高山寺」「扇ヶ浜夕陽」及び「高雄曙光」が挿絵として採用されている。

一方、そのような創作活動のかたわら、昭和 57 年 (1982 年) 度には寸暇を割いて公民館において版画講座を開催し講師を務め、さらに昭和 58 年 (1983 年) 4 月には田辺版画同好会を結成し、主宰者として活躍するなど後進の育成に励んでいる。なお、本年 (昭和 59 年当時) の第 25 回日版会展に同好会から 9 名が出品し、全員が入賞、入

第 15 回 (昭和 59 年)

選を果たした。

また昭和 59 年 (1984 年) 6 月、市内で個展を開催し 60 点の作品を発表した。

(略 歴)

昭和 17 年 (1942 年) 3 月	和歌山県師範学校卒業
昭和 17 年 (1942 年) 4 月	上山路村立東国民学校訓導
昭和 22 年 (1947 年) 4 月	上山路村立上山路中学校教諭
昭和 27 年 (1952 年) 4 月	田辺市立田辺第一小学校教諭
昭和 35 年 (1960 年) 4 月	西牟婁地方教育事務所指導主事
昭和 37 年 (1962 年) 4 月	上富田町立岩田小学校校長 西牟婁地方美育研究会会長
昭和 43 年 (1968 年) 4 月	田辺市立三栖中学校校長
昭和 48 年 (1973 年) 4 月	田辺市立新庄小学校校長
昭和 49 年 (1974 年) 4 月	西牟婁地方美育研究会会長
昭和 52 年 (1977 年) 4 月	田辺市立新庄第二小学校校長
昭和 54 年 (1979 年) 4 月	田辺市立上芳養小学校校長
昭和 56 年 (1981 年) 8 月	日版会審査員 (以後、毎回連続して務める。)
昭和 57 年 (1982 年) 4 月	田辺市万呂公民館版画講座講師 田辺版画同好会結成、主宰
昭和 58 年 (1983 年) 4 月	日版会会務委員 田辺美術協会副会長
昭和 59 年 (1984 年) 4 月	和歌山県美術家協会理事 田辺市美術展覧会運営委員会常任委員及び審査員
その他	光風会会員、日版会会員及び会務委員、和歌山県美術家協会理事、 田辺美術協会副会長、田辺市美術展覧会運営委員会常任委員及び審査員、田辺版画同好会主宰

(受賞歴等)

昭和 48 年 (1973 年) 8 月	第 14 回日版会展初出品 新人賞受賞
昭和 49 年 (1974 年) 4 月	第 60 回光風会展初出品
昭和 49 年 (1974 年) 8 月	日版会会友に推挙される。以後、現在まで連続出品
昭和 49 年 (1974 年) 10 月	第 6 回日本美術展覧会初出品 入選、以後 7 回入選
昭和 50 年 (1975 年) 8 月	日版会会員に推挙される。
昭和 51 年 (1976 年) 4 月	光風会会友に推挙される。以後、現在まで連続出品
昭和 52 年 (1977 年) 8 月	第 18 回日版会賞受賞
昭和 58 年 (1983 年) 4 月	光風会会員に推挙される。



ひ え だ か ず ほ

稗田 一穂 氏

生年月日 大正 9 年 8 月 23 日生

住 所 東京都世田谷区

大正 9 年（1920 年）8 月 23 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市新屋敷町）に生まれる。
現代日本画壇における創造美術、新制作協会日本画部、創画会と続く大きな流れの中で活躍されている屈指の作家である。

「幼い頃から画家になりたくて、いつの間にか年月が経ち描き続けてきましたが、その時々が精いっぱい、思いつくまま後先を慎重に考えてもみない、貧しい作品の数々を重ねてきたと思います。（中略）戦後の日本画の危機が叫ばれた時代に私は育ちました。今の周囲はそのような雰囲気ではありませんが、私にはあの頃と少しも変わっていないように思えます。迷いながらこれからも道は続くと思いますが、切実な危機感を心に抱きながら奥深いものを求めて精進したいと思います。」

昭和 59 年（1984 年）11 月の朝日新聞社主催稗田一穂展での氏の挨拶の一部である。謙辞の中にも作家としての心意気がうかがえる。

東京美術学校在学中から大日本海洋美術展、大日本美術院展をはじめ各展覧会で活躍、東京美術学校の卒業制作展では「午後」を出品、川端奨学賞を受ける。

戦後、昭和 21 年（1946 年）の第 1 回日本美術展覧会（以下、「日展」）に「東北の秋」、同 22 年（1947 年）の第 3 回日展に「羽黒の御搭」を出品し、それ以来、創造美術展、新制作協会展、選抜秀作美術展、日本国際美術展、現代日本美術展、凡樹画社展、野火会展、樗会日本画展、朴花社展、朱門会日本画展、降鼎会日本画展、潮音会展、遊星展、創画展、日本六月の会展、日本秀作美術展、桐葉会展、拾彩展等々、それぞれ数次にわたる展覧会その他への出品は数知れず、個展、二人展など複数の画家展を含めて枚挙にいとまがなく、また海外展にも多く出品し、それぞれ絶賛、好評を博することの連続である。

さらに、昭和 42 年（1967 年）には、法隆寺金堂壁画再現模写の開始にあたって、その一員として五号壁（半跏形菩薩像）、七号壁（聖観音菩薩像）の模写を行う。

氏は、田辺市に生まれ、しばらくして大阪市に住むことになるが、少年期の夏休みには、祖母のいる田辺に帰り、その海岸等の美しさをふんだんに味わったようであり、また、那智の滝の威容に強い印象を受けたという。そんな画伯の中に生まれた、その繊細で、鋭敏な美感覚、デザインの構成力、ユニークな詩的感覚、異色ある芸術感覚が作品に余すところなく表わされ、稗田芸術の内容形式が現代日本画界における位置を揺るぎないものとしている。

代表作に、「魚の群れ」「奇異鳥」「流翳」「流淵」「流紋」「花精」「霧を渡る蝶」

第 16 回 (昭和 60 年)

「春野」「朧春」「海の詩」「幻想那智」「夏去る」「帰り路」「孔雀と女」「雪止む」その他多数の作品がある。

なお、昭和 59 年 (1984 年) 6 月開館した紀南文化会館の緞帳の原画「海の音」も氏の作品であり、氏から寄贈を受けたものである。

(略 歴)

昭和 18 年 (1943 年) 9 月	東京美術学校日本画科卒業、川端奨学賞受賞
昭和 18 年 (1943 年) 10 月	大阪市立工芸学校嘱託教員
昭和 19 年 (1944 年) 5 月	上野美術研究所 (現東京国立文化財研究所) 嘱託
昭和 41 年 (1966 年) 4 月	東京芸術大学美術学部日本画科非常勤講師
昭和 41 年 (1966 年) 11 月	法隆寺金堂壁画再現事業に参画、五号壁 (半跏形菩薩像)、七号壁 (聖観音菩薩像) を模写
昭和 45 年 (1970 年) 1 月	東京芸術大学美術学部日本画科助教授
昭和 45 年 (1970 年) 11 月	和歌山県美術展特別展に出展
昭和 47 年 (1972 年) 4 月	東京芸術大学美術学部日本画科教授 教科用図書検定調査審議会委員
昭和 49 年 (1974 年) 5 月	創画会結成、同会員となる
昭和 52 年 (1977 年) 7 月	大学設置審議会専門委員
昭和 53 年 (1978 年) 11 月	教科用図書検定調査審議会委員に再任
昭和 55 年 (1980 年) 11 月	教科用図書検定調査審議会委員に再任
昭和 57 年 (1982 年) 11 月	教科用図書検定調査審議会委員に再任
昭和 59 年 (1984 年) 4 月	紀南文化会館大ホール緞帳「海の音」制作、原画を田辺市に贈る
昭和 59 年 (1984 年) 11 月	教科用図書検定調査審議会委員に再任

(受賞歴等)

昭和 23 年 (1948 年) 9 月	第 1 回創造美術展で奨励賞受賞
昭和 24 年 (1949 年) 9 月	第 2 回創造美術展で奨励賞受賞
昭和 25 年 (1950 年) 5 月	創造美術準会員に推挙される
昭和 26 年 (1951 年) 9 月	新制作協会会員に推挙される
昭和 53 年 (1978 年) 10 月	第 2 回長谷川仁記念賞受賞



そ が べ げんゆう

曾我部 玄雄 氏

生年月日 大正 13 年 2 月 12 日生

住 所 田辺市稲成町

天は語らず 大地をして語らしむ。天は語らず 人をして語らしむ。

もし、過去と現在が断絶した無縁のものであるならば、過去のことを知っても何の役にも立たない。同様に、未来が現在と何の関係もなく始まるのならば、我々は来るべき未来に対して何の義務も責任もないことになる。しかし、仮に過去を失い、現在を伝えなければ、将来の発展と繁栄はあり得ない。

当地方は、古くから文化の栄えたところとして数多くの優れた文化財が今も残存している。私たちは、その残してくれた文化遺産によって先人の偉大さに学び、生かし、更に将来に伝承していく責務がある。

氏は、大正 13 年（1924 年）2 月 12 日、西牟婁郡稲成村（現田辺市稲成町）に生まれる。

長年、田辺市文化財審議会委員長、紀南文化財研究会副会長として、国民的財産である貴重な文化財の発掘、調査研究、保全保護に努めるとともに愛護精神の高揚にその豊富な学識をもってあたり、多大の業績を残してきた。

古義真言宗御室派高山寺の第 19 世住職である氏は、当寺に古くから所蔵の県指定文化財「木造聖徳太子孝養立像」をはじめ、「紙本水墨寒山拾得図」「紙本水墨柳と鳥図」「絹本水墨淡彩人物図」「三番日含」の保存と国指定史跡「高山寺貝塚群」発掘に尽くし、これら貴重な後世への遺産を国及び県の文化財として指定を受けるとともにその完全保護に努める。

田辺市が昭和 47 年（1972 年）度、同 48 年（1973 年）度文化庁の文化財愛護モデル地区指定を受け、更には昭和 48 年（1973 年）の文化財愛護都市宣言へと進む先鞭をつけた氏の役割は大きく、いずれも氏が田辺市文化財審議会委員長及び紀南文化財研究会副会長在任中のことであって、その文化財に対する熱意、情熱を垣間見るものである。

中でも第 1、2、3 号からなる「高山寺貝塚群」から出土された押型文尖底土器は、早期縄文時代の貴重なものとして高山寺式土器と名付けられ、ほかにも数多くの石器、獣骨、貝類が発掘されるなど、それらは 6～7 千年前の当地方の最古の文化を伝える考古学上貴重な遺跡として知られ、貝塚出土碑の建立、貝塚記念碑休憩所の設置など文化財愛護精神の高揚に努めるとともに、寺本堂の地階に考古展示室を開設、所蔵の考古品、民具等の公開を通し文化財思想の普及に力を注ぐ。

また一方、その堂々とした体幅をもって若い時から柔道によってその体を鍛えてき

第 16 回 (昭和 60 年)

たが、その信念は技を覚え体を鍛えるだけでなく、心を鍛え、人間を鍛えるという講道館柔道そのものであった。田辺市柔道協会会長として長く務めるとともに、自ら柔道曾我部道場を開設し、当地方におけるその普及、指導にあたる。長年田辺市体育連盟の副会長をも務め、スポーツ田辺の先導的役割を果たされた一人として昭和 52 年 (1977 年) 10 月田辺市スポーツ功労表彰を受ける。

講道館柔道 5 段、都山流尺八免許皆伝

(略 歴)

昭和 20 年 (1945 年) 10 月	高野山大学中退
昭和 23 年 (1948 年) 6 月	田辺市立明洋中学校教員
昭和 25 年 (1950 年) 1 月	古義真言宗御室派高山寺第 19 世晋山
昭和 25 年 (1950 年) 4 月	田辺市仏教会副会長
昭和 25 年 (1950 年) 11 月	保護司
昭和 26 年 (1951 年) 4 月	田辺市柔道協会副会長
昭和 31 年 (1956 年) 4 月	田辺市稲成公民館館長
昭和 32 年 (1957 年) 8 月	田辺市体育指導員
昭和 34 年 (1959 年) 3 月	人権擁護委員
昭和 36 年 (1961 年) 4 月	田辺市体育連盟副会長
昭和 37 年 (1962 年) 4 月	田辺市仏教会会長
昭和 38 年 (1963 年) 3 月	田辺市教育委員
昭和 40 年 (1965 年) 4 月	田辺市柔道協会会長
昭和 41 年 (1966 年) 1 月	民事家事調停委員
昭和 42 年 (1967 年) 1 月	紀南文化財研究会副会長
昭和 43 年 (1968 年) 4 月	合気道田辺支部長
昭和 45 年 (1970 年) 6 月	田辺市文化財審議会委員長
昭和 47 年 (1972 年) 4 月	和歌山県立博物館審議会委員

(受賞歴)

保護司永年功労表彰 (法務大臣表彰、近畿地方更生保護委員会委員長表彰、和歌山保護観察所長表彰 4 回)

調停委員永年功労表彰 (和歌山地方裁判所長表彰)

田辺市スポーツ功労表彰 (市長表彰)

田辺市社会教育功労賞 (市長表彰) 等々



よしのぶ えいじ
(故) 吉信 英二氏

生年月日 明治 24 年 12 月 25 日生

住 所 田 市湊

明治 24 年 1891 年 12 月 25 日、有田 田殿村 現有田 有田川町 に生まれる。

戦後の混乱した社会にあつて直接住民に接し、永年にわたり市民の教 育の向上、生活文化の振興、社会福祉の増 進に献 身的な努力を 重ね、社会教育、社会福祉活動の原動力となった功績は に多大であり、尊いものである。

特に昭和 31 年 1956 年 田 市東 公民 初代 として就任されるや、次代を担う 少年は かな情操を持ち、 代生活にふさわしい倫理感と社会 帯感を備える必要があると自らが 師を務め、多くの 年を我が子のごとく指導し、「 年学級 座」「曜 座」を 、今では公民 の代名 のごとく呼ばれ、それは今なお脈々と受け継がれている。

また、社会教育の使命を体し、その精神を くため、あるときは恵まれない施 設の中で、あるときは乏しい 政の中で地域住民のために り尽くすことのできない献 けを続けられた。

また、社会福祉事業に深い理解と熱意を有する氏は民生児童委員、保 護司として 々と地味な、しかも困 難な事業に尊い社会奉仕の念と温かい人 愛をもって取り組まれた。

生涯を じて研さんに努められ、特に日本の外交に興味を抱かれていた氏は 80 歳になられた時「日本の外交史」を書いておきたいと執筆に着手、このほど 志をついで発刊された。

略 歴

明治 45 年 1912 年 月 和歌山師範学校卒

大正 10 年 1921 年 12 月 文 省中等学校教員検定 に合格

大正 11 年 1922 年 月 和歌山県立田 中学校教

昭和 15 年 1940 年 月 和歌山県立熊 林業学校教授嘱託

第 17 回 (昭和 61 年)

昭和 15 年 1940 年 月 私立神港中学校 現神港学園 等学校 教
昭和 25 年 1950 年 月 和歌山県立熊 等学校 師

昭和 31 年 1956 年 月 田 市東 公民
昭和 22 年 1947 年 月 田 市民生児童委員
昭和 24 年 1949 年 12 月 保 司
昭和 27 年 1952 年 月 田 市社会福祉協 会副
昭和 30 年 1955 年 月 地区改善審 会委員
昭和 34 年 1959 年 10 月 田 市国民健康保 営協 会公益代表
昭和 36 年 1961 年 月 田 市明るく正しい 挙推 協 会会

受 歴

昭和 44 年 1969 年 11 月 勲五等瑞宝章
保 司永年功労表彰 法務大臣表彰、全国保 司 盟会 表彰、 畿地方更生保 委
員会委員 表彰、 畿保 司 盟会 表彰、和歌山保 監察所 表彰
公明 挙推 功労表彰 自治大臣表彰
社会福祉功労表彰 和歌山県知事表彰
公民 功労表彰 全国公民 絡協 会会 表彰

著 書

『日本外交五百年を憶う』



は ら じゅん じ ろ う

原 盾 二 氏

生年月日 昭和 12 年 月 日生

住 所 田 市朝日ヶ丘

昭和 12 年 1937 年 月 日、大 市東淀川区に生まれる。

渾心の力をふりしぼり歌う生徒の姿に感動を覚え、真の 楽に触れる喜びを味わわせたいと、 楽技術、独 の発 などの厳しさに苦しみ、幾度となくあきらめかける生徒 を励まし懸命に指揮をとる。

田 等学校教 として合唱 の指導にあたり、使命感に燃えるその情熱は広く知られ、 楽教育向上に尽くしたその指導力と功績は く 価されている。伝統のよさを受けつぐ正統派原 楽は、繊細、こまやか、整然なつくりとして独得の 楽をかもしだし、その才能を 憾なく発揮、田 合唱界における名声は極めて い。

昭和 35 年 1960 年 以来、学校 楽教育に力を注ぐとともに田 市民合唱団の指導、和歌山第九演奏会への出演、その合唱団の指導と市民の 楽への 心をめ、水準向上に努めるが、特に田 等学校合唱 の 楽コンクール、全日本合唱コンクールにおける優秀な成績は全国的にその名を め、田 地方の 楽水準の さを披歴した。

小学校・中学校の校歌の作曲など創作活動に情熱をかたむけ、特に後 の指導育成に尽力され、その熱意と 楽のつくり せられ師事仰ぐ者が数多い。下生も今や当地方の 楽界を支えるまでに成 、幅広く活 されている。

略 歴

昭和 34 年 1959 年 月 大 学芸大学特 楽 程ピアノ科卒 現大 教
育大学

昭和 34 年 1959 年 月 新人演奏会に出演

昭和 34 年 1959 年 11 月 和歌山県立笠田 等学校 常勤 師

昭和 35 年 1960 年 月 和歌山県立田 等学校教

昭和 49 年 1974 年 月 和歌山県新人演奏会 考委員

第 17 回 (昭和 61 年)

昭和 53 年	1978 年	月	田	ゾリスTEN会
昭和 56 年	1981 年	月	和歌山県合唱	盟副理事
昭和 58 年	1983 年	月	和歌山県	等学校芸術 盟合唱 会理事
昭和 59 年	1984 年	月	紀南文化会	営委員
昭和 60 年	1985 年	月	田	合唱 盟会
昭和 60 年	1985 年	月	和歌山県	等学校教育研究会 楽 会理事

受 歴他

- ・ 全国学校 楽コンクール和歌山県大会において昭和 35 年 1960 年より 23 回最優秀校、同 畿大会 回最優秀校
- ・ 全日本合唱コンクール全国大会において昭和 54 年 1979 年、昭和 55 年 1980 年ノ、昭和 59 年優良 を獲得
- ・ 昭和 35 年 1960 年 よりクリスマス・コーラス・コンサートを 催、昭和 61 年 1986 年 現在まで 28 回を数える



もりうち とみさぶろう

森内 富三郎 氏

生年月日 明治 39 年 4 月 26 日生

住 所 田辺市栄町

明治 39 年 (1906 年) 4 月 26 日、西牟婁郡田辺町 (現田辺市栄町) において、森内音吉、つね夫妻の三男として生まれる。田辺実業学校 2 年の後、大阪市の大阪貿易語学校へ入学、同校 3 年生の折、同校が火災で焼失し、廃校となったため帰郷、生来音楽の素質豊かであった氏は、在学中より苦心、努力を重ね独学でバイオリン、ピアノをはじめほとんどの楽器の奏法を習得した。

昭和 4 年 (1929 年) 頃からバイオリン、ピアノの教授をはじめる中で、同 5 年 (1930 年) 5 月、現住所の栄町において森内楽器店を開設。

昭和初期、氏は当地方の音楽愛好家と共に音楽同好会を結成し、習得した技法を伝え研修を重ねると共に、田辺高等女学校に着任された東京音楽学校出身の故益山鎌吾先生等と共に音楽同好会「レガートクラブ」で音楽活動を展開、また、田辺高等女学校の音楽会等で援助演奏を行うほか、昭和 7 年 (1932 年) 頃、東京上野の本科ピアノ課を専修した外山雪子氏の帰郷を機に、故原勝四郎氏 (バイオリン) [第 1 回 (昭和 45 年) 田辺市文化賞受賞]、外山雪子氏 (ピアノ) と氏 (チェロ) の三人でピアノ三重奏グループを結成し活発な音楽活動を行った。

また、氏は田辺好楽会を結成、東京、大阪から演奏家を招へいし、演奏会を開催するなど、当地方の音楽の振興に多大の貢献をされた。

昭和 17 年 (1942 年) 6 月、和歌山県音楽文化協会の理事に就任、引き続き同 18 年 (1943 年) 1 月、再び同協会の理事に就任するなど幅広い活躍の中で、同 9 年 (1934 年)、NHK 毎日音楽コンクールのバイオリン部門で日本一に輝いた南部の故山本恵子氏をはじめ、現山口芸術大学教授の吉田稔氏など門下に幾多の優秀な人材を育てられた。

現在、当地方の音楽教育の指導的立場にある多くの人々が同氏の影響を受けており、近年健康を害されるまで、昭和初期から 50 年余の長きにわたって多くの門弟を養成された氏は実に、田辺市の音楽界のパイオニアであり、当地方の音楽の振興に尽くされた功績は極めて大きなものがある。

第 18 回 (昭和 62 年)

(略 歴)

大正 11 年 (1922 年) 3 月	大阪貿易語学校 3 年終了
昭和 4 年 (1929 年) 3 月	バイオリン・ピアノの教授をはじめる
昭和 5 年 (1930 年) 5 月	森内楽器店開設
昭和 17 年 (1942 年) 6 月	和歌山県音楽文化協会理事
昭和 18 年 (1943 年) 1 月	和歌山県音楽文化協会理事
昭和 31 年 (1956 年) 5 月	田辺市公民館運営審議会委員

(受賞歴)

昭和 12 年 (1937 年) 5 月	賞勲局総裁より田辺好楽会の音楽活動に対し表彰を受ける
昭和 24 年 (1949 年) 11 月	田辺市長より多年の洋楽研鑽普及の功により表彰を受ける
昭和 32 年 (1957 年) 1 月	和歌山県音楽教育連盟理事長より多年の音楽教育振興の功により感謝状を受ける



みずもと あいどう

水本 愛堂 氏

(本名 水 本 清)

生年月日 大正 11 年 9 月 17 日生

住 所 西牟婁郡白浜町

大正 11 年 (1922 年) 9 月 17 日、西牟婁郡湊村 (現田辺市湊) において、水本定吉、政枝夫妻の長男として生まれる。

幼少より書を学ばれ、特に中学校 1 年生のとき校内展覧会に入選し、それを機に炭山南木氏に師事し、また池永浩氏 [第 1 回 (昭和 45 年) 田辺市文化賞受賞] の薦めによって詩法を高橋藍川氏に学び、書の道に努力傾注。

昭和 18 年 (1943 年)、大阪専門学校に在学中召集、しかし病のため召集解除となり郷里に帰る。

昭和 20 年 (1945 年) 4 月、田辺高等家政女学校教諭嘱託となり、その後、田辺市立田辺中部中学校教諭、田辺市立東陽中学校教諭など、戦後の混乱期に教職を勤め学校教育の向上、教育行政の発展に貢献をされると共に書道において多くの子弟を指導育成した。

昭和 39 年 (1964 年) 3 月、大阪府寝屋川市に転住し、同 59 年 (1984 年) 11 月、現住所の白浜町に帰棲する。

氏は、昭和 24 年 (1949 年) 3 月、文部省検定試験書道科に合格し、同年 10 月に日展初入選以来現在まで日本書芸院展文部大臣賞受賞のほか数多くの賞を受賞されている。

昭和 24 年 (1949 年) 4 月、氏は書道研究青童社を創設、今日まで子弟の指導育成に多大の尽力をされると共に自らも日々研さんを続けられており、少壮時より書壇で活躍されている氏の生きざまは名利を追わず淡々とした脱俗の境地に打坐し、ただ一途、書道に精魂を傾け志向の高さを求める書家であり、今日まで古典によって書技を深められながら、水本流ともいえるべき高雅な書風を確立し、その実力は広く書壇に知られ、その熱意と書道に魅せられ師事仰ぐ者が多い。

毎日書道展、また、田辺市展の初期からの審査員として尽力されると共に多くの書展の審査員として活躍され、当地方の書道の振興、向上に尽くされた功績は極めて大きなものがある。

第 19 回 (昭和 63 年)

(略 歴)

昭和 20 年 (1945 年) 3 月 大阪専門学校卒業
昭和 20 年 (1945 年) 4 月 田辺高等家政女学校教諭嘱託
昭和 22 年 (1947 年) 4 月 田辺市立田辺中部中学校教諭
昭和 24 年 (1949 年) 4 月 田辺市立東陽中学校教諭
昭和 29 年 (1954 年) 4 月 和歌山県立田辺高等学校定時制講師兼任嘱託
昭和 31 年 (1956 年) 3 月 田辺市立東陽中学校依願退職
昭和 39 年 (1964 年) 3 月 大阪府寝屋川市に転住
昭和 45 年 (1970 年) 9 月 私立聖母女学院講師
昭和 51 年 (1976 年) 3 月 私立聖母女学院退職
昭和 59 年 (1984 年) 11 月 西牟婁郡白浜町堅田に帰棲

昭和 24 年 (1949 年) 3 月 文部省検定試験書道科に合格

その他 書道研究青童社主宰

田辺市展審査員

毎日書道展審査員

日本書芸院展審査員

関西展審査員

日展会友

(受賞歴)

昭和 24 年 (1949 年) 10 月 日展初入選
昭和 25 年 (1950 年) 2 月 日本書芸院展文部大臣賞受賞
昭和 26 年 (1951 年) 3 月 関西総合美術展関展賞第一席
昭和 26 年 (1951 年) 8 月 毎日書道展毎日賞第一席
昭和 41 年 (1966 年) 8 月 東京タイムズ書道展東京タイムズ大賞



つじもと りょうぞう

辻本 亮三 氏

生年月日 明治 29 年 10 月 16 日生

住 所 田辺市むつみ

“青年の主張をテレビに聴きをればなにゆゑとなく涙こぼるる”

明治 29 年（1896 年）10 月 16 日、西牟婁郡安居村（現白浜町安居）において、辻本亀七、ひさ夫妻の三男として生まれる。

大正 5 年（1916 年）4 月、東京歯科医学校卒業後、同 8 年（1919 年）5 月、浜松市に歯科医院を開業。昭和 2 年（1927 年）8 月、総義歯の技術修得を目的としてアメリカに渡り、ワシントン州ヤキマ市の歯科医院に勤務の傍ら、カリフォルニア大学の夏期講習会等を受講し、総義歯の技術を修得。

帰国後、昭和 11 年（1936 年）5 月、今福町に歯科医院を開業。アメリカで修得した技術を生かし、名歯科医として 85 歳という高齢に達するまで、地域の歯科医療に多大の貢献をした。

氏は、青年時代から向学心厚く、不断の学習に努め、アメリカ滞在の中で国際的な知識を修得。昭和 32 年（1957 年）7 月、氏の教育観を高く評価した田辺市教育委員会から強く要請を受け、田辺市中央公民館長に就任。地区公民館と連携を図り、全市的な視野に立った活動に努められ、わが国が戦後の混乱期を経て、まさに成長期にかかろうとしていた節目の大切な時期に公民館事業のあるべき姿を、国際的感覚をもって明確に示され、多忙な歯科医の傍ら、自ら市内の各地に赴き積極的な社会教育の振興に取り組み、なakanずく青少年の育成に大きな功績を残した。

昭和 35 年（1960 年）8 月、田辺市教育委員、同年 10 月、教育委員長に就任。アメリカで得た開明的な教育観と自分も、また勉強する好機を与えていただいたという信念で取り組まれ、本市の教育の向上、市民の生活文化の振興に多大の功績を残された。

昭和 56 年（1981 年）4 月、85 歳で歯科医院を閉院後、「人生に停年はない、生涯が学習である。」との考えのもとに、自己の趣味を生かし充実した老後を送るべく、大阪中之島の朝日カルチャーセンターの短歌講座に毎週出席し、前登志夫師に短歌を学び、同 60 年（1985 年）、南紀短歌連盟結成と同時に所属、幹事として当地方の短歌の振興発展に尽力されている。同 63 年（1988 年）3 月、歌

第 20 回（平成元年）

集『蹣跚』を出版、氏の活躍がテレビや新聞に取り上げられ全国に紹介されたが、人生 80 年時代といわれる現在、高齢化社会にどう人生を生きるべきかという、ひとつの良き模範を示されている。

（略 歴）

大正 5 年（1916 年） 4 月	東京歯科医学校卒業
大正 7 年（1918 年） 5 月	歯科医師試験に合格
大正 8 年（1919 年） 5 月	浜松市に歯科医院開業
昭和 2 年（1927 年） 8 月	アメリカに渡り、ワシントン州ヤキマ市の歯科医院に勤務の傍ら、カリフォルニア大学の夏期講習会等を受講、総義歯を学ぶ（滞米 5 年）
昭和 11 年（1936 年） 5 月	現田辺市今福町に歯科医開業（昭和 56 年 4 月閉院）
昭和 15 年（1940 年） 4 月	田辺市立田辺第二小学校、田辺市立中芳養小中学校歯科校医
昭和 29 年（1954 年） 3 月	田辺西牟婁歯科医師会長
昭和 32 年（1957 年） 7 月	田辺市中央公民館長
昭和 35 年（1970 年） 8 月	田辺市教育委員会委員
昭和 35 年（1970 年） 10 月	田辺市教育委員会委員長
昭和 40 年（1965 年） 6 月	田辺市老人クラブ連合会長

（受賞歴）

昭和 48 年（1973 年） 9 月	和歌山県老人福祉功労表彰
昭和 48 年（1973 年） 11 月	和歌山県歯科医師会功労表彰
昭和 60 年（1985 年） 11 月	日本歯科医師会より全国表彰
昭和 62 年（1987 年） 5 月	田辺市自治功労表彰



えのもと

榎本 はな 氏

生年月日 明治 42 年 3 月 26 日生

住 所 田辺市湊

明治 42 年（1909 年）3 月 26 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市江川）において、那須利平次、好枝夫妻の二女として生まれる。

昭和 8 年（1933 年）1 月、耳鼻咽喉科医の榎本誠三氏と結婚。昭和 23 年（1948 年）から 14 年間、戦後における混乱期の P T A 役員として尽瘁。

昭和 28（1953 年）年 4 月、湊地下の婦人で組織する湊婦人会を設立、会長として地域住民の社会教育活動の向上に努力し、特に婦人の教養と生活並びに社会連帯感の向上に尽力し、本市における婦人活動の基礎を築いた。

昭和 41 年（1966 年）4 月、田辺市婦人団体連絡協議会会長に就任。聡明にして豊かな人柄は、会員からの信望厚く、氏は、農協、漁協等の各婦人団体とともに伸びていくという信念で、地域婦人会を統率して市全体の婦人会活動の進展、市民意識の高揚に尽力。同年から田辺市社会教育委員としても、社会教育の向上発展に率先して取り組み、婦人学校、生活学校、成人講座などの各種の社会教育講座の開設、運営にあたり社会教育の振興に大きな成果を上げられた。

昭和 46 年（1971 年）6 月、和歌山県婦人教育海外派遣員としてアメリカに行き、アメリカにおける婦人教育、ボランティア活動を視察し、その後の幅広い活動は、広く市民の認めるところである。

また、青少年の健全育成のための諸活動、人権認識を高める同和教育の推進、交通安全運動の推進、市民の消費生活の刷新、豊かな市民生活を目指しての団体指導等、生活文化の向上に尽力されている。

昭和 59 年（1984 年）4 月、和歌山県婦人団体連絡協議会会長に就任。県下的に婦人活動、社会教育、青少年健全育成、市民運動等に積極的に取り組む。

その他、昭和 24 年（1949 年）1 月、和歌山家庭裁判所家事調停委員、昭和 30 年（1955 年）1 月、和歌山地方裁判所民事調停委員として、昭和 57 年（1982 年）3 月まで務められた。昭和 24 年（1949 年）12 月からは、法務局の人権擁護委員を現在まで務められており、人権問題にも積極的に取り組まれ、本市の教育の向上、市民の生活文化の振興に多大の功績を残されている。

第 20 回（平成元年）

（略 歴）

昭和 5 年（1930 年） 3 月	日本女子大学家政学部卒業
昭和 24 年（1949 年） 1 月	和歌山家庭裁判所家事調定委員
昭和 24 年（1949 年） 12 月	法務局人権擁護委員
昭和 28 年（1953 年） 4 月	田辺市湊婦人会会長
昭和 30 年（1955 年） 1 月	和歌山地方裁判所民事調停委員
昭和 40 年（1965 年） 4 月	田辺市社会福祉協議会常任委員 田辺市人権擁護連盟理事
昭和 41 年（1966 年） 4 月	田辺市婦人団体連絡協議会会長 田辺市社会教育委員 田辺市民運動推進協議会副会長 田辺市明るい選挙推進協議会副会長 田辺市共同募金委員会副会長 和歌山県明るい選挙推進協議会副会長
昭和 41 年（1966 年） 9 月	田辺地区交通安全母の会会長 和歌山県交通安全母の会副会長
昭和 42 年（1967 年） 12 月	田辺生活学校運営委員長
昭和 43 年（1968 年） 4 月	田辺市青少年補導協議会副会長
昭和 45 年（1970 年） 4 月	西牟婁郡新県民運動婦人連絡会会長
昭和 51 年（1976 年） 6 月	田辺市婦人同和運動実践連絡協議会会長
昭和 52 年（1977 年） 4 月	田辺市同和審議会委員
昭和 53 年（1978 年） 12 月	田辺市青少年育成市民会議副会長
昭和 55 年（1980 年） 4 月	西牟婁地方婦人同和運動実践連絡会会長
昭和 57 年（1982 年） 6 月	和歌山県婦人同和運動実践連絡協議会副会長 紀南ユネスコ協会会長
昭和 59 年（1984 年） 4 月	和歌山県婦人団体連絡協議会会長 和歌山県健康を守る婦人の会会長
昭和 59 年（1984 年） 9 月	和歌山県社会教育委員
昭和 60 年（1985 年） 9 月	和歌山県婦人会議会長

（受賞歴）

昭和 59 年（1984 年） 11 月 勲六等宝冠章
人権擁護功労表彰（法務大臣表彰、全国連合会長表彰、和歌山県連合会長表彰）
社会教育功労表彰（全国連合会長表彰、田辺市教育委員会表彰）
和歌山県教育功労表彰
全国交通安全運動功績表彰
調停事務功労和歌山地方裁判所表彰
調停委員功績日本調停協会連合会表彰
家事調停委員功績大阪高等裁判所長官表彰



よしだ や ぎ え も ん

吉田 彌左衛門 氏

生年月日 大正 7 年 5 月 1 日生

住 所 田辺市湊

大正 7 年（1918 年）5 月 1 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市湊）において、吉田平次郎、ヤエ夫妻の三男として生まれる。

昭和 8 年（1933 年）3 月、田辺第二尋常高等小学校高等科卒業後、田辺中学校の給仕をしながら独学。昭和 12 年（1937 年）9 月から昭和 14 年（1939 年）8 月まで南富田小学校準教員として勤務。退職後、「あしべ」駅弁店に就職。昭和 20 年（1945 年）、臨時召集のため退職。

終戦後、昭和 23 年（1948 年）に湊 1023 番地に水門書店、水門画廊を開き、原勝四郎〔第 1 回（昭和 45 年）田辺市文化賞受賞〕三兄弟、楠本竜仙、保田竜門、川口軌外氏等の小品展を開催。昭和 25 年（1950 年）5 月、書店、画廊を閉め、「あしべ」駅弁店に再就職し、現在に至る。

豆本コレクターであった氏は、昭和 53 年（1978 年）、還暦記念に豆本の出版を企画し、豆本への愛着と、廃れいく伝統和紙の保存を目的として自ら版元となり、昭和 54 年（1979 年）5 月に田奈部豆本第一集『鬼若と狸』を出版。昭和 61 年（1986 年）10 月に 30 集を達成。当初は 30 集を目標としたが、郷土の文化や歴史を保田紙、高野紙等伝統和紙で作られた作品が非常に好評を得、昭和 62 年（1987 年）5 月から「続田奈部豆本」の出版を開始し、平成元年（1989 年）6 月から「続続田奈部豆本」を出版。同年 9 月に 40 集達成記念として、初の卷子本仕立てで『十牛図』を出版。今日までに 48 集を発刊され、平成 2 年（1990 年）現在、49 集目を制作中。50 集を一応の区切りとしたいと意欲を燃やしている。

当豆本には、作家水上勉氏の特別寄稿を受ける等、出版に意を尽くすとともに現在継続して製造されている和紙を使用した唯一の豆本として注目を集めており、多年にわたり豆本分野の向上発展に尽力されるとともに、和歌山県の優れた文化、歴史を市内はもとより 県内外に紹介し、地元作家の発表の場になる等、市民の文化の振興、発展に多大の功績を残されている。

また、氏は写真同好者の弁慶クラブ会長として、アマチュア写真の発展にも尽力されており、昭和 41 年（1966 年）度田辺市展、写真の部で知事賞受賞。

昭和 42 年（1967 年）からは無鑑査。和歌山県展では昭和 63 年（1988 年）度、第

第 21 回（平成 2 年）

五席奨励賞。平成元年（1989 年）度、第三席毎日新聞社賞を受賞される等、アマチュア写真家としても活躍されている。

（略 歴）

昭和 8 年（1933 年） 3 月	田辺第二尋常高等小学校高等科卒業
昭和 8 年（1933 年） 4 月	田辺中学校給仕
昭和 12 年（1937 年） 9 月	南富田小学校代用教員
昭和 13 年（1938 年）	南富田小学校準教員
昭和 14 年（1939 年） 8 月	南富田小学校退職。「あしべ」駅弁店に就職
昭和 20 年（1945 年）	臨時召集のため、「あしべ」駅弁店退職
昭和 23 年（1948 年）	田辺市湊に水門書店、水門画廊開店
昭和 25 年（1950 年） 5 月	水門書店、画廊を閉店。「あしべ」駅弁店に再就職
昭和 62 年（1987 年）	アマチュア写真、弁慶クラブ会長

（受賞歴）

昭和 41 年（1966 年） 度	田辺市展（写真の部）知事賞
昭和 42 年（1967 年） 度	田辺市展無鑑査
昭和 63 年（1988 年） 度	和歌山県展（写真の部）第五席奨励賞
平成 元 年（1989 年） 度	和歌山県展（写真の部）第三席毎日新聞社賞
平成 元 年（1989 年） 11 月	和歌山県文化奨励賞受賞



か み や さち
神 谷 幸 氏

生年月日 明治 43 年 2 月 6 日生

住 所 田辺市今福町

明治 43 年（1910 年）2 月 6 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市今福町）において、神谷墨状、ミツエ夫妻の六女として生まれる。

大正 15 年（1926 年）3 月、田辺高等女学校卒業後、声楽家矢野寿美子女史に師事するため京都成安女子学院高等師範科に入学。

昭和 2 年（1927 年）4 月、幼児教育の重要性が叫ばれる中、市内の仏教関係者により昭和幼稚園が開設されると同時に、教諭として 10 年間勤務された。

昭和 12 年（1937 年）、日中戦争が勃発し、翌 13 年（1938 年）の春に出征兵士留守家族の子どもたちを無料で保育するため、勝徳寺内に勝徳愛児園を開設し、奉仕を続けられた。昭和 20 年（1945 年）8 月、終戦とともにその役目は終わり閉園となるが、保護者の強い要望があり、昭和 21 年（1946 年）4 月、勝徳幼稚園として発足。昭和 32 年（1957 年）4 月から園長の要職に就かれ幼児教育に全力を傾注された。平成 3 年（1991 年）3 月、事情により一時休園をし、現在に至っている。

氏は若い頃から幼児教育に大変な熱意を示され、「伸び伸びと子どもを遊ばせる」ことを重点に、寝食を忘れて幼児教育の向上、発展に尽力。その功績が認められ昭和 50 年（1975 年）11 月、幼児教育功労で文部大臣表彰を受けられている。

また、その豊富な経験と卓越した指導力をもって後進の指導にあたられるとともに、浄土真宗本願寺派の全国保育連盟の常任理事としても活躍されている。

このほか、民生委員としても 25 年の長きにわたり続けられ、地域の福祉向上に大きく寄与されている。

また、保護司としても昭和 33 年（1958 年）5 月以来 80 歳の定年に至るまで、33 年間という長期にわたり更生保護に尽力された。

氏の慈愛に満ちたやさしさ、温かさに触れて、感受性の強い子供たちの健やかな成長に貢献されるとともに、また社会更生に努力する方、恵まれない方などがどれだけ勇気づけられ、将来への希望を持つことができたか、地道な活動ではあるが、多くの人々に感銘を与えるとともに、本市の幼児教育の向上・社会福祉の充実に多大の功績を残されている。

第 22 回 (平成 3 年)

(略 歴)

大正 15 年 (1926 年) 3 月	田辺高等女学校卒業
大正 15 年 (1926 年) 4 月	京都成安女子学院高等師範科入学
昭和 2 年 (1927 年) 4 月	昭和幼稚園教諭
昭和 12 年 (1937 年) 3 月	昭和幼稚園退職
昭和 13 年 (1938 年) 4 月	勝徳愛児園開設
昭和 20 年 (1945 年) 8 月	戦争終結と同時に勝徳愛児園を閉園
昭和 21 年 (1946 年) 4 月	勝徳幼稚園開設 (教諭)
昭和 32 年 (1957 年) 4 月	勝徳幼稚園園長
平成 3 年 (1991 年) 3 月	事情により勝徳幼稚園を休園

昭和 23 年 (1948 年) 11 月	田辺市民生児童委員
昭和 33 年 (1958 年) 5 月	保護司
昭和 40 年 (1965 年) 4 月	今福町婦人会長
昭和 58 年 (1983 年) 7 月	国際ソロプチミスト和歌山紀南会長

(受賞歴)

昭和 42 年 (1967 年) 11 月	和歌山県私立幼稚園協会表彰
昭和 46 年 (1971 年) 8 月	和歌山県社会福祉協議会表彰
昭和 50 年 (1975 年) 11 月	文部大臣表彰 (幼児教育功労)
昭和 51 年 (1976 年) 2 月	浄土真宗本願寺派教育者表彰
昭和 55 年 (1980 年) 11 月	関西幼稚園連合会表彰
昭和 58 年 (1983 年) 10 月	近畿地方保護司連盟表彰
昭和 61 年 (1986 年) 7 月	浄土真宗本願寺派保育連盟表彰
昭和 63 年 (1988 年) 5 月	法務大臣表彰 (保護司)



みなかた

ふみえ

南方 文枝 氏

生年月日 明治 44 年 10 月 13 日生

住 所 田辺市中屋敷町

明治 44 年 (1911 年) 10 月 13 日、西牟婁郡田辺町 (現田辺市中屋敷町) において、博物学者で民俗学者の南方熊楠、まつゑ夫妻の長女として生まれる。

昭和 4 年 (1929 年) 3 月、田辺高等女学校専攻科卒業後は自宅にいて、付けペンの細かい英字で盛んに書き込みをしていた父熊楠翁の姿に触れる機会が多くなり、氏が 23 歳の頃、視力の衰えた父の菌類研究を手伝うようになった。キノコをルーペで見て写生、彩色をするものであったが、なかなか出来映えを承知してくれず、200 回以上の猛練習を重ねて、やっと納得してもらえたことなど苦労は多かった。

熊楠翁が名付けた「日本菌譜」のキノコの彩色図譜は 4～5 千枚に及んだが、顕微鏡で見た粘菌のような小さなものにも命があるということや短時間のうちに変形するおもしろさなど、熊楠翁から絶えず教えられていく中で南方熊楠翁の偉大な業績、研究の重大さなどを肌で感じるようになった。

昭和 16 年 (1941 年) 12 月、熊楠翁没後は母とともに残された標本類や蔵書等を損なわず、散逸せず保存に当たった。

終戦直前、戦争がいよいよ激化する中、父の遺言どおり「長持」一杯の粘菌やロンドン拔書など重要書物とともに、中辺路町 (旧二川村の真砂氏宅) へ疎開、戦火を逃れ、事なきを得た。

昭和 22 年 (1947 年) 2 月、京都大学出身で後に日本大学名誉教授となった岡本清造氏と結婚、居を東京に移すが、暇を見つけては帰郷し、粘菌の風通しや防虫剤の入替えなど保存に尽くした。

昭和 52 年 (1977 年)、南方家を継ぐため旧姓に復し、保存への思い入れはますます強固なものとなった。南方熊楠翁の足跡、業績を考える上で最も貴重な資料は熊楠邸及び数千冊ともいわれる蔵書並びに粘菌標本類であり、それらを毎日の細心な注意と学問に対する畏敬をもって、可能な限りの努力で保存し、熊楠研究にゆるぎない基盤を確立した功績は誠に大きなものがある。

また、熊楠ブームが高まるにつれ、東京・大阪・広島等で「超人・南方熊楠展」が開催され、入場者総数約 9 万 5 千人と大成功を収めたが、数多くの重要な遺品

第 23 回（平成 4 年）

類の整理など、氏の昼夜を惜しまぬ尽力に負うところが大きく、今日の顕彰活動にも多大な貢献をしている。

著書には『父・南方熊楠を語る』があり、親族ならではのきめ細かい観察が熊楠翁の研究に貴重な資料となっている。

（略 歴）

昭和 4 年（1929 年）3 月	田辺高等女学校専攻科卒業
昭和 9 年（1934 年）頃	父熊楠翁の研究を手伝うようになる
昭和 16 年（1941 年）12 月	父熊楠翁没後、学術資料の保存に全精力を傾ける

（著 書）

『父・南方熊楠を語る』



すぎなか こういちろう

杉中 浩一郎 氏

生年月日 大正 11 年 11 月 26 日生

住 所 田辺市あけぼの

大正 11 年（1922 年）11 月 26 日、西牟婁郡近野村（現田辺市中辺路町近露）において、杉中俊英、とみゑ夫妻の長男として生まれる。

昭和 18 年（1943 年）12 月、慶応義塾大学経済学部在学中に召集され、昭和 21 年（1946 年）8 月復員。地方史や民俗学の分野に造詣が深く、昭和 25 年（1950 年）1 月、近野中学校教諭に採用された後は西牟婁地方の各中学校で社会科を担当し、学校教育の向上に貢献をした。また、在職中から、その地域の民俗や歴史の調査研究に努め、当地方の文化の向上に尽くした功績は大きい。

昭和 55 年（1980 年）3 月に上富田中学校を退職したが、氏の文化や歴史に対する旺盛な研究心、豊富な知識、情熱は万人の認めるところであり、懇請されて昭和 59 年（1984 年）4 月、田辺市立図書館長に就任する。就任後は郷土資料の整備に努め、昭和 62 年（1987 年）5 月には『郷土田辺－風土と文化－』を編集し、図書館の読書会のテキストとして使用するなど、図書館活動の充実に大きく貢献した。

また、田辺市が市制施行 45 周年記念事業の一つとして、昭和 62 年（1987 年）度から取り組んでいる田辺市史編さん事業（全 10 巻）は、平成 2 年（1990 年）5 月に第 5 巻「史料編Ⅱ」を、平成 3 年（1991 年）3 月には第 10 巻「史料編Ⅶ」を発行しているが、田辺市史編さん委員として編集に当たり、特に第 10 巻で担当した民俗編では、口熊野の古くからの特性にふれながら、広く資料を収集整理してまとめるなど、伝統的な常民の生活文化を明らかにしたものとして、高い評価を得ている。

昭和 39 年（1964 年）から田辺市文化財審議会委員として文化財の調査、研究、記録などに精力的に取り組み、平成 4 年（1992 年）4 月から同委員長に就任しているほか、紀南文化財研究会の理事長及び理事として、多年、研究会の運営や「くちくまの」の編集等に努め、平成 5 年（1993 年）4 月から同研究会会長として、紀南地方における文化財の研究や保存活動の中心的存在として活躍している。

また、熊野路編さん委員として、くまの文庫「総集編」の完成まで企画執筆に当たったが、熊野中辺路地方の民俗や伝説、自然など時代とともに失われてゆく大切な財産を分かり易くまとめあげており、故郷を知る文化の図書として貴重なものとなっている。

こうした地道な活動が高く評価され、平成 4 年（1992 年）5 月、皇太子殿下が熊野古道にお越しになった際、氏の案内を受けられたことは記憶に新しい。

著書には『紀南雑考』があり、論文・論考に民俗学や歴史学に関するものが多い。

第 24 回 (平成 5 年)

(略 歴)

昭和 18 年 (1943 年) 12 月	慶応義塾大学経済学部在学中入隊
昭和 21 年 (1946 年) 8 月	マレーシアより復員
昭和 25 年 (1950 年) 1 月	近野村立近野中学校教諭採用
昭和 55 年 (1980 年) 3 月	上富田町立上富田中学校教諭退職
昭和 59 年 (1984 年) 4 月	田辺市立図書館長に就任
昭和 63 年 (1988 年) 3 月	田辺市立図書館長退職
昭和 24 年 (1949 年) 4 月	日本民俗学会会員
昭和 29 年 (1954 年) 4 月	和歌山県文化財審議会委員
昭和 38 年 (1963 年) 12 月	紀南文化財研究会理事
昭和 39 年 (1964 年) 4 月	田辺市文化財審議会委員
昭和 42 年 (1967 年) 7 月	和歌山県歴史教育者協議会副会長
昭和 46 年 (1971 年) 6 月	熊野路編さん委員
昭和 56 年 (1981 年) 5 月	社団法人 和歌山県文化財研究会理事
昭和 62 年 (1987 年) 4 月	田辺市史編さん委員
昭和 62 年 (1987 年) 6 月	南方熊楠邸保存顕彰会理事
昭和 63 年 (1988 年) 12 月	明治大水害誌編集委員会委員長
平成 3 年 (1991 年) 4 月	紀南文化財研究会副会長
平成 3 年 (1991 年) 5 月	社団法人 和歌山県文化財研究会常務理事
平成 4 年 (1992 年) 4 月	田辺市文化財審議会委員長
平成 4 年 (1992 年) 7 月	南方熊楠邸保存顕彰会常任理事
平成 5 年 (1993 年) 4 月	紀南文化財研究会会長

(著 書)

『紀南雑考』



おかやす きくし

岡安 喜久仕 氏

（本名 藤井 朝枝）

生年月日 明治 44 年 11 月 2 日生

住 所 田辺市上屋敷町

明治 44 年（1911 年）11 月 2 日、日高郡御坊町（現御坊市藺）に生まれ、12 歳の時、田辺に転居する。

幼少の頃から三味線を習い、18 歳の時、長唄の修行をするため単身神戸へ渡り、岡安流師匠岡安喜久之介氏の内弟子となる。日本の伝統芸能の多くがそうであったように、長唄もまた全ての稽古は師匠と対峙して行う口伝によるもので、礼儀作法をも含めたその修行は大変厳しいものであった。寒稽古などでは、声帯が破れ、血が出るまで発声練習を繰り返したが、それが長唄独特の艶と深みのある声をつくっていった。

厳しい修行の甲斐があり、昭和 8 年（1933 年）3 月、岡安流家元より岡安喜久仕の名を許され、岡安流の名取となった。以後 27 歳で田辺に戻るまでの 5 年間、神戸で研さんを積みながら、月に一度、当時の定期船「那智丸」で田辺や白浜の弟子の家に長唄、三味線の出稽古に通い、当地方の花柳界の芸能の指導に尽くした。

田辺へ戻ってからは上屋敷町の住所に居を構え、長唄、三味線の指導を続けたが、厳しさのなかにも優しさのある氏の指導は、単に技術だけではなく日本の心を伝える奥の深いもので、多くの門下生が集うところとなった。

最近では、田辺伝統芸能協会による「たなべ伝統芸能まつり」や田辺市文化協会による「文協フェスティバル」に門下生とともに出演し、得意とする「新曲浦島」や「越後獅子」を披露したが、独特の品位と風格があるその独吟は、多くの人々を魅了し、高い評価を受けている。特に、紀南文化会館のこけら落としなど、慶事に演じられる「三番叟」の地方（伴奏）としてなくてはならない存在であるといわれている。

長唄の師匠となって 60 余年、戦前、戦後にわたり、自己の芸域を広げるとともに後進の指導にあたり、紀南地方の伝統芸能の振興に尽くした功績には、誠に大きなものがある。また、岡安流の古参として邦楽界にとっても貴重な存在であり、日本の伝統芸能の保持継承に大きな役割を果たしている。

第 25 回（平成 6 年）

（略 歴）

昭和 4 年（1929 年）	岡安喜久之介氏のもとで長唄の修行を始める
昭和 8 年（1933 年） 3 月	岡安流家元より岡安喜久仕の名を許される
昭和 13 年（1938 年） 3 月	岡安むつみ会を主宰



とやま はちろう
外山 八郎 氏

生年月日 大正 2 年 5 月 22 日生

住 所 田辺市元町

大正 2 年（1913 年） 5 月 22 日、日高郡南部町（現みなべ町）において、外山秋作、サ
ク夫妻の八男として生まれる。

昭和 12 年（1937 年） 3 月、東京帝国大学（現東京大学） 法学部を卒業後、民間企業に
就職されたが、健康を損ねたため、自然環境に恵まれた田辺市の天神崎の近くに移り住み、
田辺高等学校の教諭となる。

高等学校在職中は、難しい商業法規の教科を分り易く講義され、そのもの静かで温厚な性
格と相まって生徒に敬愛される一方、敬けんなクリスチャンとして田辺教会を中心に活動さ
れ市民からも尊敬されている。

健康のため食生活には気を使っておられ、徹底した健康食で通しておられるが、また、養
生のため田辺に住まわれるようになって以来、自宅の裏から森の中を通して日和山山頂に登
り、そこから天神崎の海岸へ向けた素晴らしい景観を満喫される中で、環境保護にも強い関
心を持っておられた。

昭和 49 年（1974 年）初頭、天神崎の海岸沿いの見晴らしの良い斜面に高級別荘地を造成
する計画があることを知り、開発を未然に防ぎ大自然との触れ合いの場を守るためには時期
を失することなく運動を起こさなければならないとの考えから、外山氏の呼びかけにより「天
神崎の自然を大切にする会」（会長 小山周次郎〔第 8 回(昭和 52 年)田辺市文化賞受賞〕）
が組織された。

その後、署名集めに始まり、市・県への陳情、熱意表明募金と活動を展開し、最終的に市
民運動により土地を買い取る方向で運動が進められることとなる。

しかし、募金活動は思うように進まず、役員や高等学校の先生などの協力を得て進めてい
たが、最後には氏の個人財産や退職金だけでなく、氏の土地建物を抵当に銀行から借入れを
行うなど、筆舌に尽くしがたい苦労をされた。その後、全国的な募金活動や、市・県の補助
金などを得る中で買い取り運動が進み、昭和 61 年（1986 年）には「財団法人 天神崎の自
然を大切にする会」を設立、ナショナル・トラスト法人第 1 号に認定されるが、氏はその専
務理事として、買い取り地の管理や新たな募金による買い取りの継続を行い、平成 5 年（1993

第 26 回（平成 7 年）

年）に名誉会長となる。

これまで進められてきた天神崎の買い取り保全運動は、日本中の注目を集め、平成 7 年（1995 年）現在までに 6.2 ha が買い取られたが、この運動がここまで進むことができたのも、氏の献身的な努力と自然保護にかけける情熱があればこそであり、氏の功績の大きさには計り知れないものがある。

（略 歴）

昭和 12 年（1937 年） 3 月	東京帝国大学法学部法律学科卒業
昭和 12 年（1937 年） 4 月	三菱海上火災保険株式会社に入社
昭和 15 年（1940 年） 4 月	財団法人 東亜研究所に入所
昭和 23 年（1948 年） 4 月	和歌山県立田辺高等学校常勤講師
昭和 24 年（1949 年） 4 月	和歌山県立田辺高等学校教諭 日本基督教団田辺教会長老
昭和 25 年（1950 年） 4 月	日本基督教団田辺教会責任役員
昭和 33 年（1958 年） 4 月	和歌山県立田辺商業高等学校へ異動
昭和 51 年（1976 年） 3 月	和歌山県立田辺商業高等学校非常勤講師
昭和 54 年（1979 年） 3 月	和歌山県立田辺商業高等学校退職
昭和 49 年（1974 年） 2 月	天神崎の自然を大切にする会事務局長
昭和 52 年（1977 年） 7 月	天神崎保全協会準備会発起人代表
昭和 53 年（1978 年） 11 月	天神崎保全市民協議会事務局長
昭和 58 年（1983 年） 2 月	ナショナル・トラストを進める全国の会顧問
昭和 61 年（1986 年） 7 月	財団法人 天神崎の自然を大切にする会専務理事
平成 5 年（1993 年） 6 月	財団法人 天神崎の自然を大切にする会名誉会長
平成 5 年（1993 年） 9 月	社団法人 日本ナショナル・トラスト協会理事
平成 7 年（1995 年） 4 月	社団法人 日本ナショナル・トラスト協会顧問



きのした い きち

木下 伊吉 氏

生年月日 大正 6 年 12 月 18 日生

住 所 田辺市秋津川

大正 6 年（1917 年）12 月 18 日、西牟婁郡秋津川村（現田辺市秋津川）で、木下虎右衛門、こいし夫妻の三男として生まれる。

昭和 7 年（1932 年）3 月、秋津川高等小学校を卒業後、大阪で会社勤めをしていたが、その後、兵役に就き、終戦除隊とともに秋津川村へ戻る。約 2 年間、村議会議員を務めた後、秋津川村農協（現紀南農協）に勤務、木炭専任出荷主任として勤務の傍ら、自ら製炭者を巡回し、良質炭の生産や良心的な選別、包装の指導などに日夜をいとわぬ献身的な努力により、当時の県営木炭検査の最優秀地として名をはせるようになった。

その後、代替燃料の進出に伴い木炭が年々減少する一方、流通面で価格の競合を余儀なくされていた状況を憂慮し、昭和 42 年（1967 年）に和歌山県木炭移出協議会を設立させる。

また、木炭需要の拡大を図るため紀州備長炭の由来を研究し、その良さをアピールして販路の開拓を図るため、昭和 43 年（1968 年）、全国で初めて東京において紀州備長炭のテレビコマーシャルを放映したほか、東京や中京の市場関係者と交流を重ね、生産者代表として折衝を行う中で、備長炭を使用する料理店に「紀州備長炭使用の店」の木製看板を作成配布するなどの工夫により、紀州備長炭の名声と地位の確立に努めた。

一方、県の特産品であり芸術品ともいわれる備長炭の製炭技術の保存と後継者の育成を図るため、昭和 45 年（1970 年）には「紀州備長炭技術保存会」の結成に尽力。昭和 47 年（1972 年）12 月に紀南農協を退職後は、自ら備長炭を生産、窯の構築技術や製炭技術の伝授に努めている。

こうした氏の製炭技術が認められ、昭和 52 年（1977 年）4 月には第 28 回全国植樹祭お手まき会場において、天皇、皇后両陛下に「紀州備長炭窯出し風景」をお見せする機会に恵まれ、木炭界の栄誉のため、1 年数カ月前から窯構築の構想を練り、連日連夜寝食を忘れて取り組んだ結果、備長炭の歴史に金字塔を打ち立てる偉業を果たした。

昭和 62 年（1987 年）には氏の発案による炭の楽器“炭琴”を完成させるとと

第 27 回（平成 8 年）

もに、平成 4 年（1992 年）2 月には「田辺市木炭生産者組合」を結成、組合長に就任するなど、今なお炭に対する熱意を燃やし続け、紀州備長炭の技術と伝統を後世に伝えるため奔走されている。

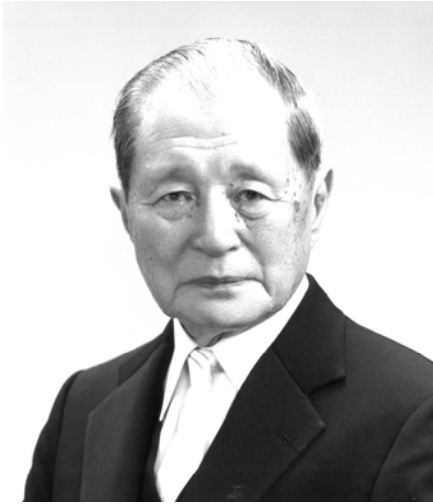
（略 歴）

昭和 7 年（1932 年）3 月	秋津川高等小学校卒業
昭和 9 年（1934 年）1 月	大阪セキセイ株式会社入社
昭和 14 年（1939 年）12 月	兵役
昭和 21 年（1946 年）4 月	秋津川村議会議員
昭和 23 年（1948 年）8 月	秋津川農協勤務
昭和 43 年（1968 年）8 月	紀南農協上芳養支所長
昭和 48 年（1973 年）1 月	自営（木炭生産、指導、販売）

昭和 48 年（1973 年）1 月	和歌山県木炭協会理事 紀州備長炭技術保存会理事 西牟婁木炭協会理事
昭和 49 年（1974 年）4 月	秋津川公民館長
昭和 53 年（1978 年）4 月	秋津川町内会長
平成 4 年（1992 年）2 月	田辺市木炭生産者組合長

（受賞歴）

昭和 53 年（1978 年）9 月	農民賞受賞
平成 2 年（1990 年）5 月	日本特殊林産功労者表彰受賞
平成 5 年（1993 年）4 月	和歌山県政功労表彰受賞



わきむら こうざぶろう

脇村 孝三郎 氏

生年月日 大正 4 年 7 月 20 日生

住 所 田辺市中屋敷町

大正 4 年（1915 年）7 月 20 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市中屋敷町）において脇村市太郎、ゆき夫妻の三男として生まれ、大正 10 年（1921 年）、叔父、脇村民次郎、たか夫妻の養子となる。

昭和 14 年（1939 年）3 月、東京帝国大学（現東京大学）経済学部を卒業後、東京海上火災保険株式会社に入社されるが、その後召集を受け兵役に就き、昭和 20 年（1945 年）終戦後、家庭の事情により東京海上を退社、帰郷する。

帰郷後は、実父市太郎氏の事務所に勤めた後、昭和 22 年（1947 年）に東富田村農業会に就職、さらに和歌山県信用農協連合会に勤め、県下の農協の経営指導などに奔走していたが、昭和 29 年（1954 年）に退職、実父の林業経営を引き継ぎ、現在に至る。

氏は、幼少のころより文学、映画、演劇などに親しむ一方、野球やラグビーなどのスポーツもこよなく愛し、昭和 26 年（1951 年）田辺ラグビークラブを結成、続いて熊野高等学校、田辺高等学校のラグビー部創設を指導され、当地方のラグビーの草分けとなる。

昭和 32 年（1957 年）、財団法人 脇村奨学会が創立された後、常務理事として会の運営はもとより、こまやかに奨学生の指導を続けられ、多くの優秀な人材を育成される一方、脇村奨学会において、美術展覧会の開催に尽力されるなど、地域の芸術・文化の向上発展に努められている。

さらに、昭和 38 年（1963 年）田辺市立図書館が新築されて以来、図書館協議会委員として、また昭和 59 年（1984 年）からは会長として図書館の運営を指導されているほか、県民文化会館文化事業委員や田辺第九の会初代会長、和歌山県文化懇話会委員、紀南文化会館運営委員等、文化に関わる多くの役職を歴任、昭和 62 年（1987 年）からは田辺市の誇る世界的民俗・博物学者南方熊楠翁を顕彰するため設立された南方熊楠邸保存顕彰会の副会長として、熊楠翁の偉業の顕彰に尽力されるなど、田辺市はもとより、和歌山県全体の文化の発展・向上に広範にわたり、大きく寄与されており、これまで優秀な人材の育成と、文化の向上に尽くされた功績には計り知れないものがある。

第 27 回 (平成 8 年)

(略 歴)

昭和 14 年 (1939 年) 3 月	東京帝国大学経済学部経済学科卒業
昭和 14 年 (1939 年) 4 月	東京海上火災保険株式会社入社
昭和 15 年 (1940 年) 5 月	兵役
昭和 22 年 (1947 年) 9 月	東富田村農業会に就職
昭和 24 年 (1949 年) 4 月	和歌山県信用農協連合会に入職
昭和 29 年 (1954 年) 3 月	和歌山県信用農協連合会を退職 脇村事務所において林業経営
昭和 32 年 (1957 年) 1 月	財団法人 脇村奨学会創立、常務理事に就任
昭和 44 年 (1969 年) 11 月	有限会社 脇村不動産部設立、代表取締役就任
平成 5 年 (1993 年) 4 月	財団法人 脇村奨学会常務理事を退任、顧問となる
昭和 31 年 (1956 年) 10 月	田辺市教育委員
昭和 38 年 (1963 年) 11 月	田辺市立図書館協議会委員
昭和 45 年 (1970 年) 11 月	田辺市総合計画審議会会長
昭和 46 年 (1971 年) 1 月	田辺市都市計画審議会委員
昭和 46 年 (1971 年) 4 月	和歌山県民文化会館文化事業委員会副会長
昭和 54 年 (1979 年) 12 月	田辺第九の会初代会長
昭和 58 年 (1983 年) 10 月	和歌山県文化懇話会委員
昭和 60 年 (1985 年) 4 月	田辺市経済懇話会委員
昭和 61 年 (1986 年) 9 月	紀南文化会館運営委員
昭和 62 年 (1987 年) 10 月	南方熊楠邸保存顕彰会副会長

(受賞歴)

昭和 52 年 (1977 年) 4 月	第 28 回全国植樹祭において林政功労表彰
平成 6 年 (1994 年) 5 月	田辺市市政功労者表彰 (自治功労)



い せ だ すすむ
伊勢田 進 氏

生年月日 昭和 3 年 8 月 19 日生

住 所 田辺市神子浜二丁目

昭和 3 年（1928 年）8 月 19 日、神奈川県横浜市鶴見区において、伊勢田栄吉、つね夫妻の三男として生まれる。

国学院大学専門部において考古学を専攻し、昭和 24 年（1949 年）3 月に同校を卒業後、東京芸術大学附属図書館、横浜市の私立武相高等学校勤務を経て、昭和 26 年（1951 年）4 月、串本高等学校に赴任、以後、海南、熊野、田辺市内の各高等学校教諭を歴任され、昭和 63 年（1988 年）、南紀高等学校教諭をもって退職される。

この間、37 年間の永きにわたり高等学校の社会科を担当し、学校教育の向上に貢献するとともに、優れた見識のもと情熱をもって学生の教育、指導にあたる。

また、昭和 30 年（1955 年）4 月に田辺市内の高等学校に赴任してからは、在職中にあっても考古学の分野で田辺市内並びにその周辺地域の遺跡の調査・研究を続け、昭和 33 年（1958 年）の闘雞神社裏山の仮庵山経塚の発見を機に、市内の重要な遺跡の発掘調査に携わり、田辺市を中心に紀南地方の古代史の研究に顕著な業績をあげられる。これらの功績が認められ、昭和 61 年（1986 年）には和歌山県教育研究奨励賞を受賞されている。

一方、昭和 32 年（1957 年）8 月から昭和 37 年（1962 年）3 月までは田辺市文化財調査会委員を、また昭和 37 年（1962 年）4 月から昭和 59 年（1984 年）3 月までは田辺市文化財審議会委員を、さらに昭和 45 年（1970 年）4 月からは、和歌山県文化財保護指導委員を歴任され、平成 9 年（1997 年）現在も田辺市の文化財の愛護はもとより、保護・顕彰のために尽力されている。

また、昭和 63 年（1988 年）、南紀高等学校教諭を退職後は、田辺市史編さん専門委員として「田辺市史」の編さん事業に参画、特に第四巻「考古編」を担当され、多くの部分を執筆されている。その他、和歌山県史考古資料編をはじめ、上富田町史、すさみ町誌、串本町史等の考古編の編集を担当されるなど、平成 9 年（1997 年）現在も精力的に研究活動が続けられており、これらの業績により平成 6 年（1994 年）には田辺市政功労表彰（教育功労）を受賞されている。

さらに近年は、神子浜町内会副会長として地域活動にも積極的に参加するとともに、田辺東部郷土史懇話会を設立し、地域の歴史や史跡等の研究活動を地元住民と一体と

第 28 回（平成 9 年）

なっで行い、「田辺海兵団・神子浜」「のろし場跡」「大砲試射台場跡」「牧野兵庫頭長虎幽閉地」等の研究成果を発表されている。また、日常の研究対象は考古学だけではなく、田辺市内をはじめ紀南地方の神社・仏閣、石碑、石塔等幅広い分野にわたる調査研究を根気よく、かつ、精力的に続けるとともに、適切な指導・助言を通して後進の育成にも努力されている。

このように、現在も田辺市の歴史や文化財について市民の理解を深めるための活動に大きく尽力されている。

また、執筆には、日本地名体系『和歌山県の地名』（平凡社）をはじめ、考古学や古代史等の分野で多くの論文・論考がある。

（略 歴）

昭和 24 年（1949 年） 3 月	国学院大学専門部卒業（考古学専攻）
昭和 24 年（1949 年） 4 月	東京芸術大学附属図書館に勤務
昭和 25 年（1950 年） 9 月	私立武相高等学校勤務
昭和 26 年（1951 年） 4 月	和歌山県立高等学校教諭 （串本、海南、熊野、田辺市内の各高等学校教諭を歴任）
昭和 63 年（1988 年） 3 月	和歌山県立南紀高等学校を退職
昭和 32 年（1957 年） 8 月	田辺市文化財調査会委員
昭和 37 年（1962 年） 4 月	田辺市文化財審議会委員
昭和 40 年（1965 年） 7 月	社団法人 和歌山県文化財研究会理事
昭和 45 年（1970 年） 4 月	和歌山県文化財保護指導委員
昭和 49 年（1974 年）	日本考古学協会会員
昭和 62 年（1987 年） 5 月	田辺市史編さん専門委員

（受賞歴）

昭和 61 年（1986 年） 1 月	和歌山県教育研究奨励賞
平成 6 年（1994 年） 5 月	田辺市市政功労者表彰（教育功労）



ご と う し ん
後 藤 伸 氏

生年月日 昭和 4 年 12 月 1 日生

住 所 田辺市秋津町

昭和 4 年 (1929 年) 12 月 1 日、日高郡由良町で生まれる。

旧制耐久中学校から和歌山師範学校を経て、和歌山大学教育学部へ進学、昭和 28 年 (1953 年) 3 月に同大学を卒業後、教職に就く。

佐本中学校 (西牟婁郡)、衣奈中学校 (日高郡)、加太中学校 (和歌山市) の教諭を経て、昭和 38 年 (1963 年) 4 月に田辺高等学校へ赴任、その後、昭和 63 年 (1988 年) 3 月に県立南紀高等学校の教諭を最後に退職するまでの 35 年間、中学校、高等学校を通して「理科」並びに「生物」「地学」の教科を担当し、その旺盛な研究心と卓越した指導力等をもって学校教育の充実と生徒の指導・育成に尽力する。

氏は職務に専念する傍ら、早くから自然保護の重要性を感じ、特に半世紀前には紀伊半島の随所に数多く残っていた自然林、原生林とそこに生息する動植物に関し、その実態と移り変わり等について今日まで地道な研究を続けている。

紀伊半島の自然林は、昭和 30 年 (1955 年) 代を境にしてスギ・ヒノキの植林にその主役の座を奪われ、平成 10 年 (1998 年) 現在、消滅寸前の危機的状态にあり、またこうした森林の変貌とともにそこに生息する動植物も激減、紀伊半島の生態系はこの数十年間で大きく様変わりしつつある。氏は、こうした生態系の激変に早くから警鐘を鳴らし、自然と人間との本来あるべき関わり方について提唱してきた一人である。

また、照葉樹林の生物学に造詣が深く、国の天然記念物である「神島」の動植物の調査・保護活動や、ナショナル・トラスト運動発祥の地である「天神崎」の自然保護活動などにも力を尽くす。特に天神崎については、「天神崎の自然を大切にする会」発足当時からその活動の中心的存在として活躍、自然観察会など諸々の機会を通して、その重要性を広く一般に訴え、今日、全国的に有名となった「ナショナル・トラスト運動発祥の地、天神崎」の礎を築いた一人でもある。

さらに平成 9 年 (1997 年) 12 月には「いちいがしの会」を設立、「木の実を集めて苗を育て、その木を植えていく」、このことにより人だけでなく、すべての生き物が関わり合える本来の自然を取り戻し、かつて紀伊半島に溢れていた照葉樹林を復活させることを目標に田辺・西牟婁地域を中心に始められたその活動は、多くの賛同者を集め、現在、東牟婁地域へとその輪を大きく広げつつある。

第 29 回（平成 10 年）

一方、ライフワークともいうべき「カメムシ」の研究では、日本における第一人者といわれる存在であり、半世紀にわたる研究活動の中で採集した標本は、カメムシを中心に鱗翅類などを含め数万点にものぼり、その活動の範囲は、紀伊半島はもとより日本全国、さらには東南アジアやオーストラリアにまで及んでいる。

そのほか、昭和 39 年（1964 年）から田辺市文化財審議会委員を、また昭和 62 年（1987 年）からは田辺市史編さん専門委員、南方熊楠邸保存顕彰会理事などを務め、その専門分野の知識を活かして田辺市の文化財の保護、顕彰はもとより、南方熊楠の研究、紹介などに尽力している。

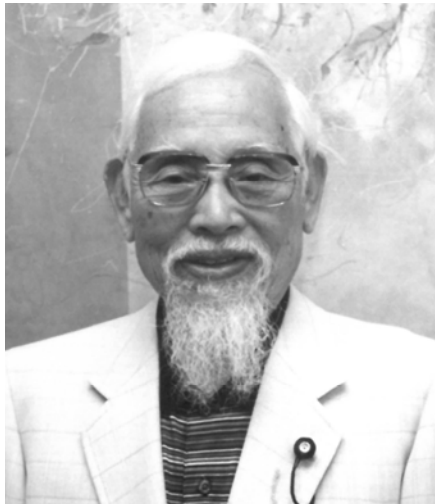
（略 暦）

昭和 28 年（1953 年） 3 月	和歌山大学教育学部卒業
昭和 28 年（1953 年） 4 月	佐本中学校教諭（その後、衣奈中学校、加太中学校教諭）
昭和 38 年（1963 年） 4 月	和歌山県立田辺高等学校教諭
昭和 54 年（1979 年） 4 月	和歌山県立南紀高等学校教諭
昭和 39 年（1964 年） 4 月	田辺市文化財審議会委員
昭和 61 年（1986 年） 4 月	財団法人 天神崎の自然を大切にする会理事
昭和 62 年（1987 年） 5 月	田辺市史編さん専門委員
昭和 62 年（1987 年） 6 月	南方熊楠邸保存顕彰会理事

その他 日本生態学会会員、日本半翅目学会会員、南紀生物同好会副会長、いちいがしの会会長、紀南文化財研究会会員

（著 書）

『くまの文庫』各集（熊野中辺路刊行会）
『自然を捨てた日本人』（共著 東海大学出版会）
『日本植生誌近畿篇』（和歌山県の植生の項執筆・至文堂）
『日本の自然 原生林紀行』（共著 山と溪谷社）
『文化 8-1（特集・南方熊楠）』（共著 岩波書店）
その他、論文、新聞・雑誌掲載など



え な か さんいちぞう

恵中 三市藏 氏

生年月日 大正 10 年 10 月 16 日生

住 所 田辺市江川町

大正 10 年（1921 年）10 月 16 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市江川）で生まれる。

昭和 11 年（1936 年）3 月、田辺第三尋常高等小学校卒業後、大阪の繊維問屋に勤める。昭和 16 年（1941 年）、召集を受け兵役に就き、九死に一生を得て帰郷する。その後、大阪の繊維問屋の経営にあたったあと、昭和 41 年（1966 年）、田辺市江川町において寝具販売を始める。

寝具店を営む傍ら、ほとんど独学で油絵、水墨画、書道、写真などに取り組み、その後、亡き戦友の追悼画集を作りたいと思ったことから絵画に力を注ぎ、作品を描き続けてこられた。

氏の作品は、絵の具と墨などを使い、油彩画と水墨画を合わせた「油墨画」という独特の技法により描かれ、フランス芸術家協会主催の「ル・サロン展」において連続入選により永久会員に選ばれ、また、「サロン・ド・トンヌ展」においても連続して入選を果たすなど、個性豊かなその作品は海外において高い評価を受け、数々の賞を受賞されており、絵画を通して国際交流にも貢献されている。

また、平成 3 年（1991 年）5 月、戦死した仲間たちの供養と育ってきた地域への恩返しの気持ちを込めて、自宅に私設の美術館「わたしの美術館 めみや」をオープンさせ、亡き戦友への慰霊絵画展の開催をはじめ、自らの作品の数々を展示し、地域の文化の振興に努められている。

この美術館には、特に、小、中学生を始めとする子どもたちが多く訪れ、備え付けられている落書き帳には、絵を見た感想やイラストなどがたくさん書かれている。

氏は、最近では、写真の上に油彩画を描いた「フォトオイルアート」という作品にも挑むなど、常に新しい世界に取り組んでおり、平成 11 年（1999 年）現在も幅広く活躍を続けられている。

第 30 回 (平成 11 年)

(略 歴)

昭和 11 年 (1936 年) 3 月 田辺第三尋常高等小学校卒業
昭和 41 年 (1966 年) 寝具店経営
平成 3 年 (1991 年) 5 月 私設美術館「わたしの美術館 めみや」オープン

(その他)

フランス芸術家協会永久会員
サロン・ド・トンヌ展協賛作家
国立ピカソ美術館協会会員
ベルギー現代芸術アカデミー永久会員
サロン・デ・ベール特別無鑑査会員
国際美術審議会栄誉会員
イタリア文化研究所芸術部門準会員

(受賞歴)

国際芸術文化賞 (1989 年)
ニューイヤースアートフェスティバル (ニューヨーク) グランプリ (1990 年)
ジャパンアートコレクション (ニューヨーク) '91 グランプリ (1991 年)
ジャパンアートフェア (ニューヨーク) アートスピーク社賞 (1992 年)
国際美術・イギリス展 1 位 (1993 年)
国際親善・フランス展 1 位 (1993 年)
スペイン&日本国際作家展優秀作家賞 (1994 年)
国際親善中・日・仏展美術館賞 (1995 年)
日韓美術交流大展準大賞 (1996 年)
国際美術大賞イタリー展 1 位 (1996 年)
ベルギー国際現代芸術展 5 年連続受賞 (金 2 銀 3) (1997 年)
サロン・ド・プランタン (パリ) 110 回記念展金賞 (1997 年)
'98 日仏最優秀ベストアーティスト大賞 (1998 年)
ローマ・バチカン国立美術館 2000 年祭コンテスト特選賞 (1998 年)
日・仏国際現代作家展ジレット市名誉市民賞 (1998 年)
日本アルゼンチン修好 100 周年最優秀作家大賞 (1999 年)
国際選抜ベストアーティスト賞 (1999 年)



ばんどう まさこ

坂東 昌子 氏

(本名 政 井 昌 子)

生年月日 昭和 8 年 8 月 1 日生

住 所 田辺市中屋敷町

昭和 8 年 (1933 年) 8 月 1 日、西牟婁郡田辺町 (現田辺市今福町) で生まれる。

幼少から日本舞踊を習い始め、戦後、坂東三恵鶴師 [第 7 回 (昭和 51 年) 田辺市文化賞受賞者] に師事。以来、本格的な舞踊会にも数多く出演。大学時代には田辺の地方劇団「カモメ座」の公演にも参加。

昭和 29 年 (1954 年) 3 月、武庫川女子短期大学文学部を卒業後、東京テレビタレントセンターで狂言・デンマーク体操・日本舞踊・新劇などの実技訓練や言語学・声楽などの理論教育を学び、その間、東京新聞主催の「舞踊コンクール」に、3 年連続して入賞を果たすなど着実にその力を伸ばしていく。

昭和 35 年 (1960 年) に帰郷し、本格的に日本舞踊の修行に専念。昭和 38 年 (1963 年)、八代目坂東流家元坂東三津五郎の許しを得て坂東流名取となる。(名披露目は「鷺娘」を踊る。)

昭和 46 年 (1971 年) 「昌門会」発足、主宰。

昭和 49 年 (1974 年)、和歌山県民文化会館で開催の「第一回和歌山県名流舞踊会」に師匠である坂東三恵鶴とともに「橋弁慶」に出演。その後、同舞踊会に回を追って出演し「傀儡師」「お夏狂乱」「三ツ面子守」などを発表。

昌門会発足以来、門弟との発表会「昌門会おさらい会」を毎年開催。昭和 59 年 (1984 年)、紀南文化会館開館を機に、同発表会の会場を同館に移し、古典、民謡、創作などを披露。特に群舞の振付けを得意とする。平成 12 年 (2000 年) 今日まで回を重ねること 17 回 (当初からは 30 回)、市内外から訪れる延べ約 2 万 5 千人を数える鑑賞者に大きな感銘を与える。

また、当地方の伝統芸能関係者と連携のもと、田辺伝統芸能協会、田辺市文化協会の設立に尽力し、平成 12 年 (2000 年) 現在、田辺市文化協会の一員として、毎年開催の文協フェスティバルに参加するなど積極的な活動を続けている。

一方、昭和 56 年 (1981 年) には、田辺大通りの開通を記念して作られた「田辺お

第 31 回（平成 12 年）

どり」の振付けを担当し、市民への普及指導にも尽力しているほか、昭和 59 年（1984 年）、紀南文化会館竣工のこけら落としでは「三番叟」をつとめ、平成 9 年（1997 年）、新庄総合公園野外音楽堂竣工のこけら落としでは、門弟を指導し「壽式三番叟」を披露、さらに平成 11 年（1999 年）の南紀熊野体験博では、オペラと日本舞踊をジョイントさせた「われもきよひめ、なれもきよひめ」で「京鹿子娘道成寺」を踊るなど、節目節目の大きな舞台で素晴らしい技と伝承の数々を披露している。

このように、長年にわたり坂東流日本舞踊の師匠として、流儀の古典を保持しつつ、時代にあった省略や創作など新しい流れをも取り入れながら、精進と研さんに努める一方で、後進の指導、育成にも力を傾け、その中で品格を重んじ、海外へ出かける門弟には必ず日本舞踊を披露するよう指導するなど、坂東流日本舞踊の伝承普及と地域の文化振興に大きな役割を果たしている。

（略 歴）

昭和 29 年（1954 年）3 月 武庫川女子短期大学文学部卒業

（その他）

日本舞踊協会会員

坂東流名取

昌門会主宰者

田辺市文化協会会員



よりもと かつみ
寄本 勝美 氏

生年月日 昭和 15 年 4 月 9 日生

住 所 東京都東村山市

昭和 15 年（1940 年）4 月 9 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市）に生まれる。

田辺高等学校卒業後、早稲田大学政治経済学部自治行政学科に入学、在学中にウイン国際奨学生としてアメリカ合衆国のブランダイス大学への留学を経験する。

昭和 39 年（1964 年）に早稲田大学を卒業後、同大学院政治学研究科に進学、その後、昭和 42 年（1967 年）から同大学政治経済学部助手を務め、専任講師、助教授を経て、昭和 53（1978 年）年に教授に就任。平成 6 年（1994 年）から平成 9 年（1997 年）にかけては同大学政治経済学部長を、また、平成 10 年（1998 年）からは同大学の常任理事を務めている。

専門分野は地方自治論と環境政策。中でも環境問題やゴミ問題では国内の権威として活躍している。

氏は、早稲田大学大学院に在学中、地方自治の現場にアプローチすることを計画し、川崎市清掃局で 1 カ月にわたってゴミ処理などの現場を実際に体験する。その時の体験をもとに『ゴミ戦争—地方自治体の苦悩と実験』（日経新書）を発表し、地方自治体のゴミ戦争に一石を投じる。また、昭和 58 年（1983 年）には、『現場の思想と地方自治』（学陽書房）を発刊、それにより日本都市学会奥井賞を受賞する。

一方、昭和 58 年（1983 年）からはアメリカ合衆国ピッツバーグ大学の客員教授として 1 年半にわたり同市の政治行政の総合研究に従事するとともに、その後も 2 度にわたり渡米し、同市のフォローアップ調査を続け、平成 5 年（1993 年）にその調査研究の成果を『自治の形成と市民—ピッツバーグ市政研究』（東京大学出版会）にまとめて発刊、これにより京都大学法学部から法学博士の学位を授与される。

大学において教鞭をとる傍ら、まちづくりやゴミ・リサイクル関連の市民団体、消費者団体のアドバイザーとして、あるいは自治体の審議会等の委員として幅広く活躍するほか、国レベルでは中央環境審議会、生活環境審議会、経済審議会、学術審議会等の委員を、また、学会では廃棄物学会会長、日本地方自治学会理事長などの要職を歴任し、平成 13 年（2001 年）現在は日本行政学会監事、日本環境会議の理事を務める。

平成 13 年（2001 年）現在、社会が抱える大きな課題であるゴミ問題、廃棄物問題の研究

第 32 回（平成 13 年）

に長年取り組み、様々な研究成果を通して 21 世紀の循環型社会の形成に向けた指針を示すとともに、近年、大きな流れとなっている「地方分権」に関しては、時流を先導する主要な研究者の一人である。

（略 歴）

昭和 34 年（1959 年） 3 月	和歌山県立田辺高等学校卒業
昭和 39 年（1964 年） 3 月	早稲田大学政治経済学部卒業
昭和 45 年（1970 年）	同大学大学院政治学研究科博士課程修了
昭和 53 年（1978 年）	同大学政治経済学部教授
平成 6 年（1994 年）	同大学政治経済学部長
平成 10 年（1998 年）	同大学常任理事

（主要論文等）

- 『現場の思想と地方自治』（学陽書房）
- 『自治の現場と参加』（学陽書房）
- 『ごみとリサイクル』（岩波新書）
- 『自治の形成と市民』（東京大学出版会）
- 『政策の形成と市民』（有斐閣）

（受賞歴）

昭和 58 年（1983 年）	日本都市学会奥井賞
平成 2 年（1990 年）	櫻田会奨励賞
平成 12 年（2000 年）	和歌山県文化賞



な か せ ひ さ は る

中瀬 喜陽 氏

生年月日 昭和 8 年 2 月 21 日生

住 所 田辺市神子浜一丁目

昭和 8 年 (1933 年) 2 月 21 日、西牟婁郡市ノ瀬村 (現西牟婁郡上富田町市ノ瀬) で生まれる。

和歌山県立田辺高等学校を卒業後、我が国古典文学への強い憧れから上京し、東洋大学文学部中国哲学文学科に進学。住み込みで働かせてくれる書店を探し、そこで働きながらの学生生活を送った。

昭和 35 年 (1960 年)、大学を卒業後、上富田町立岩田中学校教諭を経て、和歌山県立南紀高等学校の国語教諭を長く勤め、大阪青山短期大学の非常勤講師として教壇に立つ。

氏は、そうした教職の傍ら、当地方の文学、歴史、民俗など、地方文化の研究に取り組み、中でも南方熊楠や武蔵坊弁慶の研究に情熱を注いできた。

特に、30 数年前に出合った世界的博物学者である南方熊楠の書簡でその人柄に魅せられたことから、熊楠に関心を寄せ、以来、熊楠研究をライフワークとして力を傾けてきた。その成果は熊楠の残した膨大な自筆資料 (書簡、日記、原稿) の発掘と解説、関係者からの聞き取りなどとなり、『南方熊楠アルバム』『覚書南方熊楠』等多くの著書となって結実し、今日の南方熊楠研究の発展に大きく貢献した。資料の発掘、調査研究を精力的に続ける一方、最近では、市民や研究者を対象に熊楠自筆資料の解説講座を開くなど、後進の指導にも取り組む。

さらに、こうした研究者としての活躍だけでなく、昭和 62 年 (1987 年) に発足した南方熊楠邸保存顕彰会の生みの親の一人として尽力するとともに、以来、理事、常任理事として、長年にわたり顕彰会の中心的な役割を担い、熊楠邸の保存と翁の業績の顕彰に果たした功績は誠に大きい。

一方、武蔵坊弁慶の研究にも精力を傾け、平成 3 年 (1991 年)、弁慶を通して熊野地域を分析した著書『世界の熊野一弁慶の土壌』を発表した。

この他、熊野古道に光を当てた出版事業である「くまの文庫」の企画委員として編さんの中心的役割を担ったほか、文化財の調査保存や田辺市史編さんなどにも尽力し、平成 14 年 (2002 年) 現在、紀南文化財研究会副会長、田辺市文化財審議会副委員長、田辺市史編さん専門委員、田辺市文化協会副会長など数々の要職にあつて、地域文化の振興に大きな役割を果たしている。

第 33 回（平成 14 年）

また、俳誌「貝寄風」を主宰するとともに、田辺市俳句連盟会長、「よみうり和歌山文芸」俳句選者として、この地域での俳句の普及発展と後進の指導にも尽力している。

こうした長年にわたる地域文化振興への功績により、平成 4 年（1992 年）には和歌山県文化奨励賞を、さらに平成 11 年（1999 年）には文部大臣表彰を受賞している。

（略 歴）

昭和 35 年（1960 年） 3 月	東洋大学文学部中国哲学文学科卒業
昭和 35 年（1960 年） 4 月	上富田町立岩田中学校教諭
昭和 39 年（1964 年） 4 月	和歌山県立南紀高等学校教諭
平成 5 年（1993 年） 4 月	大阪青山短期大学非常勤講師

（その他）

南方熊楠邸保存顕彰会理事、常任理事
紀南文化財研究会理事、副会長
田辺市文化財審議会委員、副委員長
田辺市史編さん専門委員
田辺市文化協会理事、副会長
田辺市俳句連盟幹事、副会長、会長
俳誌「貝寄風」編集長、主宰

（主な著書）

『熊野中辺路 詩歌』（著 S50 熊野中辺路刊行会）
『説話世界の熊野－弁慶の土壌』（著 H3 日本エディタースクール出版部）
『覚書南方熊楠』（著 H5 八坂書房）
『南方熊楠独白』（編著 H4 河出書房新社）
『南方熊楠書簡－盟友毛利清雅へ』（編 S63 日本エディタースクール出版部）
『南方熊楠・門弟への手紙－上松濤へ』（編 H2 日本エディタースクール出版部）
『南方熊楠アルバム』（共編 H2 八坂書房）
『父南方熊楠を語る』（共著 S56 日本エディタースクール出版部）
『南方熊楠を知る事典』（共著 H5 講談社）
『素顔の南方熊楠』（共著 H6 朝日新聞社）
『奇想天外の巨人南方熊楠』（共著 H7 平凡社）
『熊野古道』（共著 H7 向陽書房）
句集『若王子』（著 S61 本阿弥書店）

（受賞歴）

昭和 55 年（1980 年） 2 月	和歌山県教育研究奨励賞（地方文化史の調査と研究）
平成 4 年（1992 年） 2 月	和歌山県文化奨励賞
平成 11 年（1999 年） 11 月	文部大臣表彰（地域文化の振興）



すずき けいいちろう
(故) 鈴木 桂一郎 氏

生年月日 大正 2 年 9 月 10 日生

住 所 田辺市北新町

大正 2 年（1913 年）9 月 10 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市北新町）で生まれる。

立命館大学経済学部を卒業後、昭和 21 年（1946 年）3 月に和光商事株式会社を設立、自動車関連商品の販売を中心とした事業を営む。昭和 40 年（1965 年）4 月、さらなる発展を期して三菱自動車販売株式会社のトラック・バスの県下特約販売店となり、平成 15 年（2003 年）現在の和歌山三菱ふそう自動車販売株式会社の礎を築く。以後、着実に業績を伸ばし、和歌山県下自動車業界の中でゆるぎない地位を確立、その間多くの役職を歴任し、自動車業界の発展に寄与する。

また、昭和 51 年（1976 年）4 月からは田辺商工会議所会頭を務め、その発展に尽力するとともに、商業の近代化などにも力を傾け、地域経済の振興に大きく貢献する。

その傍ら、氏は、田辺に数々の史跡や伝承が残る武蔵坊弁慶の研究に取り組み、出雲や東北をはじめ全国各地に点在する弁慶の伝承地を訪れて、実際にその地の史跡や伝承を見聞きするとともに、弁慶に関する多くの物語や研究論文、地方資料等の書物を取りそろえ、さらに各地の研究者や国立国会図書館などからも資料を集め、そうした現地調査と収集資料から「弁慶は実在していた」という研究結果を発表するなど、長年にわたり弁慶に関する研究に情熱を傾ける。

氏が収集した書物などの数々の資料は「弁慶文庫」として市立図書館に寄贈され、武蔵坊弁慶に関する貴重な資料として、平成 15 年（2003 年）現在も多くの人々に活用されている。

一方、昭和 50 年（1975 年）に源義経東下り絵巻などの調査のため岩手県平泉町の中尊寺を訪問したことを契機に、その後も、源義経公東下り行列への参加や中尊寺境内への「弁慶の森」の寄贈など、同町との間で数々の交流を重ね、弁慶生誕の地である田辺市と終焉の地である平泉町との友好関係の醸成に力を注ぎ、昭和 57 年（1982 年）5 月の田辺市と平泉町との姉妹都市提携に大きな役割を果たす。

第 34 回 (平成 15 年)

また、長年の調査、研究に基づいて「弁慶まつり、武蔵坊弁慶・熊野水軍出陣行列」を提案、昭和 62 年 (1987 年)、自ら実行委員長を務め、「武蔵坊弁慶・熊野水軍出陣 800 年祭『第 1 回弁慶まつり』」の開催に尽力し、紀南最大級のイベントの創設に大きく貢献する。

そのほか、かつて当地方の特産物であった紀州生まつ松煙の間屋、新仁商店の四代目当主として、昭和 30 年 (1955 年) 代半ばまで伝統の技法を守り続けるとともに、平成 5 年 (1993 年) には、その歴史と技法を後世に伝えるため、絵や写真を配してまとめた小冊子「紀州生まつ松煙」を発刊、紀州生まつ松煙に関する貴重な資料として評価されている。また、曾祖父の実弟で墨の研究に生涯をかけて梅仙墨を創始した墨匠、鈴木梅仙の顕彰にも力を傾ける。

長年にわたり武蔵坊弁慶の研究に情熱を傾けるとともに、それに加えて弁慶を通じた地域振興に尽力し、本市の文化の振興、さらには地域の発展に果たした功績は誠に大きい。

(略 歴)

昭和 14 年 (1939 年) 3 月	立命館大学経済学部卒業
昭和 14 年 (1939 年) 4 月	トヨタ自動車工業株式会社
昭和 21 年 (1946 年) 3 月	和光商事株式会社取締役社長
昭和 40 年 (1965 年) 4 月	和歌山三菱ふそう自動車販売株式会社取締役社長
平成 3 年 (1991 年) 4 月	和歌山三菱ふそう自動車販売株式会社取締役会長

(その他)

田辺商工会議所会頭
和歌山県商工会議所連合会副会長
和歌山県経営者協会副会長
和歌山県自動車整備振興会副会長
田辺市都市計画審議会委員

(受賞歴)

昭和 54 年 (1979 年) 5 月	和歌山県知事表彰 (産業功労)
昭和 59 年 (1984 年) 春	勲五等双光旭日章 (産業振興功労)
平成 6 年 (1994 年) 5 月	田辺市市政功労者表彰 (産業功労)



な か た よ し じ ょ

中 田 昌 女 氏

生年月日 明治 39 年 11 月 12 日生

住 所 田辺市秋津町

明治 39 年 (1906 年) 11 月 12 日、西牟婁郡田辺町 (現田辺市) に生まれる。

昭和 9 年 (1934 年)、下秋津村 (現田辺市秋津町) の中田秀次郎氏と結婚。家業に励む傍ら、農家の手助けにと、昭和 17 年 (1942 年) に農繁期託児所を開設。太平洋戦争により一時中断するが、戦後、昭和 26 年 (1951 年) に「あやめ保育園」として再開、約 2 年間にわたって農繁期保育を実施したほか、地域の先達として婦人会活動にも積極的に参画し、その円満な人格をもって西牟婁郡婦人会会長や田辺市婦人団体連絡協議会会長に推挙され、様々な活動を通して女性の地位向上や地域社会の発展に尽力した。

一方、若齢の頃から生け花と茶の湯の道に心を打ち込み励んできた氏は、その道を自分のたしなみのみとせず、田辺高等学校をはじめ、市内各地で指導をするとともに、戦後、田辺市茶華道連盟発足の際には役員の一員としてその実現への一翼を担う。その後、同連盟の運営と発展のために力を尽くし、昭和 54 年 (1979 年)、副会長に就任。また、昭和 33 年 (1958 年)、未生流 (庵家) 紀南支部設立の際には発起人の一人として奔走、設立実現当初は副支部長、さらに、昭和 40 年 (1965 年) 以降は支部長として長年にわたり当地方の未生流華道の普及と支部の充実・発展に尽力する中で、和歌山県いけばな協会の役員や未生流 (庵家) の評議員、顧問をも務め、当地方の華道界、茶道界の中心的存在として広く活躍。

また、華道家として田辺市美術展覧会の運営にも早くから積極的に参画。本市の芸術・文化の振興・発展に大きく貢献している。同展覧会においては、昭和 49 年 (1974 年) から插花部門への無審査出品を続け、その充実に寄与するとともに、昭和 59 年 (1984 年) には運営委員に就任し、翌年、一般公募による「生け花部門」の創設と、その後の運営・審査等に深く携わるなど、同展覧会、とりわけ生け花部門の充実・発展に尽力し、いわゆる「市展」として半世紀有余の歴史と伝統を築いている同展覧会を支えてきた一人である。

その他、後進の指導にも熱心に取り組み、自宅をはじめ市内数カ所で生け花の教室を開催するなど、地域の人々に日本の伝統文化に接する機会の提供、あるいは花木を愛でる豊かな心の育成等々、長年にわたり華道、茶道の普及・振興を通して本市文化の向上・発展に尽くした功績は誠に多大である。

第 35 回 (平成 16 年)

(略 歴)

大正 12 年 (1923 年)	和歌山県立田辺高等女学校卒業
昭和 25 年 (1950 年) 8 月	西牟婁郡婦人会会長
昭和 33 年 (1958 年) 4 月	田辺市公民館運営審議会委員
昭和 37 年 (1962 年) 4 月	同上
昭和 37 年 (1962 年)	田辺市婦人団体連絡協議会会長 (第 5 代)
昭和 33 年 (1958 年) 1 月	未生流 (庵家) 紀南支部副支部長
昭和 35 年 (1960 年) 4 月	未生流 (庵家) 評議員
昭和 40 年 (1965 年) 1 月	未生流 (庵家) 紀南支部長
昭和 44 年 (1969 年)	和歌山県いけばな協会常任幹事
昭和 49 年 (1974 年)	田辺市美術展覧会無審査出展
昭和 54 年 (1979 年)	田辺市茶華道連盟副会長
昭和 56 年 (1981 年) 4 月	未生流 (庵家) 顧問
昭和 59 年 (1984 年)	田辺市美術展覧会運営委員
昭和 60 年 (1985 年)	田辺市美術展覧会審査員
	和歌山県いけばな協会中紀支部長
平成 9 年 (1997 年)	田辺市美術展覧会顧問
平成 13 年 (2001 年)	田辺市美術展覧会招待出展



こ も り よ う た ろ う
(故) 小森 陽太郎 氏

生年月日 大正 15 年 11 月 9 日生

住 所 田辺市上万呂

大正 15 年（1926 年）11 月 9 日、西牟婁郡富里村（現田辺市下川下）に生まれる。

昭和 22 年（1947 年）に和歌山師範学校を卒業後、教諭として二川中学校を振り出しに、東陽中学校、西牟婁地方教育事務所等に勤務の後、38 歳の若さで椿小学校長に着任。以後、田辺第一小学校長、西牟婁地方教育事務所長、東陽中学校長などを歴任、39 年の長きにわたり教育に対する強い信念と豊かな見識、卓越した指導力をもって当地域の児童・生徒の育成と教育行政の充実・発展に尽力。

特に国語教育の充実を唱え、教職員の資質の向上や授業研究に力を傾ける一方で、当地方教育界に働きかけ「西牟婁地方国語科研究会」を設立、その中心的存在として活躍。その成果の一つである研究誌「国研」の刊行のほか、同研究会会長当時に創刊した児童・生徒の作文集「やまなみ」の刊行は、その後も後進に引き継がれ、地域児童・生徒の国語力、作文力の向上、国語教育の充実・発展に大きな足跡を残した。

一方、昭和 47 年（1972 年）から 30 年間にわたり和歌山県同和委員会委員を務め、とりわけ指導部副部長として各地での講演活動や執筆活動に精力的に取り組むとともに、和歌山県における同和问题早期解決に向け、その先頭に立って「県民みんなの同和運動」の定着と発展、人権意識の高揚のために尽力。こうした長年の功績により、昭和 62 年（1987 年）には和歌山県知事表彰を受賞。さらに平成 12 年（2000 年）3 月に和歌山県同和委員会が発刊した冊子「人権文化の創造-同和问题解決への結集-」の編さんの中心的役割を果たすなど、同和问题の正しい理解と認識のための普及・啓発活動や人権意識の高揚に尽くした。

また、教職を退いた後、請われて紀伊民報社の特別論説委員としてコラム「水鉄砲」の執筆に参加、昭和 62 年（1987 年）から 15 年余にわたり同欄の主筆として、社会問題や教育問題など幅広いテーマについて読者に語りかけ、コラム「水鉄砲」を通して、政治・文化・生活など様々な問題に対する人々の意識の高揚に

第 35 回（平成 16 年）

大きな影響を与えた。

このように多年にわたり当地域における教育の向上や人権意識の高揚、文化の振興等々、幅広い分野で活躍し、本市発展に果たした氏の功績は誠に多大である。

（略 歴）

昭和 22 年（1947 年）	3 月	和歌山師範学校卒業
昭和 22 年（1947 年）	4 月	西牟婁郡二川村立二川中学校教諭
昭和 23 年（1948 年）	4 月	西牟婁郡栗栖川村立栗栖川中学校教諭
昭和 28 年（1953 年）	4 月	田辺市立東陽中学校教諭
昭和 32 年（1957 年）	4 月	西牟婁地方指導室（現西牟婁地方教育事務所）主事
昭和 39 年（1964 年）	4 月	西牟婁郡白浜町立椿小学校長
昭和 44 年（1969 年）	4 月	田辺市立上秋津小学校長
昭和 49 年（1974 年）	4 月	田辺市立田辺第一小学校長
昭和 55 年（1980 年）	4 月	西牟婁地方教育事務所長
昭和 58 年（1983 年）	4 月	田辺市立東陽中学校長
昭和 47 年（1972 年）	8 月～平成 14 年（2002 年）	3 月 和歌山県同和委員会委員

（受賞歴）

昭和 62 年（1987 年）	5 月	和歌山県知事表彰（社会福祉功劳）
-----------------	-----	------------------



すみ しょうぞう
角 莊 三 氏

生年月日 昭和 6 年 1 月 20 日生

住 所 田辺市秋津町

昭和 6 年（1931 年）1 月 20 日、鳥取県境港市に生まれる。

昭和 26 年（1951 年）、和歌山県教育委員会採用、周参見中学校を振り出しに、教諭として東陽中学校、高雄中学校に勤務の後、田辺市教育委員会学校教育課長、高雄中学校長などを歴任。

退職後、田辺青少年補導センター長に続いて、田辺市教育長を 2 期務めるなど、通じて約半世紀にわたり教職及び教育行政に深く携わり、その豊かな見識と強い信念、卓越した指導力をもって本市教育の充実・発展に尽力。

特に氏は、音楽の分野に造詣が深く、昭和 35 年（1960 年）には田辺地方の音楽愛好家たちが団結し、田辺市で初めてのオペラ「手古奈」（文部省委嘱公演）の管弦楽編曲と指揮を担当、その成功に大きく貢献したほか、バレエ組曲「宝石」（昭和 37 年（1962 年）、法村・友井バレエ団により大阪フェスティバルホールにて公演）をはじめ、数多くのバレエ音楽の作曲に取り組んだ。

また、合唱曲の作曲にも取り組み、昭和 40 年代に氏が作曲し、音楽之友社から出版された中学生のための合唱曲（「空は青い広場」、「雪溪より」他）は、当時各地のコンクールなどでよく取り上げられたが、さらに昭和 46 年（1971 年）の「第 26 回国民総合体育大会（黒潮国体）」の開催に際し、その開会式において約 700 人が大合唱した「黒潮国体賛歌」の作曲を担当したほか、平成 9 年（1997 年）の和歌山県民体育大会の入場行進曲にも使用された「第 2 回全国アウトドアスポーツフェア賛歌」等、吹奏楽や管弦楽の作曲にも力を注ぐ。一方、近年、オペラの名場面からの編曲をも手がけ、ヴェルディほかの著名なオペラから編曲した 6 曲の女声五重唱曲は、東陽中学校合唱部選抜メンバーにより、たびたびコンクールで歌われ、好成績を収めているが、中でもオペラ「椿姫」からの「ピキロは闘牛士」など 3 曲の重唱は、こども音楽コンクールにおいて全国 1 位となり、文部大臣賞を受賞。このほか田辺工業高校や衣笠中学校など、近隣の小・中学校、高校等の校歌、保育園の園歌などの作曲も多数手がけており、こうした作・編曲を通して当地域の教育・文化の振興・発展に大きな足跡を残した。

第 35 回（平成 16 年）

なお、氏は、今後、生涯学習社会にあつて地域文化の振興、情報発信の中心的役割を果たすべき文化協会組織の必要を唱え、その設立に向けて平成 3 年（1991 年）12 月に田辺市文化協会設立準備委員会の委員長に就任、田辺市文化協会設立の中心的存在として尽力し、引き続いて翌 4 年（1992 年）10 月に設立を見た同協会の初代会長として「文協フェスティバル」や「文化講演会」等の事業に取り組み、その運営の道筋をつけた。

このように多年にわたり本市教育の向上と広く地域文化の振興・発展に尽くした氏の功績は誠に多大である。

（略 歴）

日本大学文学部卒業

昭和 26 年（1951 年）6 月	西牟婁郡周参見町立周参見中学校助教諭・教諭
昭和 34 年（1959 年）4 月	田辺市立東陽中学校教諭
昭和 50 年（1975 年）4 月	田辺市立高雄中学校教諭
昭和 55 年（1980 年）4 月	田辺市立高雄中学校教頭
昭和 56 年（1981 年）4 月	田辺市教育委員会指導主事
昭和 59 年（1984 年）4 月	田辺市教育委員会学校教育課長
昭和 61 年（1986 年）4 月	田辺市立高雄中学校長
平成 4 年（1992 年）4 月	田辺青少年補導センター長
平成 6 年（1994 年）7 月	田辺市教育委員会教育長

平成 3 年（1991 年）12 月	田辺市文化協会設立準備委員会委員長
平成 4 年（1992 年）10 月	田辺市文化協会会長

（受賞歴）

平成 14 年（2002 年）秋	勲五等双光旭日章（教育功労）
平成 14 年（2002 年）5 月	田辺市市政功労表彰（教育功労）



た の う え みのる

田 上 實 氏

生年月日 大正 5 年 3 月 15 日生

住 所 田辺市あけぼの

大正 5 年（1916 年）3 月 15 日、西牟婁郡栗栖川村（現田辺市中辺路町栗栖川）で山林業を営む両親の次男として生まれる。幼少の頃から絵に素質があり、「御大典（ごたいてん）記念」に応募した絵が入賞するなど早くからその才能を開花させる。その後、和歌山師範学校に入学するに至り、本格的に絵の勉強を始める。

昭和 10 年（1935 年）、師範学校を卒業後、田辺第二小学校訓導として赴任するが、画家への思いが深く上京を決意するところとなり、東京都内の小学校に奉職、昼間は教師として教壇に立ち、夜間はデッサンの勉強のため絵画教室に通う、という日々を送る。しかし、小学校の教職と絵画の勉強の両立を前に二者択一を悩み続けるが、同僚の影響もあって教師としての仕事に魅力を感じる心境の変化に加え、戦時下という情勢もあって帰郷、田辺第一小学校教諭に戻る。以来、昭和 50 年（1975 年）に上富田中学校の校長をもって退職するまでの 40 年間、教育の現場で児童・生徒の育成と学校教育の充実・発展に尽くす。

画家への夢は、当然のごとく退職後よみがえり、再びキャンバスに向かうこととなる。故益山英吾氏〔第 4 回（昭和 48 年）田辺市文化賞受賞〕（光風会・日展会員）に師事し、昭和 51 年（1976 年）には「光風会」において初入選を果たす（以後 24 回連続入選）。さらに平成 4 年（1992 年）には 75 歳にして「日展」への初入選の栄を得、以後 4 回連続入選を果たすなど、中央画壇へ進出する。

一方、昭和 61 年（1986 年）には田辺美術協会の副会長に就任、当時の益山会長を補佐し、協会の発展に大きく尽力、平成 12 年（2000 年）には益山会長の後を引き継いで協会の会長を務め、平成 14 年（2002 年）に退任するまでの間、協会の運営はもとより、当地方の美術振興の先達としてその手腕を振るい活躍。その傍らで昭和 28 年（1953 年）以降、田辺市美術展覧会運営委員（「洋画の部」審査員）を通算して 35 年間にわたって務め、同展覧会の充実・発展に寄与する。

また、「日展」連続入選を記念して初めて開催した個展では、その収益金の全てを福祉施設に寄付し、社会福祉面でも貢献するほか、田辺・西牟婁地方の 4 ヶ所の公民館において絵画サークルの講師を務めるなど、教職を退職後の生活の中心に画業を据えて創作活動に一意

第 36 回（平成 17 年）

専心、数々の優れた作品を制作する一方で業績を重ね、田辺市はもとより当地方の芸術・文化の振興に大きく貢献する。

（略 歴）

昭和 10 年（1935 年）	和歌山師範学校卒業
昭和 35 年（1960 年） 4 月	中辺路町立二川中学校校長
昭和 37 年（1962 年） 4 月	上富田町立朝来小学校校長
昭和 45 年（1970 年） 4 月	上富田町立上富田中学校校長
昭和 50 年（1975 年） 3 月	上富田町立上富田中学校校長を退職

（その他）

昭和 28 年（1953 年）	田辺市美術展覧会運営委員（「洋画の部」審査員）
昭和 29 年（1954 年）	田辺美術協会幹事
昭和 61 年（1986 年）	田辺美術協会副会長
平成 12 年（2000 年）	田辺美術協会会長
	和歌山県美術展覧会審査員
平成 14 年（2002 年）	田辺美術協会顧問

（受賞歴）

昭和 51 年（1976 年）	光風会初入選（以後 24 回連続入選）
平成 4 年（1992 年）	日展初入選（以後 4 回連続入選）



う え としかつ
宇江 敏勝 氏

生年月日 昭和 12 年 8 月 28 日生

住 所 田辺市中辺路町野中

昭和 12 年 (1937 年) 8 月 28 日、三重県尾鷲市に生まれる。

幼少のころ西牟婁郡近野村 (現田辺市中辺路町野中) に住まいを移し、熊野の樹林で製炭業 (炭焼き) を生業とする両親のもとで育つ。昭和 32 年 (1957 年) に熊野高等学校を卒業し、家業の製炭業に従事、やがて植林や伐採などの山林労務に従事するようになる。炭焼きと山小屋での生活、植林作業など、厳しい杣 (そま) 作業の傍ら執筆活動に励み、詩と小説の同人誌「VIKING」や「文学界」に参加、小説「牧歌は途絶えた」を発表する。

当初、創作文学への道を志すが、やがて非常に特異な世界に居る自分に気付き、山の生活を内側からありのままに描写する手法へその執筆の姿勢を変え、昭和 55 年 (1980 年)、自身の生い立ちやその生活を克明に綴った『山びとの記』 (中央公論社) を上梓、簡潔な文体と実際の体験に裏打ちされた作品のリアリティーが注目を集めることとなる。

氏の執筆の多くは、これまであまり紹介されなかった山びとの暮らしを、昭和 30 年代からの時代の移り変わりの中で、自身の生活体験を下敷に自らの目で確かめて記録し、広く世に紹介するものであるが、それは山仕事の内容や具体的な方法から、産業としての「林業」と対峙して客観的に考察を加え、問題提起し、さらには失われつつある日本人の情操にも踏み込んだ内容に至るまで、平易な表現で語りかけるものである。

今なお熊野の里に居を構える氏は、この間、平成 14 年 (2002 年) に 7 年の歳月をかけた選集『宇江敏勝の本』第 1 期全 6 巻を完結させ、紀伊半島だけでなく日本各地の森に山びとを訪ね、紀行やエッセー、聞き書きなど、さまざまなスタイルを駆使して綴られた記録文学を集成。こうして氏の著作は昭和 55 年 (1980 年) の『山びとの記』の出版以降、この選集を含めて、増補、改定、再販等を合わせると 26 冊を数え、現在も活躍中の「山の作家」である。

また、著述業や山林業の傍ら、これまでの豊富な知識と経験を生かして「熊野古道」や「熊野奥駈道」の語り部としても活躍するとともに、講演活動など、さまざまな機会を通して熊野の魅力と自然のすばらしさを広く紹介している。

第 36 回 (平成 17 年)

(略 歴)

昭和 32 年 (1957 年) 3 月	和歌山県立熊野高等学校卒業
昭和 32 年 (1957 年) 5 月	家業の製炭業に従事
昭和 33 年 (1958 年) 10 月	近野森林組合青年作業班に在籍、林業労務に従事
昭和 48 年 (1973 年) 9 月	切口造林 (奈良県野迫川村) の現場責任者として、山小屋に居住
昭和 55 年 (1980 年) 6 月	『山びとの記』(中央公論社) を出版、執筆生活に入る
平成 4 年 (1992 年)	語り部として熊野古道の案内や講師を務める
平成 14 年 (2002 年) 10 月	選集『宇江敏勝の本』第 1 期全 6 巻 (新宿書房) を完結、引き続き第 2 期全 6 巻を刊行中

(主な著書)

『山びとの記』(中央公論社)
『山に棲むなり』(新宿書房)
『焼日記』(新宿書房)
『昭和林業私史』(農山漁村文化協会)
『熊野草紙』(草思社)
『木の国紀聞』(新宿書房)
『青春を川に浮かべて』(福音館書店)
『森のめぐみ』(岩波書店)
『樹木と生きる』(新宿書房)
『森を行く旅』(新宿書房)
『山びとの動物誌』(新宿書房)
『熊野修験の森』(岩波書店)
『森の語り部』(新宿書房)
『若葉は萌えて』(新宿書房)
『世界遺産熊野古道』(新宿書房)

(受賞歴)

昭和 58 年 (1983 年)	和歌山県文化奨励賞
平成 3 年 (1991 年)	第 15 回井植文化賞
平成 10 年 (1998 年)	地域文化功労者文部大臣表彰
平成 17 年 (2005 年)	和歌山県文化功労賞



さかもと いさお
坂本 勲生 氏

生年月日 昭和 3 年 7 月 21 日生

住 所 田辺市本宮町本宮

昭和 23 年 (1948 年) に和歌山師範学校を卒業ののち、教員として和歌山県に奉職し、以来 40 年の長期にわたって小・中学校で教鞭を執り、とりわけ、へき地教育に心血を注ぐ。

昭和 63 年 (1988 年)、本宮町立三里中学校校長を最後に退職したのち、翌、平成元年 (1989 年) に本宮町町史編さん室長に就任、町史編さんの中心的役割を担う。それは、自ら足を運んでの資料収集はもとより、様々な編さん業務と直接かつ精力的に向き合う姿勢を堅持し、16 年の歳月をかけた本宮町史 (「近世史料編」「近現代史料編」「文化財編・古代中世資料編」「通史編」) を完成させる。また、平成 2 年 (1990 年) からは本宮町文化財保護委員会委員に、さらに平成 5 年 (1993 年) から同委員会委員長に就任し、本宮町内の文化財の保護・研究に力を尽くすとともに、生涯学習サークル「古文書に親しむ会」を主宰するなど、郷土の歴史・文化研究のリーダーとして活躍している。

一方、平成 2 年 (1990 年) に郷土の歴史・文化の魅力を伝える観光ガイド「紀州語り部」として財団法人和歌山県観光連盟の登録を受け、歴史の道「熊野古道」の語り部第一人者として活動を始める。その後、平成 10 年 (1998 年) には「紀州語り部」の登録を受けたガイドによって組織された「本宮町語り部の会(現熊野本宮語り部の会)」の会長に就任し、翌 11 年 (1999 年) に紀南地方 16 市町村を会場に開催された「南紀熊野体験博」では、古道ガイドとして、時には古文書の解説を挟みながら幅広い知識と経験をもとに熊野古道の案内を行うなど、全国各地から熊野の地を訪れた来訪者に心地よいもてなしを提供する。こうした長年の活動により、平成 15 年 (2003 年) 12 月には、観光振興のために活躍する地域のリーダーとして、国土交通省の「観光カリスマ百選」選定委員会から「熊野古道の人気を支える語り部のカリスマ」に選ばれる。

平成 18 年 (2006 年) 現在も世界遺産の地にあって熊野本宮語り部の会会長として、現地研修会の開催や説明のための資料収集、冊子の編さん等に取り組む傍ら、「語り部」研修会において自ら講師を務めるなど、様々な活動を通して後進の育成や会員レベル向上に力を傾けるとともに、本宮地域のまちおこしや地域振興、熊野古道の保全・PR など幅広い分野で活躍している。

第 37 回 (平成 18 年)

(略 歴)

昭和 23 年 (1948 年)	和歌山師範学校卒業
昭和 63 年 (1988 年)	本宮町立三里中学校校長を退職
平成 元 年 (1989 年)	本宮町町史編さん室長
平成 2 年 (1990 年) 4 月	本宮町文化財保護委員会委員 (平成 5 年～同委員長)
平成 10 年 (1998 年)	本宮町語り部の会 (現熊野本宮語り部の会) 会長
平成 15 年 (2003 年) 12 月	語り部として国土交通省「観光カリスマ百選」に選ばれる
平成 17 年 (2005 年) 5 月	田辺市文化財保護審議会委員 (同副委員長)
平成 17 年 (2005 年) 8 月	田辺市景観保全審議会委員
平成 18 年 (2006 年) 4 月	和歌山県文化財保護指導委員



しみず まさじ
清水 正治 氏

生年月日 昭和 4 年 1 月 1 日生

住 所 田辺市下万呂

昭和 34 年 (1959 年) 4 月に田辺市人権擁護連盟理事に就任して以来、半世紀近くにわたり同連盟の理事、常任理事、副理事長、理事長等の要職を歴任、同和問題をはじめとするあらゆる人権問題、差別問題の解決に奔走し、市民の人権意識の高揚と同連盟の発展に多大の貢献をする。

一方、万呂公民館長に就任した昭和 47 年 (1972 年) 頃から公民館活動の一つとして、昔の暮らしの道具や子どもたちの遊び道具など古いものを集めて展示し、併せて地域の高齢者から当時の様子を聞くという「ふるさとの歴史展」の取組を続ける。この展示が小・中学校の先生方の目に止まり、社会科教育の一環として多くの子どもたちがこの公民館の展示を見学を訪れ、それに合わせて一般の人々からも戦時中の資料や昔の暮らしに関する様々な資料が寄せられるようになる。

こうした資料の活用方法を模索する中で、平成 4 年 (1992 年) に自宅の納屋 3 棟を資料室に改造するに至り、暮らしの中の民具や戦前・戦中の様々な資料を常設展示する「つどいの家・昔の暮らし資料室」を開設、学校の授業の中で訪れる子どもたちをはじめ、広く一般にも公開し、当時の生活の様子を人々に語り伝える活動をしている。この資料室は、①戦前戦後の暮らしの資料室、②戦争と暮らしの資料室、③暮らしと人権の資料室、④熊野古道と郷土の資料室の 4 つのコーナーに分けられており、その中には江戸時代末期から明治、大正、昭和の時代にかけて庶民の日常生活で使われた道具や設備、当時の学校で使われた教科書や学用品、戦前・戦中と人権確立を目指した民衆運動の資料や、同和問題、女性問題、障害者問題に関する資料など、長年にわたって収集した膨大な数の資料を展示・収蔵している。

この「つどいの家・昔の暮らし資料室」には、平和の学習や昔の暮らしの学習で訪れる児童・生徒の他、各地の婦人会や高齢者学級など多くの人々が見学を訪れ、また、展示されている数々の資料は、平和を願う事業に取り組んでいる機関や団体をはじめ、市町村の教育委員会や公民館等が実施する「平和学習展」や「人権学習展」、「郷土のあゆみ展」等に貸し出すなど、当時の資料に直接触れることを通して現在の暮らしを見直し、平和の尊さや人権の大切さを再認識するためのきっかけを広く人々に提供している。

第 37 回 (平成 18 年)

(略 歴)

昭和 18 年 (1943 年) 3 月	万呂国民学校高等科卒業
昭和 23 年 (1948 年) 3 月	天理教校専修科 (2 年制) 卒業
昭和 34 年 (1959 年) 4 月	株式会社中央新聞社勤務
昭和 35 年 (1960 年) 4 月	有限会社紀州日報社勤務
昭和 34 年 (1959 年) 4 月	田辺市人権擁護連盟理事
昭和 45 年 (1970 年) 4 月	田辺市人権擁護連盟常任理事
昭和 63 年 (1988 年) 4 月	田辺市人権擁護連盟副理事長
平成 4 年 (1992 年) 4 月	田辺市人権擁護連盟理事長
平成 8 年 (1996 年) 4 月	田辺市人権擁護連盟顧問
昭和 37 年 (1962 年) 4 月	田辺市公明選挙推進協議会委員
昭和 39 年 (1964 年) 4 月	田辺市明るく正しい選挙推進協議会委員
昭和 47 年 (1972 年) 4 月	田辺市万呂公民館長
昭和 50 年 (1975 年) 5 月	田辺市明るい選挙推進協議会委員

(受賞歴)

昭和 60 年 (1985 年) 11 月	自治大臣感謝状 (国民参政権 95 周年記念他)
平成 元 年 (1989 年) 11 月	自治大臣表彰 (選挙制度 100 周年記念)
平成 18 年 (2006 年) 5 月	藍綬褒章 (選挙関係事務功績)



お が わ けん どう
小 川 虔 道 氏

りょうざん
(号 令 山)

生年月日 大正 9 年 9 月 22 日生

住 所 田辺市明洋二丁目

古典芸能に通じ、長年にわたり尺八奏者として数々の演奏会に出演するなど、田辺市の邦楽界の一翼を担ってきた一人である。また、盟友である那須^{じゅんざん}筭山師とともに生田流箏曲「菊宮会」の後見人的存在でもあり、同会会員とともに演奏する三曲合奏（琴、三絃、尺八）には欠くことのできない尺八奏者として、第一線で活躍している。

氏の尺八との出会いは、戦時中にまで遡る。当時、中国大陸に出征していた氏は、同じ部隊に所属する尺八の師範との交流を通してその魅力に触れ、そのことをきっかけに尺八を習い始める。戦後、帰郷した後、都山流尺八の森木^{とざん}葭山氏^{かざん}（本名 森木啓之^{なんりん}）[第 6 回(昭和 50 年)田辺市文化賞受賞]に師事、同氏が主宰する「南琳会」の一員として各種演奏会に出演するなど、尺八を通して古典芸能である邦楽の発展に寄与する。

また、昭和 59 年（1984 年）に設立され、現在の田辺市文化協会の前身となる田辺伝統芸能協会の主要な構成員として、同年 6 月に開館した紀南文化会館の開館記念地元参加行事「たなべ伝統芸能まつり」に出演、その後も同協会主催の演奏会などにおいて、日本の伝統的な楽器である尺八の音色を多くの観衆に披露してきた。

昭和 55 年（1980 年）頃には、同門の那須^{こうざん}筭山師、松本耕山師らとともに都山流尺八「^{ごちく}悟竹会」を結成、その代表を務めるとともに、平成 4 年（1992 年）10 月に発足した田辺市文化協会に同会として加盟し、翌平成 5 年（1993 年）6 月に開催された「第 1 回文協フェスティバル」の舞台部門に出演する。その後も同フェスティバル舞台部門に毎年のように出演を果たし、同協会の発展に寄与するとともに、菊宮会との琴、三絃、尺八による三曲合奏を通して邦楽の重厚さと品格を現在に伝え続けてきた。

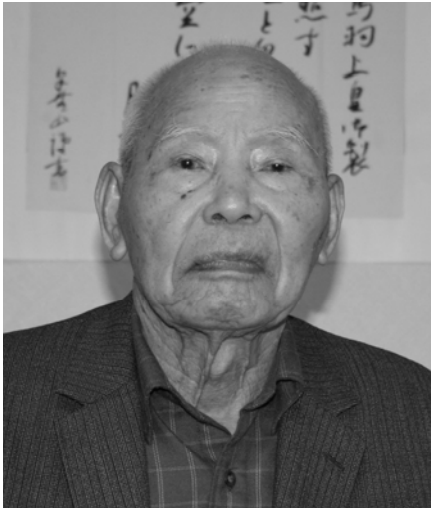
また、尺八だけではなく、雅楽で使用される“ひちりき”などの伝統的な楽器にも精通しており、過去には県指定民俗文化財である「田辺祭」の笠鉦の内囃子に参加（横笛）したり、後継者の指導・育成に携わったりするなど、地域の伝統文化の保存・

第 38 回（平成 19 年）

伝承にも取り組んできた。更に闘雞神社での「新春演奏会」や奇絶峡の「桜まつり」、田辺（石神）梅林の「梅林まつり」等の各種行事や小学校での音楽鑑賞への参加・協力など、様々な機会をとらえて邦楽の魅力を人々に伝え、当地域の文化の振興に寄与している。

（略 歴）

昭和 21 年（1946 年）	森木 ^{かざん} 葭山氏（本名 森木啓之）に師事
昭和 24 年（1949 年）	都山流尺八皆伝免許を取得
昭和 44 年（1969 年）	都山流尺八准師範免許を取得
昭和 52 年（1977 年）	都山流尺八師範免許を取得
昭和 55 年（1980 年）	都山流尺八「悟竹会」代表



もりもと

まさお

森本 正男 氏

かむさん
(雅号 果無山)

生年月日 明治 40 年 10 月 21 日生

住 所 田辺市中辺路町野中

中辺路町野中で、山仕事に従事しながら「地方史」、「民俗」、「地誌」の研究など、文化活動を続けてきた地方史家であり、平成 20 年（2008 年）満 101 歳を迎えた。

氏は、昭和の初期に当地（旧田辺）の地方紙である「熊野太陽」へ勤務し、その後昭和 5 年（1930 年）に和歌山県立蚕業試験場を卒業、同試験場に勤務の後、昭和 13 年（1938 年）からは「大日本民報」の記者及び経営者として同紙の発刊に辣腕を振るう。

一方、居住地域のみならず、紀南や熊野の、一般人が容易に訪れたりしないような奥地にも足を踏み入れ、そうした土地の隠れた歴史を掘り起こしてきていることに氏の面目はある。これは昭和 19 年（1944 年）から、警察官としてすさみ、湯の峯、本宮、九重等に勤務し、地域の生活風土を体感した経緯によるところが大きい。こうした中、昭和 45 年（1970 年）12 月には、約 2 年にわたって紀南の各地を歩き、自ら収集した史料や伝承などを集めた『牟婁風土記』を刊行し、またその後、日高地方を中心に紀南各地を巡り様々な史料を集め、昭和 47 年（1972 年）から翌年にかけて「天正兵乱」時の湯川氏を中心にした紀南の諸豪の動静を書きまとめた『天正兵乱のこと』を、平成 18 年（2006 年）5 月に発刊する。

また、氏の論文や論評、随筆などは、自らの著書の他にも様々な刊行物に掲載されており、特に中辺路町の公民館報である「なかへち」には、『郷土物語』、『続郷土物語』を 60 回、『山中随想・古道のささやき』を 30 回の合計 90 回にわたり連載されているのをはじめ、橋本観吉氏主宰の季刊誌『熊野史研究』には、平成 11 年（1999 年）に 50 号で終刊になるまでの間に 45 回の寄稿を行う。このほか、「くちくまの」、「中辺路文化」、「番所山通信」、「家の光」、「紀州政経新聞」や「近野民報」、また最近でも季刊随筆誌「土」への寄稿（平成 20 年（2008 年））など幅広い執筆活動を行うほか、学校や公民館等での講演活動により、長年にわたり紀南地方の隠れた歴史や伝承を広く紹介している。

さらに、中辺路町の文化財審議会委員長や町誌編さん委員を務めるなど、郷土の文

第 39 回（平成 20 年）

化財の保護・保全活動にも貢献するほか、学校教育に対しても資史料の提供等を行っており、こうした地方史等の研究及び紹介、文化財保護や学校教育等への貢献などを通して地域文化の発展に寄与している。

（略 歴）

大正 9 年（1920 年）3 月	野中尋常高等小学校卒業
[昭和初期]	地方紙「熊野太陽」勤務
昭和 5 年（1930 年）3 月	和歌山県立蚕業試験場卒業
昭和 5 年（1930 年）6 月	和歌山県立蚕業試験場研究科修了
	和歌山県立蚕業試験場勤務
昭和 13 年（1938 年）	地方紙「大日本民報」発刊
昭和 19 年（1944 年）	和歌山県警察勤務
昭和 44 年（1969 年）12 月	中辺路町文化財審議委員
昭和 45 年（1970 年）12 月	『牟婁風土記』発刊
昭和 56 年（1981 年）10 月	中辺路町誌編さん委員



ま な ご の り あ き

眞砂 典明 氏

生年月日 昭和 6 年 10 月 20 日生

住 所 田辺市龍神村柳瀬

昭和 38 年（1963 年）和歌山県庁を退職後、帰郷して林業家への道を歩み始め、今日まで自己所有の山林経営に邁進してきたが、この間、林業経営の模範となる取組を行うとともに、関係団体等の要職を歴任し、森林・林業振興のための組織力の強化、林業者の社会的・経済的地位の向上等に献身的に努めてきた。

氏は林業経営において、労務管理の近代化に取り組み、従業員の就労の安定と所得の増大を図るため、当時画期的であった日曜・祝祭日の休日制の導入、降雨時の就労対策と除間伐材の利用促進を兼ねた木工部の立上げを行った。これにより、地域の林業者や森林組合へも波及し、現在の社会保障制度の充実に寄与することとなる。労務対策の一環として始めた木工品製作、特に昭和 54 年（1979 年）から毎年手作りしている「干支シリーズ」は、平成 21 年（2009 年）の「丑」で 30 作目を迎え現在も好評を得ている。

昭和 44 年（1969 年）からは龍神村森林組合理事の一員として組合の育成強化に努めながら、関連産業の整備と育成が地域林業の振興と雇用の場の確保につながるものと、木材加工施設の設置による建設用材の生産、市場拡大や流通促進、間伐材の利用開発等に取り組むなど、地域産業の育成に努めた。また、「龍神林業懇話会」の会長に就任するや、地域ぐるみで林業振興に取り組むために林業関係団体の組織化を図り、「龍神林業開発会議」を発足するに至った。昭和 47 年（1972 年）にはその委員長に就任し、地域林業の振興には関係者の連帯感と団結が必要との信念のもと、「苗木づくりから住宅産業まで」を合言葉に取り組むなど、地域林業全体の発展に大きく寄与している。

林業後継者の育成・確保を図るため、昭和 30 年代に「林業研究グループ」が全国各地で結成され、その情報連絡や統一的な活動を推進するために、各都道府県に「林業研究グループ連絡協議会」が、全国的な組織として「全国林業研究グループ連絡協議会」が設立された。氏は昭和 50 年（1975 年）から和歌山県林業研究グループ連絡協議会会長、昭和 61 年（1986 年）から全国林業研究グループ連絡協議会会長を歴任し、全国的な視点に立って林業グループの育成・発展に努める。この間「山林（やま）からのメッセージ運動」を提案し、森林・林業の重要性を正しく理解してもらうための

第 40 回 (平成 21 年)

活動を実践するとともに、女性林業従事者の掘り起こしにも着目、「全国林業研究グループ連絡協議会女性会議」を設立し、その後女性組織の活動が大きく飛躍するなど、女性の社会参加にも寄与する。県内においても林業技術、林業経営の研究改善に努めるとともに、次代を担う子供達に森林・林業の重要性を理解、認識してもらうため、「森林・林業教室」で自らも教壇に立つほか、所有山林の一部を「学遊林」として児童への教育と遊びの場に開放するなど、地域においても様々な取組を行っている。

龍神地域の歴史は林業の歴史といえるものであるが、常に地域をリードしながら、関係者と力を合わせ林業振興に取り組んできた氏のたゆまぬ努力は、地域住民からも高く評価されているところであり、地域の発展、活性化に大きく貢献している。

(略 歴)

昭和 30 年 (1955 年) 3 月	日本大学農獣医学部林学科卒業
昭和 31 年 (1956 年) 5 月	和歌山県庁入庁
昭和 38 年 (1963 年) 3 月	林業に従事
昭和 44 年 (1969 年) 6 月	和歌山県龍神村森林組合理事 和歌山県龍神林業懇話会会長
昭和 47 年 (1972 年) 7 月	和歌山県龍神林業開発会議委員長
昭和 49 年 (1974 年) 12 月	和歌山県国土利用計画地方審議会委員
昭和 50 年 (1975 年) 7 月	和歌山県林業研究グループ連絡協議会会長
昭和 51 年 (1976 年) 2 月	和歌山県森林審議会委員
昭和 61 年 (1986 年) 4 月	全国林業研究グループ連絡協議会会長
平成 10 年 (1998 年) 4 月	全国林業研究グループ連絡協議会顧問
平成 11 年 (1999 年) 8 月	和歌山県林業研究グループ連絡協議会顧問

(その他)

昭和 55 年 (1980 年) 6 月	『地域林業振興の一翼を担って』(清文社)を発刊
平成 8 年 (1996 年) 3 月	龍神村選挙管理委員会委員長

(受賞歴)

昭和 48 年 (1973 年)	和歌山県知事表彰 (農業研究賞)
昭和 52 年 (1977 年)	和歌山県知事感謝状 (緑化功労)
昭和 53 年 (1978 年)	ノースロップ賞
昭和 60 年 (1985 年)	朝日森林文化賞奨励賞
平成 4 年 (1992 年)	和歌山県知事表彰 (県政功労)
平成 11 年 (1999 年)	農林水産大臣感謝状 (林業普及事業功労者)
平成 13 年 (2001 年)	農林水産祭林産部門天皇杯
平成 16 年 (2004 年)	旭日双光章 (林業振興功労)



うしお たかお
潮 隆 雄 氏

生年月日 昭和 14 年 1 月 3 日生

住 所 滋賀県大津市

昭和 14 年（1939 年）1 月 3 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市）に生まれる。

田辺高等学校卒業後、昭和 32 年（1957 年）に京都市立美術大学工芸科に入学、稲垣稔次郎氏、小合友之助氏に師事する。昭和 36 年（1961 年）に同大学を卒業後、綴織技法に出逢い、タピスリー作家としての道を歩み始める。また、京都精華短期大学、京都精華大学や広島市立大学などで助教授や教授等を務める。

昭和 36 年（1961 年）に第 4 回日展に初入選、翌 37 年（1962 年）には第 1 回日本現代工芸美術展に入選する。以後、独自の技法をこらし、日本においては歴史の浅いこの分野で高い評価を得、現在まで創作活動を続けている。

日展特選をはじめ、日展会員賞、現代工芸会長賞など数々の受賞を重ね、平成 22 年（2010 年）の日本現代工芸美術展では文部科学大臣賞を受賞するなど、日本では数少ないタピスリーによる造形表現の第一人者である。高度な技術と熟練を要する本綴帯の制作からタピスリー制作や綴帳制作まで取り組み、制作の初期から確かな織の技法を駆使し、抽象的な形態に心象を託す独特の表現を築いてきた。昭和 46 年（1971 年）に皇后陛下渡欧に際して綴帯の制作を担当する。また、国内はもとより海外でも数々の展覧会へ出展するとともに、大都市圏などで個展も多数開催している。

近年は、タピスリー制作の中に、綴織をベースにしつつ、同一面に駆使することが非常に困難な巻織・輪奈織などを併用して、現代においても機械化の出来ない手仕事ならではの独自の染織美の追求に努めている。

田辺市においても、昭和 59 年（1984 年）に紀南文化会館小ホールの綴帳制作を担当し、同年に開催された紀南文化会館開館記念展「四人展」に出品する。また、平成 5 年（1993 年）から翌 6 年（1994 年）には、田辺市立美術館設立準備委員会委員を務める。平成 10 年（1998 年）には、田辺市立美術館において企画展「Tapestry 潮隆雄展」が開催され、平成 22 年（2010 年）にも、同館において近年 20 年間の制作活動を紹介する企画展「潮隆雄展 タピスリー近作展」が開催されている。

これまで、日展審査員、日本現代工芸美術展審査員や現代工芸美術家協会理事・同近畿会会長等を歴任するとともに、平成 22 年（2010 年）現在も広島市立大学名誉教授、日展評議員や現代工芸美術家協会参事等の要職にあって、染織業界の指導や後進の指導にも力を尽くすなど、日本を代表する染織家の一人として幅広く活躍するとともに、文化の発展に大きく寄与している。

第 41 回 (平成 22 年)

(略 歴)

昭和 36 年 (1961 年) 3 月	京都市立美術大学卒業
昭和 38 年 (1963 年) 3 月	京都市立美術大学専攻科修了
昭和 39 年 (1964 年)	現代工芸海外選抜展北米巡回展出品 (以後海外選抜展出品 9 回)
昭和 45 年 (1970 年) 4 月	京都精華短期大学美術科助教授
昭和 49 年 (1974 年) 4 月	東京芸術大学工芸科非常勤講師
昭和 53 年 (1978 年)	日本現代工芸美術展審査員 (以後審査員 8 回)
昭和 54 年 (1979 年) 4 月	京都精華大学美術学部助教授、同教授
昭和 54 年 (1979 年)	個展 (東京・ミキモトホール)
昭和 57 年 (1982 年)	個展 (京都高島屋 以後京都・大阪・岡山・米子で計 9 回)
昭和 58 年 (1983 年)	作品集『タピストリー 潮 隆雄』出版
昭和 61 年 (1986 年)	ハイデルベルク大学開学 600 年記念展及びドイツ巡回展に出品
平成 3 年 (1991 年)	作品集『織の彩』出版 社団法人現代工芸美術家協会理事、同近畿会会長
平成 4 年 (1992 年)	公益法人 財団法人秀明文化財団評議員
平成 7 年 (1995 年) 4 月	広島市立大学芸術学部教授
平成 7 年 (1995 年)	日展審査員 (以後 2 回 H13、H19)
平成 8 年 (1996 年)	日展会員
平成 9 年 (1997 年)	韓日現代工芸地平展 (韓国)
平成 10 年 (1998 年) 4 月	広島市立大学大学院芸術学研究科教授
平成 12 年 (2000 年)	日本現代染織ドイツ展 (メェンヘングラッドバッハ市美術館)
平成 16 年 (2004 年)	「前進する工芸展」(全国芸術系大学工芸教員 55 名による展覧会) 企画立案・実行委員長 (広島市)
平成 17 年 (2005 年) 4 月	成安造形大学非常勤講師
平成 17 年 (2005 年) 4 月	広島市立大学名誉教授
平成 20 年 (2008 年) 5 月	日展評議員
その他	日本現代工芸美術家協会参事 財団法人手織技術振興財団理事

(受賞歴)

昭和 36 年 (1961 年)	第 4 回日展初入選 (以後入選 24 回)
昭和 37 年 (1962 年)	第 1 回日本現代工芸美術展に初入選 (以後第 10 回を除き毎回入選)
昭和 48 年 (1973 年)	第 12 回日本現代工芸美術展 現代工芸賞・読売新聞社賞
昭和 51 年 (1976 年)	改組第 8 回日展 特選
昭和 52 年 (1977 年)	第 3 回日本の現代工芸展 優秀賞・ニッポン放送賞
昭和 55 年 (1980 年)	第 19 回日本現代工芸美術展 現代工芸会長賞
平成 2 年 (1990 年)	滋賀県文化奨励賞
平成 4 年 (1992 年)	第 24 回日展 特選
平成 5 年 (1993 年)	秀明文化賞 (財団法人 秀明文化財団)
平成 15 年 (2003 年)	第 35 回日展 会員賞
平成 18 年 (2006 年)	滋賀県大津市文化賞
平成 19 年 (2007 年)	和歌山県文化賞
平成 22 年 (2010 年)	第 49 回日本現代工芸美術展 文部科学大臣賞



さかもと

坂本 フジエ 氏

生年月日 大正 13 年 1 月 13 日生

住 所 田辺市朝日ヶ丘

大正 13 年（1924 年）1 月 13 日、日高郡清川村（現みなべ町清川）に生まれる。小学校卒業後、14 歳で故郷を離れ、大阪府内の歯科医師宅で働く。その間に、看護婦教育所、助産婦教育所へ通い、昭和 18 年（1943 年）に看護婦免許、同 19 年（1944 年）に助産婦免許をそれぞれ取得する。

昭和 20 年（1945 年）に帰郷し、郷里近くの西牟婁郡上芳養村（現田辺市上芳養）において病院で働く傍ら、出張助産師として、依頼を受け、妊婦の家に出向き赤ん坊を取り上げるようになる。昭和 22 年（1947 年）には、自宅で「坂本助産所」を開く。当時、家庭分娩が一般的であったが、助産師の仕事は確たる保証のない仕事であり、不安定な収入であったものの、そうした中であって、助産師、農家の仕事、二児の母の三役をこなし、そして助産師としての誇りや奉仕の精神でもって村中を駆け回る。

その後、病院での出産が一般的になってくると、氏の助産所での出産を希望する人も出てくるようになったことから、昭和 51 年（1976 年）、自宅を改修し入院施設を開設、後進の指導も始める。

時代が移り変わり、核家族化や少子化が進むと、出産や育児をめぐる女性たちの不安や悩みが、社会問題として取り沙汰されるようになる中、氏は、助産師とは地域のお母さん方に寄り添うアドバイザーであるとの思いで、優しく、そして温かく母子に接している。近年、医療の介入しない自然分娩や、自宅での分娩を希望する声が増えており、そうした中、氏の助産所では、出産だけでなく、育児相談や思春期相談など、様々な相談等にも対応しており、多くの方が絶え間なく来所するとともに、氏を慕って、たくさんの若い助産師や助産師の卵たちも学びの場として訪れている。

また、市内の高等学校や中学校等において、性教育、命の誕生についての授業を行うなど、将来を担う若い人たちに命の大切さを真摯に伝え続けている。さらに、市内外において、出産や子育てなどに関する講演会等の講師として活躍するとともに、市が実施するパパママ教室の講師のほか、妊産婦訪問事業やこんにちは赤ちゃん事業、産後ケア事業など、長年にわたり教育や保健分野などにおいて幅広く活動している。

一方、日本助産師会和歌山県支部長等の要職を歴任し、優れた指導力を発揮すると

第 42 回 (平成 23 年)

ともに、関係機関との連携、調整に尽力するなど、会員はもとより保健医療関係者をはじめ多くの方々からの信望も厚い。

こうして、氏は、平成 23 年 (2011 年) まで 66 年間の助産師生活で 4,000 人近い出産にかかわり、新しい命の誕生、幼い命の成長に寄り添い続けるとともに、87 歳になった現在も、出産だけでなく、子育て相談や中高生への性教育など、地域における様々な相談役として活躍している。

(略 歴)

昭和 18 年 (1943 年)	私立緒方看護婦教育所卒業 (看護婦免許取得)
昭和 19 年 (1944 年)	私立緒方助産婦教育所卒業 (助産婦免許取得)
昭和 20 年 (1945 年)	大阪市立保健婦学校卒業 (保健婦免許取得)
昭和 21 年 (1946 年)	上芳養村国保組合就職
昭和 22 年 (1947 年)	「坂本助産所」開業 (出張助産師)
昭和 47 年 (1972 年)	榎本産婦人科就職
昭和 51 年 (1976 年)	「坂本助産所」に入院分娩施設を開設
昭和 56 年 (1981 年)	田辺西牟婁助産婦会会長
平成 7 年 (1995 年)	一般社団法人 日本助産師会理事・和歌山県支部長
平成 9 年 (1997 年)	「坂本助産所」を田辺市朝日ヶ丘へ移転
平成 23 年 (2011 年)	『大丈夫やで～ばあちゃん助産師のお産と育児のはなし～』出版

(受賞歴)

平成 9 年 (1997 年)	厚生大臣表彰
平成 11 年 (1999 年)	黄綬褒章

※平成 13 年に「保健婦助産婦看護婦法」が「保健師助産師看護師法」に名称改正されたが、一部当時の名称を使用しています。



か み や さとし
神 谷 慧 氏

生年月日 昭和 8 年 10 月 27 日生

住 所 田辺市今福町

昭和 8 年 (1933 年) 10 月 27 日、西牟婁郡田辺町 (現田辺市今福町) に生まれる。地元小、中、高校を卒業後、龍谷大学文学部に進学。卒業後、和歌山県教員に採用され、田辺市内中学校教諭を歴任。

教員在職中は、音楽教育を通じて青少年の健全育成に尽力されるとともに、大学時代に指揮者として活躍したグリークラブでの経験を活かされ、赴任校のクラブ活動で合唱部を担当。高い音楽性と表現力豊かなコーラスへと指導し、合唱コンクールにおいては、県大会、近畿大会、全国大会での好成績に導かれたことは、広く一般に知られている。

また、氏の指導したクラブの卒業生が、少年少女期にクラブ活動を通じて合唱や音楽のすばらしさ・楽しさを学び、高校、大学、社会人でも合唱を続ける者、また、生涯にわたって合唱を愛好する者も多く、まさに「合唱のまち田辺」の礎を築いた功績は大きいと言える。

氏と原盾二郎氏 [第 17 回 (昭和 61 年) 田辺市文化賞受賞] は、田辺の合唱界の両翼を担ってきたと評されることも多い。

教員退職後も、現役の合唱指導の教諭に教えを請われる一方、地元の合唱団の指導にも力を注ぎ、また、住職を務めた勝徳寺では西洋音楽を取り入れた音楽法要などを通して市民生活に音楽の潤いを与えようと、地域社会においても音楽を通じた市民文化の向上に取り組まれている。

(学 歴)

昭和 21 年 (1946 年) 3 月	田辺第一小学校卒業
昭和 21 年 (1946 年) 4 月	和歌山県立田辺中学校入学
昭和 24 年 (1949 年) 3 月	田辺中部中学校卒業 (学制改革により移校)
昭和 27 年 (1952 年) 3 月	和歌山県立田辺高等学校卒業
昭和 31 年 (1956 年) 3 月	龍谷大学文学部卒業

(職 歴)

昭和 31 年 (1956 年) 4 月	田辺市立東陽中学校教諭
昭和 46 年 (1971 年) 4 月	田辺市立高雄中学校教諭
昭和 53 年 (1978 年) 4 月	田辺市立明洋中学校教諭
昭和 58 年 (1983 年) 3 月	退職

第 43 回 (平成 24 年)

(受賞歴)

昭和 46 年 (1971 年) 2 月 和歌山県教育委員会「教育賞」

(合唱指導の功績等) ※NHK = 「NHK 全国学校音楽コンクール合唱の部」を省略

※MBS = 「MBS 子ども音楽コンクール」を省略

[東陽中学校]

昭和 34 年 (1959 年) 10 月	NHK 県大会	第 1 位
昭和 35 年 (1960 年) 10 月	NHK 県大会	第 2 位
昭和 36 年 (1961 年) 10 月	NHK 近畿大会	第 2 位
昭和 37 年 (1962 年) 9 月	MBS 県大会	第 1 位
12 月	MBS 西日本大会	優秀賞
昭和 40 年 (1965 年) 12 月	MBS 西日本大会	第 1 位
昭和 41 年 (1966 年) 3 月	MBS 全国決勝大会	第 1 位
12 月	MBS 近畿大会	優秀賞
昭和 42 年 (1967 年) 7 月	NHK 県大会	第 1 位
12 月	MBS 西日本大会	第 1 位
昭和 43 年 (1968 年) 3 月	MBS 全国決勝大会	第 1 位
9 月	MBS 県大会	第 1 位
9 月	NHK 県大会	第 1 位
10 月	NHK 近畿大会	第 1 位
11 月	NHK 全国決勝大会	第 3 位
昭和 44 年 (1969 年) 3 月	MBS 全国決勝大会	第 1 位
12 月	MBS 西日本大会	優秀賞
昭和 45 年 (1970 年) 9 月	NHK 県大会	第 1 位
12 月	MBS 西日本大会	優秀賞

[高雄中学校]

昭和 46 年 (1971 年) 12 月	MBS 西日本大会	第 1 位
	MBS 全国決勝大会	出場
昭和 47 年 (1972 年) 9 月	NHK 県大会	第 1 位
12 月	MBS 西日本大会	優秀賞
昭和 48 年 (1973 年) 9 月	NHK 県大会	第 1 位
昭和 49 年 (1974 年) 9 月	NHK 県大会	第 1 位
昭和 50 年 (1975 年) 9 月	NHK 県大会	第 1 位
昭和 51 年 (1976 年) 9 月	NHK 県大会	第 1 位
12 月	MBS 西日本大会	第 1 位
昭和 52 年 (1977 年) 3 月	MBS 全国決勝大会	第 2 位
9 月	NHK 県大会	第 1 位
10 月	NHK 近畿大会	優秀賞
12 月	MBS 西日本大会(重唱)	優秀賞
	MBS 西日本大会	優秀賞

[明洋中学校]

昭和 54 年 (1979 年) 9 月	NHK 県大会	優秀賞
昭和 55 年 (1980 年) 9 月	NHK 県大会	優良賞

[その他] (フラウエンコーラル田辺)

平成 12 年 (2000 年) 8 月	第 23 回全日本おかあさんコーラス全国大会	大会賞
平成 17 年 (2005 年) 3 月	宗音文化研究会第 1 回仏教賛歌コンクール	金賞



た ま い す み お
玉井 済夫 氏

生年月日 昭和 13 年 11 月 12 日生

住 所 田辺市高雄一丁目

昭和 13 年 (1938 年) 11 月 12 日、和歌山県新宮市に生まれる。

昭和 39 年 (1964 年) 3 月に東京教育大学理学部大学院修士課程修了後、高等学校の教諭を歴任し、平成 10 年 (1998 年) 3 月に和歌山県立熊野高等学校長を最後に退職する。この間、34 年の長きにわたり学校教育の充実・向上に力を尽くした。

また、教職の傍ら長年にわたり生物の調査・研究に取り組むとともに、紀伊半島における希少生物の保護にも尽力する。平成 25 年 (2013 年) 現在、日本爬虫両棲類学会の会員であり、県内の爬虫類・両生類の調査・研究・保護を進めてきた。

昭和 51 年 (1976 年) 4 月からは田辺市文化財審議会委員として、生物学を中心に自然科学分野の文化財の調査・研究に携わり、特に国指定天然記念物の「神島」における生物調査に力を傾けるなど、田辺市の文化財行政にも大きく貢献している。

また、自然保護活動にも力を尽くし、天神崎の自然保全運動に際しては、「天神崎の自然を大切にする会」が設立された昭和 49 年 (1974 年) 当時から参加し、生物に関する理論の中心的存在として活動し、昭和 57 年 (1982 年) に北海道斜里町で開催された「知床国立公園内 100 平方メートル運動 5 周年記念シンポジウムー日本におけるナショナル・トラスト運動を考えるー」に出席して事例報告 (天神崎保全運動の現状・課題・今後の抱負など) を行った。これを契機にナショナル・トラストの全国組織が結成され、翌昭和 58 年 (1983 年) に田辺市で開催した「ナショナル・トラストを進める全国の会・第 1 回全国大会」の諸準備・運営の中心的な役割を担当した。この大会はまた、「天神崎保全運動 30 周年記念・第 22 回ナショナル・トラスト全国大会」として平成 16 年 (2004 年) にも田辺市で開催され、その時は「子ども環境部会」を設けて子どもたちも参加する意義深い大会とした。

昭和 61 年 (1986 年)、同会が財団法人となつてからは理事として、平成 14 年 (2002 年) からは専務理事として会の運営や事業等を進め、平成 22 年 (2010 年) に公益財団法人 (新法人制度) への移行とともに業務執行理事として、土地の取得や環境整備をはじめ、近年特に多くなった学校や諸団体の天神崎での自然 (環境) 学習への対応を行い、自然案内や自然解説などを続けている。また、平成 23 年 (2011 年) 度からは、公益社団法人 日本ナショナル・トラスト協会の専務理事として重責を果たしている。

故外山八郎氏 [第 26 回 (平成 7 年) 田辺市文化賞受賞]、故後藤伸氏 [第 29 回 (平成 10 年) 田辺市文化賞受賞] らとともに、天神崎の保全と自然保護活動を支え、さらに

第 44 回 (平成 25 年)

継続させて実績をあげた功績は大きく、日本におけるナショナル・トラスト運動の先駆けとなって全国に新しい形での自然保護運動を根付かせた。多種多様な生物が生息する天神崎の海岸林と磯の自然環境が、まさに「海の熊野」と呼ぶに相応しい自然環境として今日まで保たれてきたのは、氏をはじめとする幾多の紀南の人びとの筆舌し難い努力の賜である。

平成 7 年 (1995 年) 度からは、ひき岩群国民休養地運営委員会委員として国民休養地内の保護・管理及び運営に努めるとともに、平成 11 年 (1999 年) 度からは「ふるさと自然公園センター」の自然観察教室の講師を務めている。

平成 18 年 (2006 年) 度には「和歌山大学紀南サテライト (大学院)」における「地域環境研究」の担当講師として、さらに和歌山県が派遣事業としている「環境学習アドバイザー」のほか、自然環境や自然保護にかかる講演会やセミナーの講師などに幅広く活躍している。

このほか、南紀生物同好会 (昭和 56 年度 (1981 年度) 和歌山県文化奨励賞受賞)、和歌山県自然環境研究会 (平成 14 年 (2002 年) 度和歌山県わかやま環境大賞特別賞受賞)、熊野の森ネットワーク いちいがしの会 (平成 18 年 (2006 年) 度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰受賞)、紀伊半島ウミガメ情報交換会 (平成 20 年 (2008 年) 度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰受賞) など、多くの自然 (生物) 関係の団体においても精力的に活動している。

(学 歴)

昭和 26 年 (1951 年) 3 月	田辺市立田辺第一小学校卒業
昭和 29 年 (1954 年) 3 月	田辺市立東陽中学校卒業
昭和 32 年 (1957 年) 3 月	和歌山県立田辺高等学校卒業
昭和 37 年 (1962 年) 3 月	東京教育大学理学部生物学科 (動物学専攻) 卒業
昭和 39 年 (1964 年) 3 月	東京教育大学理学部大学院修士課程 (動物学専攻) 修了 (理学修士)

(職 歴)

昭和 39 年 (1964 年) 4 月	大阪府立阪南高等学校教諭
昭和 44 年 (1969 年) 4 月	和歌山県教育委員会保健体育課主事
昭和 47 年 (1972 年) 4 月	和歌山県立田辺高等学校教諭
昭和 59 年 (1984 年) 4 月	和歌山県立熊野高等学校教諭
平成 2 年 (1990 年) 4 月	和歌山県立熊野高等学校教頭
平成 5 年 (1993 年) 4 月	和歌山県立熊野高等学校校長
平成 10 年 (1998 年) 3 月	和歌山県立熊野高等学校退職

(その他の職歴等)

昭和 61 年 (1986 年) 4 月	財団法人 天神崎の自然を大切にする会理事
平成 14 年 (2002 年) 4 月	財団法人 天神崎の自然を大切にする会専務理事
平成 22 年 (2010 年) 3 月	公益財団法人 天神崎の自然を大切にする会理事 (業務執行理事)
平成 11 年 (1999 年) 4 月	国立和歌山工業高等専門学校 非常勤講師
平成 12 年 (2000 年) 4 月	AWS 動物学院 (白浜町・アドベンチャーワールド内) 非常勤講師

第 44 回 (平成 25 年)

平成 14 年 (2002 年) 4 月 公立病院組合 紀南看護学校非常勤講師
平成 15 年 (2003 年) 4 月 田辺市環境課(ふるさと自然公園センター)嘱託員
(自然観察指導員)

(その他役職、活動等)

- ・南紀生物同好会会長
- ・和歌山県自然環境研究会会長
- ・和歌山県自然保護調査会会長
- ・熊野の森ネットワーク いちいがしの会顧問
- ・NPO法人 わかやま環境ネットワーク副代表理事
- ・公益社団法人 日本ナショナル・トラスト協会専務理事
- ・公益財団法人 日本生態系協会評議員
- ・日本爬虫両棲類学会会員
- ・紀伊半島ウミガメ情報交換会会員
- ・南方熊楠顕彰会理事
- ・田辺市文化財審議会委員
- ・田辺市景観保全審議会委員
- ・ひき岩群国民休養地運営委員会委員
- ・和歌山県環境学習アドバイザー
- ・和歌山県環境審議会自然環境部会委員 (ほか県関係の各種委員会の委員)
- ・希少野生動植物種保存推進員 (環境大臣)

(受賞歴)

昭和 62 年 (1987 年) 和歌山県教育研究奨励賞 (和歌山県教育委員会)
(本県の両生類・爬虫類に関する調査研究による)

平成 2 年 (1990 年) 水環境賞 (環境省水質保全局長)
(水質の保全活動への貢献による)

平成 7 年 (1995 年) 理科教育への尽力により表彰 (日本理化学協会)

平成 11 年 (1999 年) 田辺市社会教育功労者表彰

平成 17 年 (2005 年) 田辺市市政功労者表彰

平成 19 年 (2007 年) 自然公園関係功労者環境大臣表彰
(永年にわたる田辺南部海岸県立自然公園の保護と適正な利用による)

(天神崎の自然を大切にする会の受賞歴等)

昭和 58 年 (1983 年) 第 1 回森林文化賞 (朝日新聞社・財団法人 森林文化協会)

昭和 59 年 (1984 年) 山本有三郷土文化賞 (公益信託 山本有三記念基金)

昭和 62 年 (1987 年) 緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰

平成 6 年 (1994 年) WBS 環境大賞 (和歌山放送)

平成 16 年 (2004 年) 和歌山県知事表彰 (長年の自然保全活動による)

平成 17 年 (2005 年) ふるさとづくり賞 (財団法人 あしたの日本を創る協会)

平成 20 年 (2008 年) 北九州市環境賞 (北九州市)

第 44 回 (平成 25 年)

※平成 23 年 (2011 年) 「天神崎の自然維持と環境教育の推進」が第 3 回プロジェクト
未来遺産に登録 (公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟)

(著書・報告書)

- ・くまの文庫『大塔山系の自然』(共著、熊野中辺路刊行会、昭和 48 年)
同『森林と動植物』、『みちばたの虫と草』(上)・(下)、『溪流と動植物』
- ・『平井川のオオサンショウウオ生息状況および生息環境についての調査』
(和歌山県自然環境保全地域候補地調査報告書 平井川、共著、和歌山県、昭和 51 年)
- ・『コモド島の自然とコモドオオトカゲを訪ねて』
(和歌山県高等学校理科研究会会誌第 15 号、和歌山県高等学校理科研究会、昭和 54 年)
- ・『第 2 回自然環境保全基礎調査・動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) ー和歌山県ー』
(環境庁委託調査、日本自然保護協会、昭和 54 年)
- ・『天神崎自然観察地域設置調査報告書』(共著、日本自然保護協会、昭和 54 年)
- ・『昭和 54・55 年度 特別天然記念物ニホンカモシカに関する緊急調査報告書』
(共著、和歌山県教育委員会、昭和 56 年)
- ・『友ヶ島の両生類とは虫類』(友ヶ島学術調査、和歌山市、昭和 58 年)
- ・『和歌山県の両生類』(熊高紀要 10 号、和歌山県立熊野高等学校、昭和 60 年)
- ・『天神崎の自然』(共著、牽牛書舎、昭和 61 年)
- ・『自然・子供・教育』(熊高紀要 17 号、和歌山県立熊野高等学校、平成 5 年)
- ・『ウミガメは減っているか ～その保護と未来～』(共著、紀伊半島ウミガメ情報交換
会・日本ウミガメ協議会共編、平成 6 年)
- ・『田辺市の自然観察ガイドブック』(共著、田辺市、平成 11 年)
- ・『和歌山県の両生類・爬虫類 ～現状と課題～』
(和歌山県高等学校理科研究会会誌第 35 号、和歌山県高等学校理科研究会、平成 11 年)
- ・『保全上重要なわかやまの自然 ー和歌山県レッドデータブックー』
(共著、和歌山県、平成 13 年)
- ・『大杉谷・黒蔵谷の両生類・爬虫類』(大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然
環境調査報告集、和歌山県自然環境研究会、平成 14 年)
- ・『生物から見た川の自然Ⅲ ー芳養川・稲成川・会津川および市内南部の小河川ー
(和歌山県田辺市)』(共著、田辺市、平成 16 年)
- ・『熊楠の森 ー神島』(共著、農山漁村文化協会、平成 23 年)
- ・『保全上重要なわかやまの自然 ー和歌山県レッドデータブックー (2012 年改訂版)』
(共著、和歌山県、平成 24 年) ほか



う し お たけし
(故) 牛 尾 武 氏

(本 名 牛 尾 武 司)

生年月日 昭和 30 年 3 月 3 日生

住 所 田辺市稲成町

昭和 30 年 (1955 年) 3 月 3 日、神戸市で生まれる。

昭和 51 年 (1976 年) に神戸芸術学林日本画科を卒業し、神戸市在住の日本画家・昇 外義に師事、昭和 54 年 (1979 年) 兵庫県日本画連盟会員となる。昭和 59 年 (1984 年)、第 2 回上野の森美術館絵画大賞展に出品、翌昭和 60 年 (1985 年) の第 3 回同展において特別優秀賞を受賞する。続いて昭和 61 年 (1986 年) には東京セントラル美術館日本画大賞展、翌昭和 62 年 (1987 年) には日本画精鋭選抜展にそれぞれ作品を出品するなど精力的に制作活動に取り組む。

平成元年 (1989 年) には茨城県石岡市の華園寺本堂の障壁画を制作、平成 2 年 (1990 年) に銀座資生堂ギャラリーにおいて初めての個展を開催する。そして、平成 3 年 (1991 年) には第 11 回山種美術館賞展において優秀賞を受賞する。

一方、自分の描く自然をもっと身近に感じて、いつもその中で暮らし、絵を描きたいとの思いから、同年、制作の拠点を東京から田辺市に移し、「熊野」をテーマに紀伊半島の自然美や風景を描くなどの活動に取り組むとともに、成川美術館 (箱根・芦ノ湖) をはじめ、東京、大阪などでも度々個展を開催するなど精力的な活動を続け、平成 11 年 (1999 年) には高山寺 (田辺市) の薬師堂に初夏の護摩山を描いた障壁画を制作する。

平成 16 年 (2004 年) から、真言宗の開祖「空海」をテーマに、高野山や四国、京都、奈良、更には中国に至る「空海」ゆかりの地を訪ね歩き、空海が目にした風景に思いを馳せながら作品を描くなどの活動を続ける一方で、世界遺産熊野本宮館並びに南方熊楠顕彰館で開催された「残響の熊野」展では、人々の記憶の中にある田辺と熊野に光を当て、田辺の街並みや熊野古道の現在の風景を精緻な筆遣いで表現した。

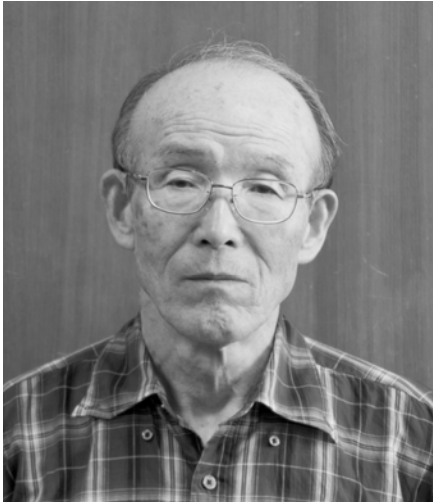
創作活動に一意専心、数々の優れた作品を当地で描き中央へ発表し続けるなど、田辺市はもとより当地方の芸術・文化の振興に大きく貢献した。

(略 歴)

昭和 51 年 (1976 年) 神戸芸術学林日本画科卒業

第44回（平成25年）

昭和54年（1979年）	兵庫県日本画家連盟展・最優秀賞受賞 同年上京する
昭和60年（1985年）	第3回上野の森美術館絵画大賞展で「澄秋」が特別優秀賞を受賞
昭和61年（1986年）	上野の森美術館絵画大賞展入賞作家展（東京・パリ）に「零春」を出品
平成元年（1989年）	華園寺（茨城県石岡市）の本堂障壁画を制作
平成2年（1990年）	銀座資生堂ギャラリーにて個展開催
平成3年（1991年）	第11回山種美術館賞展－今日の日本画－にて「晨響（銀河と流星の滝）」が優秀賞受賞 同年田辺市に移住
平成5年（1993年）	第12回山種美術館賞展に「濤聲」を招待出品
平成7年（1995年）	成川美術館にて個展開催
平成8年（1996年）	三越日本橋本店、同大阪店にて個展開催
平成11年（1999年）	成川美術館にて個展開催（2回目） 高山寺（田辺市）の薬師堂障壁画を制作
平成12年（2000年）	三越日本橋本店、大丸神戸店で個展開催
平成16年（2004年）	三越日本橋本店にて個展開催 成川美術館にて「空海と空と海」第一章 四国編を開催
平成19年（2007年）	成川美術館にて「空海と空と海」第二章 九州編を開催
平成21年（2009年）	成川美術館にて「空海と空と海」第三章 中国大陸編を開催
平成22年（2010年）	世界遺産熊野本宮館にて「残響の熊野」を開催
平成23年（2011年）	南方熊楠顕彰館にて「残響の熊野 Part II」を開催
平成25年（2013年）	成川美術館にて「空海と空と海」最終章 京都・奈良編を開催



こいたばし じゅん

小板橋 淳 氏

生年月日 昭和 13 年 4 月 24 日生

住 所 田辺市むつみ

昭和 13 年 (1938 年) 4 月 24 日、和歌山市に生まれる。

就職した銀行では、和歌山地区・大阪地区・事務管理部に在籍し、休日には周辺の山や峠道を歩く。

当時の上司に、常に時代の先を読んで目標を持って行動することを教えられ、自身が退職する頃日本は高齢化社会を迎え、20 年近い余暇を持て余す健康な高齢者であふれる社会になると予測し、折から銀行も完全週休二日制になり、この余暇を何とか世間の人たちの役に立てるように使いたいと、休眠状態の「田辺アルコウ会」を復活させる。

また、歩く楽しさを知ってもらうために、11 年余りにわたり、「紀伊民報」紙上に山歩きのコース紹介を連載する。

熊野地方には、信仰や雨乞いの対象としてあがめられた滝が多いものの、近年過疎化による山間集落の消滅などにより、奥地に通じる古い道が消えるなど、滝の存在が忘れ去られようとしている中、氏が山歩きの中で見てきた滝を記録にとどめることによって、貴重な自然を少しでも知ってもらおうと、平成 13 年 (2001 年) に『紀州の滝 340』を発刊する。

さらに、紀州にある峠のうち 158 箇所を再度調査した上で、熊野古道などを中心に、一般の方々でも安心して歩ける峠道 50 を選定して、峠の魅力を紹介かたがた、峠歩きのガイドブックとして『紀州・熊野の峠道』を平成 22 年 (2010 年) に発刊する。

古道の一つに、熊野の東西を最短で結ぶ古座街道がある。古座街道といえは、近年では司馬遼太郎が『街道をゆく』で著された道、すさみから佐本へ抜ける大辺路のう回路を思い浮かべる人が多いが、江戸期の本来の古座街道 (熊野中道) は昭和 30 年 (1955 年) 頃から歩かれなくなり、人々の記憶からも消えていった道である。

熊野中道古座街道 (上富田町朝来～古座川口の約 70 km) を復興させようとする氏の姿を目の当たりにして、周辺地域の人たちの気運も高まり、あしかけ 5 年にわたる復元整備が進展した。また、平成 26 年 (2014 年) 3 月『熊野中道古座街道』(増補改訂版) を発刊。同年秋から大阪にある大手旅行会社にも、「熊野中道古座街道」を街道ウォークとして取り上げられている。

氏は平成 26 年 (2014 年) 現在も、紀伊半島の古道を巡り、和歌山県観光ガイド専門員「紀州語り部」として、歴史・文化をテーマに山や熊野古道を案内するとともに、

第 45 回 (平成 26 年)

古道を守り後世に伝えるために歩き続けている。

(略 歴)

昭和 32 年 (1957 年) 3 月	和歌山県立田辺高等学校卒業
昭和 32 年 (1957 年) 4 月	紀陽銀行に入行
昭和 34 年 (1959 年)	「田辺アルコウ会」に参加
昭和 38 年 (1963 年) 10 月	山口国体山岳競技に選手として出場
昭和 46 年 (1971 年) 10 月	和歌山国体山岳競技に設営隊長として参加
平成 元 年 (1989 年) 2 月	紀伊民報に『紀の国万歩』『紀州の滝』『紀州の峠』『紀州折々』と題して 129 回連載
平成 4 年 (1992 年) 2 月	休眠状態の「田辺アルコウ会」を復活させる
平成 4 年 (1992 年) 10 月	全日本登山体育大会・中辺路コースを主管
平成 9 年 (1997 年) 3 月	紀陽銀行を退職
平成 9 年 (1997 年) 4 月	和歌山県観光ガイド専門員 紀州語り部に就任
平成 13 年 (2001 年) 9 月	『紀州の滝 340』を発刊
平成 19 年 (2007 年) 4 月	市民登山大会 (於：竜神山・三星山) を田辺観光協会と共催し、副会長としてコース設定・語り部を務める
平成 22 年 (2010 年) 1 月	『紀州・熊野の峠道』を発刊
平成 26 年 (2014 年) 3 月	『熊野中道古座街道・四つの峠道と石仏を巡る』(増補改訂版) を発刊

(その他主な著書等)

- 『紀州の山々』(共著・創元社)
- 『大峰・台高・紀伊の山』(共著・山と溪谷社)(紀伊の山を執筆)
- 山岳雑誌「山と溪谷」への執筆(平成元年 2 月～平成 18 年 7 月 合計 56 回)
- 『大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告書』に大杉谷・黒蔵谷の滝と地形を執筆(平成 14 年 3 月発行)

(その他の職歴・活動等)

- ・商業近代化田辺地域部会(中小企業庁委託事業)に事務局員として参加し、13 種目の調査を銀行のコンピューターで集計後、分析を行う(昭和 53 年 4 月～昭和 54 年 3 月)
- ・大塔村森林林相づくり構想策定委員会に参画(平成 8 年 5 月～平成 9 年 3 月)
- ・伊能ウォーク田辺・印南間コース設定と案内(平成 11 年 11 月)
- ・大塔山頂保全検討会へ市民代表として参加(平成 19 年 8 月～平成 26 年 11 月)
- ・「田辺アルコウ会」では市民の健康増進のため、会員の例会に留まらず一般からの公募行事を行う
 - ① 近県へバスツアーウォーク(平成 5 年～平成 13 年)
 - ② 信州等への夏山登山ツアー(平成 9 年～平成 14 年)
 - ③ 小辺路ウォーク(平成 16 年 10 月～平成 17 年 3 月)
 - ④ 滝巡りシリーズ(平成 14 年 6 月～平成 17 年 10 月)
 - ⑤ 市民登山大会(田辺観光協会と共催)



ま さ い か ず こ
政 井 和 子 氏

生年月日 昭和 11 年 6 月 21 日生

住 所 田辺市中屋敷町

昭和 59 年 (1984 年)、紀南文化会館開館記念地元参加行事の開催に向けて、地域の伝統芸能関係者がまとまり、「田辺伝統芸能協会」が設立される。代表幹事の一人として名を連ね、同時に事務局長に就任。開館記念行事『たなべ伝統芸能まつり』の出演者は 9 分野・12 流派・18 団体にわたり、会場には立錐の余地がないほどの観客を集め大成功を収めた。

後に設立当時のことを氏は、「プロフェッショナルとアマチュアリズムをどのように融和させるか、伝統芸能と一口に言っても分野・流派によっては千差万別である。この集団が田辺の一つの文化水準を表すものになる」と述懐している。氏はいわば、一国一城の群雄である個性派集団を一つにまとめ上げ、共に進むべき方向性を示すとともに、事業の実施にあたっては、資金集めに奔走しながら、舞台構成を練りタイムテーブルを作成するといった、総合プロデューサー的な役割を担った。

田辺伝統芸能協会は、田辺市文化協会が設立された平成 4 年 (1992 年) に、それぞれが単位団体として加盟するため、発展的解散を遂げたが、氏のその思いは田辺市文化協会に受け継がれ、田辺市文化協会が主催する「文協フェスティバル舞台部門」の構成の一端を担い、毎年多くの観客を魅了し続けている。

さらに、「当地域に芸術水準の高い演劇を提供すること」を目的に、昭和 61 年 (1986 年) に設立された会員組織による演劇鑑賞団体「紀南文化劇場」、その設立発起人で初代事務局長も歴任した。

また、中央の舞台芸術を鑑賞する機会が少ない当地において、素晴らしい芸術環境を当地にもたらし、よりよい演劇を、より安く、より多くの人々と観劇することをモットーに、芝居、演劇、歌舞伎、ミュージカルなどレベルの高い芸術作品を上演することに尽力した。

紀南文化会館での旗揚げ公演「勸進帳」の実現は、氏の永年の歌舞伎界との人脈があったからこそで、歓迎の幟がはためく中、歌舞伎界の名優達による田辺大通りでのパレードは今でも語り草になっている。

このように氏は、田辺市民のみならず、周辺町村の住民も受け入れながら、伝統芸能・文化の普及に長年にわたり地道に取り組んできた。また、馴染みの少ない古典芸

第 46 回 (平成 27 年)

能等を親しみやすく取り入れる機会を数多くつくり、それを次世代に繋げていく重要な役割も果たしている。

田辺市立図書館司書として奉職した時代は図書購入費も少なく、退職後は将来寄贈するための図書の収集を始めた。『日本の伝統芸能』『義太夫年表』『近代歌舞伎年表』『近松全集』『演芸画報明治篇・大正篇復刻版』『歌舞伎台帳集成』『歌舞伎評判記集成』『鶴屋南北全集』『武智鉄二全集』などを寄贈。南方熊楠顕彰館には『近代庶民生活誌』、中部公民館には『日本の文学』『日本の詩歌』『名作挿絵全集』『日本陶磁器全集』等を寄贈した。

これらの図書資料が市内外の多くの人たちの研究に供されることを氏は願っている。

(学 歴)

昭和 30 年 (1955 年) 3 月	和歌山県立田辺高等学校卒業
昭和 34 年 (1959 年) 3 月	法政大学日本文学科卒業

(職 歴)

昭和 34 年 (1959 年) 4 月	株式会社和歌山放送東京支社
昭和 38 年 (1963 年) 10 月	田辺市役所入庁
昭和 51 年 (1976 年) 6 月	田辺市役所退職
平成 3 年 (1991 年) 4 月	有限会社伯扇閣代表

(役職等)

昭和 59 年 (1984 年) 3 月	田辺伝統芸能協会代表幹事・事務局長
昭和 59 年 (1984 年) 6 月	紀南文化会館運営委員
昭和 61 年 (1986 年) 2 月	紀南文化劇場事務局長 (広報担当)
平成 4 年 (1992 年) 10 月	田辺市文化協会副会長
平成 27 年 (2015 年)	田辺市文化協会評議員



ふるくぼ けん
古久保 健 氏

生年月日 昭和 12 年 10 月 6 日生

住 所 田辺市龍神村殿原

昭和 12 年 (1937 年) 10 月 6 日、日高郡龍神村 (現田辺市龍神村殿原) に生まれ、高校卒業までを過ごす。

大学卒業後、郷里に戻り、2 年間村内小学校講師を務め、昭和 38 年 (1963 年) 中学校教諭に採用され、龍神村立下山路中学校を初任校に同村内各中学校の教員を歴任し、平成 3 年 (1991 年) 4 月より 7 年間下山路中学校校長を務めた後、定年退職となる。教員時代より、郷土龍神村の歴史や文化に深く関心を持ち、旧龍神村の行政文書の保存作業や古民家に残る古文書・文化財保護に取り組んでいる。なかでも、近年注目されているのは、昭和 20 年 (1945 年) 5 月 5 日に龍神村殿原山中に墜落した B29 及びその後の住民による慰霊の歴史に関する氏の調査である。

日本の戦闘機に撃墜されて龍神村殿原の山中に落ち、搭乗していた米兵 11 人のうち 7 人が死亡した。生き残った 4 人のうち、2 人は龍神村殿原で、残る 2 人は尾根を隔てた中辺路町内で、それぞれ捕らえられ、いずれも日本軍に処刑された。殿原の住民は、日本軍に捕らえられるまで生存兵 2 名に食べ物を与え世話をしたという人道的な逸話も残り、墜落から約 1 カ月後、戦時中であるにもかかわらず、現場に木製の十字架をつくって慰霊祭を催した。その後も米軍機が墜落した 5 月 5 日に慰霊祭は毎年開かれてきた。慰霊祭による敵兵の死を悼む鎮魂の儀式自体が極めて珍しいと言われている。現在も残っている慰霊碑は、墜落 2 年後の昭和 22 年 (1947 年) につくられたものである。

墜落そのものの記録は、当日の空襲警報の発令と解除の時間や、「敵 B29 上山路村大字殿原上空ニ於テ撃墜サル」と書かれた村の宿直日誌ぐらいのもので、ほとんど残っておらず、氏は時間をかけ慰霊碑建立に関する資料や目撃者の証言を集め、当時の状況や米兵について調査を続け、平成 17 年 (2005 年) に出版された氏の著書『轟音 B29 墜落の記』(紀伊民報社刊) にまとめられた。

さらに、平成 19 年 (2007 年) 頃から、墜落した B29 の搭乗兵の遺族を捜し始め、平成 21 年 (2009 年) に墜落機の搭乗兵 (当時 23 歳少尉) の妹に出会うことができた。平成 25 年 (2013 年) 10 月には「平和への思いを確認したい」と渡米し米兵遺族と対面、平和への思いを確かめ合った。

第 46 回 (平成 27 年)

また、大阪芸術大学の学生達が卒業制作として、ドキュメンタリー映画『轟音（ごうおん）－龍神村物語－』を平成 24 年（2012 年）に発表、この作品は、墜落機を題材にして、氏の平和への思いを中心に編集制作されたもので、さらに氏と米兵遺族との面会にも同行するなど追加取材を重ね再編集され、戦後 70 年の節目の年にあたる平成 27 年（2015 年）3 月龍神村において初上映された。

紀州の山村のさらに奥地である一地域で、地元の人々によって敵味方を越えた戦死者の慰霊が戦後 70 年間、綿々と続けられているというのは、国内はもとより世界的に見ても稀で、また、戦争の不条理や平和の尊さを後世に伝える大切な実践であり、この慰霊祭の継続における氏の果たされた役割は大きいと言える。

近年では、殿原に残る安倍晴明に係る史跡や伝承を掘り起こし、殿原を「晴明の里」として地域おこしにも取り組んでいる。

併せて、旧龍神村時代も含め、文化財審議会委員として、長年文化財保護行政にも尽力されている。

(学 歴)

昭和 28 年（1953 年）3 月	日高郡上山路中学校卒業
昭和 32 年（1957 年）3 月	南部高等学校龍神分校卒業
昭和 36 年（1961 年）3 月	大阪商業大学商経学部経済学科卒業

(職 歴)

昭和 36 年（1961 年）4 月	龍神村立中山路小学校講師
昭和 37 年（1962 年）4 月	龍神村立大熊小学校講師
昭和 38 年（1963 年）4 月	龍神村立下山路中学校教諭
昭和 42 年（1967 年）4 月	龍神村立中山路中学校教諭
昭和 45 年（1970 年）4 月	龍神村立龍神中学校教諭
昭和 48 年（1973 年）4 月	龍神村立上山路中学校教諭
昭和 56 年（1981 年）4 月	龍神村立虎東中学校教諭
昭和 60 年（1985 年）4 月	龍神村立龍神中学校教諭
昭和 61 年（1986 年）4 月	龍神村立龍神中学校教頭
平成 3 年（1991 年）4 月	龍神村立下山路中学校校長
平成 10 年（1998 年）3 月	定年退職

(役職等)

昭和 63 年（1988 年）4 月	龍神村文化財審議会委員
平成 17 年（2005 年）5 月	田辺市文化財審議会委員
平成 20 年（2008 年）4 月	田辺市人権擁護連盟理事 田辺市人権擁護連盟副理事長・龍神支部長
平成 24 年（2012 年）4 月	田辺市人権擁護連盟龍神支部副支部長

(著 書) 『轟音 B29 墜落の記』（紀伊民報社刊 2005. 4）



しば や す お
芝 安 氏

本名 芝 安 男

生年月日 大正 10 年 月 25 日生

住 所 田 市本宮町皆地

大正 10 年 1921 年 月 25 日、東牟婁 四村 現田 市本宮町皆地 に生まれる。
熊 本宮大社にほど い山あいにある本宮町皆地地区では、平安時代末期から熊
詣に使われた笠を編んできたと言われている。笠は上皇から貴族、庶民まで身分に
係なく広く愛用されていたことから、もともとは「貴賤笠 きせんぼ」とも呼ばれて
いたが、いつからか特産品として産地名で呼ばれるようになり、現在は皆地笠で知ら
れている。

先代である、氏の父も祖父も細工師として活躍し 代目を継承。幼少より茶摘み籠
を作っていた父の手伝いを じてその技法を習得。皆地笠のほか、修 者がかぶる「
梨 あじやり 笠」など、奈良や京 の神社仏 で使われている笠も氏が手がけ、
さらに茶 の家元好みの炭斗 すみとり など茶 具も桧細工で作る技と作品が各方
で く評価され、昭和 60 年 1985 年 に 綬褒章を受章。

また、伝統工芸の伝承にあたり、比 的世 に知られず、報いられることも少なく、
苦勞をづねている人々に光を当て 彰する「日本キワニス文化賞」を平成 12 年 2000
年 に受賞。

戦前には ほどの工房があり、材料の切り出しや桧をカンナで削り短冊状にした
「ひよ」作りなど、作業を村全体で分業し、林業や 業 係者からの引き合いもあり、
九州や四国などにも出荷していた。戦後、急 な経済成 により生活文化の様式も変
わり、従事者も減少の一 を り、昭和 30 年代後半には当人 人を残すのみとなった。

平成に入ってから、後継者を育成するために和歌山県などの支援で、何人かの弟子
を取り、伝承を試みてきたが、原材料の調 や製材、製作や販売など全般にわたるた
め、技法の伝承に至らなかった。

このような苦境の中にあっても、平安時代から続く伝統と技法を 年にわたりただ
一人守り続けてきた功績は誠に偉大であり、90 歳を越えてもなお現役で活躍されてい
る。

第 47 回 (平成 28 年)

略 歴

昭和 年 1933 年 四村尋常 等小学校皆地分校卒業

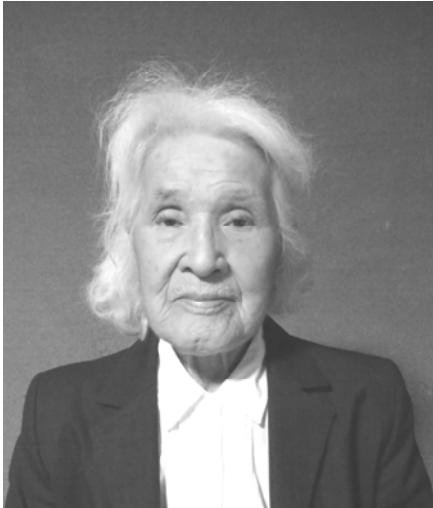
受賞歴

昭和 53 年 1978 年 和歌山県名匠表彰

和歌山県政功労者表彰

昭和 60 年 1985 年 綬褒章

平成 12 年 2000 年 日本キヲニス文化賞



さ か い し げ こ

井 滋子 氏

生年月日 昭和 年 月 24 日生

住 所 田 市本町

昭和 年 1930 年 月 24 日、西牟婁 瀬戸 山村 現白浜町 に生まれる。

平成 年 1991 年 に定年 職するまで、県内 等学校で教 職を執る。

定年 職後、西牟婁教育相談センターの相談員となり、不登校の子ども やその家族の相談活動に携わる。当初は小中学生の子どもが対象であったが、 校にも 学せずそのまま引きこもってしまう若者 を放っておくことができず、学 期を超えた年 の支援を始める。

平成 10 年 1998 年 、田 市民総合センターに活動拠点を移し、 年サークル「ハッピー」を結成し、 に数回居場所を 設けるようになる。その中で出てきた課 題を元に市当局にも働きかけ、平成 13 年 2001 年 に行政と民 が 携してひきこもり 問題を協議する検討委員会が設置され、市は相談窓口を 設けた。この取組は全国的に注目され、田 市が全国に先 けて行政としてひきこもり支援に取り組むきっかけを作った。

平成 14 年 2002 年 、「ハッピー」は一 家を借りて「ハートツリーハウス」に発展。その後、活動の充実と 営の安定を図るため、平成 18 年 2006 年 に 法人の認証を受け、「特定 営利活動法人ハートツリー」の理事 に就任。設立以来、和歌山県や田 市から指定を受け、「ひきこもり者社会参加支援センター」を 営するとともに、平成 20 年 2008 年 からは厚生労働省の委託を受け、無就業の若者の職業的自立支援に取り組む「南紀若者サポートステーション」を 設け、ニートやひきこもり、学校から 退、または就業していない者やその保護者を対象とした支援プログラムや個別相談を実施するなど、各人の状態や環境に合わせたプログラムで社会参加や社会復帰のきっかけを作っている。

また、ハートツリーは平成 26 年 2014 年 に 座 りの商店街に「カフェ・ルルコロ」をオープン、 所者の就労準備を支援するため、店内で販売する焼き菓子の製作などをパティシエの指導の下で行っている。さらに、平成 28 年 2016 年 には、貧困家庭の子どもたちの学習を無償で支援する「ひなた塾」を 開講。生活困窮者自立支援

第 48 回 (平成 29 年)

法に基づき、ハートツリーが業務を受託。親から子への貧困の を ぐことを目的に、経済的に恵まれない子どもたちの 路 択の幅を広げる活動を行っている。

このように、氏は一貫して不登校・ひきこもりの子どもや 年 に寄り添い、ひきこもり支援活動の先 的な役割を果たした功績は大きく、またその思いは確実に次の世代へと引き継がれている。

学 歴

昭和 22 年	1947 年	和歌山県立田 等女学校卒業
昭和 25 年	1950 年	同志社女子専 学校生活科卒業
昭和 27 年	1952 年	同志社大学文学 社会学科卒業

職 歴

昭和 43 年	1968 年	和歌山県立 等学校 常勤講師
昭和 45 年	1970 年	和歌山県立田 等学校教諭
昭和 58 年	1983 年	和歌山県立南紀 護学校 現南紀支援学校 教諭
平成 年	1991 年	定年 職

役職等

平成 18 年	2006 年	特定 営利活動法人ハートツリー理事
---------	--------	--------------------

受賞歴

平成 24 年	2012 年	和歌山県知事表彰 保健衛生功劳
平成 27 年	2015 年	社会福祉事業功劳者表彰 田 市社会福祉協議会



はまぎし ひろかず

濱岸 宏一 氏

生年月日 昭和 18 年 11 月 10 日生

住 所 田辺市学園

昭和 18 年 (1943 年) 11 月 10 日、日高郡白崎村 (現由良町) に生まれる。昭和 43 年 (1968 年) 3 月に同志社大学大学院文学研究科修士課程修了後、中学校教諭、昭和 51 年 (1976 年) からは高等学校の教諭を歴任し、平成 16 年 (2004 年) 3 月に退職する。この間、36 年の長きにわたり学校教育の充実・向上に力を尽くした。

教職のかたわら紀南文化財研究会に属し、長年にわたり古墳、遺跡、民俗、神社の祭礼などの研究に取り組むとともに、昭和 48 年 (1973 年) からは同会の理事となり、以後副会長を経て、平成 25 年 (2013 年) からは会長として紀南地方の歴史研究を牽引している。

また、昭和 59 年 (1984 年) から現在まで長きにわたり市文化財審議会委員を務め、主に考古、民俗文化財の調査と指定・保存と文化財保護思想の普及に尽力する。平成 23 年 (2011 年) からは委員長として、審議会全体の運営にも携わり、田辺市の文化財保護行政に大きく貢献している。

さらに、南方熊楠についての研究にも取り組み、平成 18 年 (2006 年) に南方熊楠顕彰館が開館した後は学術スタッフとして、これまで大きく取り上げられなかった熊楠と田辺及び近辺の人々との交流に着目した展示を実施するなど、郷土に根差した顕彰を進めた。この間、南方熊楠邸保存顕彰会 (現南方熊楠顕彰会) 常任理事を務めた後、中瀬喜陽氏 [第 33 回 (平成 14 年) 田辺市文化賞受賞] の後を受け、平成 24 年 (2012 年) 4 月から平成 29 年 (2017 年) 3 月まで南方熊楠顕彰館の館長を務め、田辺市と南方熊楠顕彰会が官民協働で進める南方熊楠顕彰事業の推進に尽力した。

(学 歴)

昭和 37 年 (1962 年)

和歌山県立耐久高等学校卒業

昭和 43 年 (1968 年)

同志社大学大学院文学研究科修士課程修了

(職 歴)

昭和 43 年 (1968 年)

田辺市立明洋中学校教諭

第 48 回 (平成 29 年)

昭和 47 年 (1972 年)	中辺路町立中辺路中学校教諭
昭和 51 年 (1976 年)	和歌山県立田辺工業高等学校教諭
昭和 62 年 (1987 年)	和歌山県立田辺高等学校教諭
平成 16 年 (2004 年)	定年退職

(役職等)

昭和 48 年 (1973 年)	紀南文化財研究会理事 (平成 25 年～ 同会会長)
昭和 59 年 (1984 年)	田辺市文化財審議会委員 (平成 23 年～ 同会委員長)
平成 10 年 (1998 年)	和歌山県文化財保護指導委員
平成 15 年 (2003 年)	南方熊楠邸保存顕彰会 (現南方熊楠顕彰会) 常任理事
平成 20 年 (2008 年)	田辺市景観審議会委員
平成 22 年 (2010 年)	南方熊楠顕彰会学術部長
平成 24 年 (2012 年)	南方熊楠顕彰館館長

(受賞歴)

平成 17 年 (2005 年)	田辺市市政功労者表彰 (教育功労)
------------------	-------------------

(共 著)

昭和 55 年 (1980 年)	『田辺ーふるさと発見』(あおい書店)
平成 6 年 (1994 年)	『目で見る田辺・西牟婁の 100 年』(郷土出版社)
平成 29 年 (2017 年)	『写真アルバム 紀南の昭和』(樹林舎) ほか多数



い け だ ち ひ ろ
(故) 池 田 千 尋 氏

生年月日 昭和 5 年 12 月 14 日生

住 所 田辺市中辺路町野中

昭和 5 年 (1930 年) 12 月 14 日、西牟婁郡近野村 (現田辺市中辺路町野中) に生まれる。昭和 23 年 (1948 年) 3 月に熊野林業学校を卒業後、当時の田辺・西牟婁郡内の小中学校において教鞭を執る傍ら、法政大学に学び教員免許を取得。平成 3 年 (1991 年) 3 月に退職するまでの間、43 年の長きにわたり当地域の学校教育の充実・向上に尽力した。

教職とともに、郷土史の研究に関わり、特に戦前に当地方で発行された新聞「牟婁新報」の研究と復刻版の刊行、ならびに「大逆事件」の研究と犠牲者の顕彰に力を尽くした。

「牟婁新報」は、明治 33 年 (1900 年) 4 月に西牟婁郡田辺町 (現田辺市) で創刊された地方新聞で、社長・主筆の毛利柴庵 (もうり さいあん) は、仏教界の革新に関与した進歩的仏教徒であり、初期の社会主義者達との交流も深く、「牟婁新報」には当時の社会主義者をはじめとする革新思想者が多く論陣を張った。

また、同紙の革新的メディアとしてのもう一つの特色は、環境保全・自然保護にいち早く着目し、明治 39 年 (1906 年) からのいわゆる「神社合祀問題」では、宗教の自由・環境破壊の問題として積極的に取り組んだことにある。このとき登場したのが、「エコロジーの先駆者」として知られる博物学者南方熊楠で、熊楠は、柴庵とともに「牟婁新報」紙上に神社合祀政策反対の論陣を展開した。熊楠の自然保護の考え方は、現在も彼が暮らした田辺の地で受け継がれており、平成 27 年 (2015 年) に吉野熊野国立公園に編入された天神崎は日本のナショナルトラスト運動の先駆けとして有名である。

氏は、環境保護、宗教の自由など、現在にも通じる地球的規模のテーマを正面から論じた「牟婁新報」に注目し研究を進めるとともに、脇村義太郎氏 [第 1 回 (昭和 45 年) 田辺市文化賞受賞] 旧蔵資料の田辺市立図書館への一括寄託を主導するなど、同紙の保存とその後の復刻版刊行に尽力した。

また、研究を進める中で、「牟婁新報」を語る上で欠くことのできない「大逆事件」に着目し、その過程で、事件で処刑された曹洞宗の僧侶内山愚堂 (うちやま ぐどう) のほか、大石誠之助や成石勘三郎・平四郎兄弟といったいわゆる「新宮グループ 6 人」の名誉回復、復権に力を注ぐとともに、宗教家として人権問題、戦争や平和の問題の重要性を説いた。

昭和 35 年 (1960 年) 発足の「大逆事件の真実を明らかにする会」には、発足時から入会し、寄稿や会の活動にも精力的に参加するほか、新宮市での「大逆事

第 49 回 (平成 30 年)

件の犠牲者を顕彰し真実を求める会（現「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」）」には平成 13 年（2001 年）結成当初から顧問として、また本宮町での「大逆事件の犠牲者の名誉回復を実現する会（現「大逆事件を語り継ぐ会」）」にも平成 15 年（2003 年）結成当初から顧問として、両会への寄稿や講演会に精励するなど、当地域と関わりの深い「大逆事件」の研究と犠牲者の顕彰に尽瘁した。

加えて、氏は、昭和 38 年（1963 年）から平成 19 年（2007 年）までのうち 25 年間、旧中辺路町の文化財審議会委員、市町村合併後は田辺市文化財審議会委員を務め、その豊富な知識と経験を活かし、文化財の保護活動に尽力し、特に氏の専門である歴史分野を礎に、文化財の調査研究に貢献した。

このほかにも氏は、平成 10 年（1998 年）10 月から平成 17 年（2005 年）4 月まで熊野古道なかへち美術館館長を歴任したほか、市町村合併後の平成 17 年（2005 年）から平成 29 年（2017 年）までの 13 年間、田辺市文化賞推薦委員会の委員を務め、本市における文化振興及び田辺市文化賞の発展に大きく寄与した。

(学 歴)

昭和 23 年（1948 年）	熊野林業学校卒業
昭和 38 年（1963 年）	法政大学文学部史学科卒業

(職 歴)

昭和 23 年（1948 年）	5 月	近野村立近野小学校
昭和 26 年（1951 年）	4 月	近野村立野中小学校
昭和 27 年（1952 年）	4 月	上芳養村立上芳養中学校
昭和 29 年（1954 年）	4 月	日置町立日置小学校
昭和 31 年（1956 年）	4 月	上芳養村立上芳養中学校
昭和 31 年（1956 年）	9 月	牟婁町立上芳養中学校（町村合併）
昭和 33 年（1958 年）	4 月	大塔村立三川中学校
昭和 34 年（1959 年）	4 月	中辺路町立野中小学校 中辺路町立二川中学校
昭和 41 年（1966 年）	4 月	日置川町立日置中学校
昭和 42 年（1967 年）	4 月	中辺路町立栗栖川中学校
昭和 44 年（1969 年）	4 月	中辺路町立中辺路中学校（統合による校名変更）
昭和 45 年（1970 年）	4 月	田辺市立高雄中学校
昭和 56 年（1981 年）	4 月	田辺市立上秋津中学校
昭和 60 年（1985 年）	4 月	田辺市立秋津川中学校
平成 3 年（1991 年）	3 月	定年退職

昭和 48 年（1973 年）	11 月	養命寺住職
-----------------	------	-------

(役職等)

昭和 38 年（1963 年）	12 月	中辺路町文化財審議会委員
平成 6 年（1994 年）	4 月	中辺路町文化財審議会委員
平成 10 年（1998 年）	10 月	熊野古道なかへち美術館館長
平成 14 年（2002 年）	9 月	中辺路町景観保全審議会委員 中辺路町環境保全審議会委員
平成 17 年（2005 年）	5 月	田辺市文化財審議会委員
平成 17 年（2005 年）	9 月	田辺市文化賞推薦委員会委員



まつもと はまじ
松本 濱次 氏

生年月日 昭和 9 年 1 月 17 日生

住 所 田辺市中辺路町野中

昭和 9 年（1934 年）1 月 17 日、西牟婁郡近野村（現田辺市中辺路町野中）に生まれる。18 歳の頃、父の勧めにより田辺市街で営む同郷出身の桶職人のもとに弟子入りし、修行を積む。師匠の下で技術に磨きをかけ、当時市内に数ある桶屋とともに、主な取引先であった大阪へ桶を納品する多忙な日を送る。

昭和 40 年代の高度成長期に入ると、安価なプラスチック製品が市場に出回り、桶職人の仕事が減少。このため、桶づくりから離れ、市内の製材会社で製材業に従事。

定年により製材会社を退職後、中辺路町野中の実家に戻った際、古い桶の修理を頼まれ、その桶が師匠の大正 13 年（1924 年）の作であったことから運命的なものを感じ、「桶濱」の屋号で桶づくりを再開。厳しい修行の中で身につけた技術は 20 年余りのブランクをものともせず、以来、20 年以上の長きにわたり日々製作に励んでいる。

国道 311 号沿いの自宅兼作業場では、大小さまざまな木桶が並び、今では桶職人が稀有なこともあって、熊野古道を歩く傍ら訪問される方も多く、テレビ等のマスコミでも紹介されている。そのような中、地元カメラマンが「桶濱」で作業する氏の笑顔を捉えた写真が、平成 27 年（2015 年）の第 2 回 O V E R 6 0 全国スマイルコンテストにおいて、全国 1,645 人の応募作品の中から「男性の部」で見事にグランプリを受賞。受賞写真は、まさに氏の人生や人格そのものを映し出した笑顔として高く評価された。

桶づくりのひとつに、「樽（くれ）」と呼ばれる板を一枚一枚組み合わせる「正直（しょうじき）」という工程があり、桶づくりの良し悪しを決定するもので、独特の鉋（かんな）を用い、長年の感覚に裏打ちされたミリ単位で木を削る作業は実に精緻で根気のいる作業である。

また、材料に熊野地方で切り出された杉材を用い、一つ一つを丁寧に仕上げる氏の桶は、木の香りとともに、手づくりならではの温かさと木ならではの優しさを醸し出している。

現在は貴重な桶職人として、桶づくりのほか、桶づくりを学ぼうとする人や遠

第 50 回（令和元年）

方から持ち込まれた桶の修理なども気安く受けており、80 歳を超えて今なお精進しようとするその真摯な姿勢と心意気は県内外から信頼を得ており、古から育んできた木の文化、和の文化を今に伝える功績は大きい。

（学 歴）

昭和 21 年（1946 年） 近野国民学校卒業

（職 歴）

昭和 27 年（1952 年） 田辺市内の桶職人の下に弟子入り

昭和 40 年（1965 年） 製材会社に勤務

平成 6 年（1994 年） 製材会社を定年退職後、郷里の実家で工房「桶濱」を開設

（受賞歴）

平成 27 年（2015 年） 公益社団法人 国土緑化推進機構「森の名手・名人」認定
第 2 回 O V E R 6 0 全国スマイルコンテスト 男性の部グランプリ

平成 30 年（2018 年） 和歌山県名匠表彰

50 年の歩みに 寄せて

(受賞者のことば)

50年の歩みに寄せて（受賞者のことば）



早 田 卓 次 氏

（第1回受賞者）

2020東京オリンピック・パラリンピック開催の年に田辺市文化賞が施行されて50年を迎えられ、誠におめでとう御座います。

半世紀前に私が田辺市民の一人として第1回田辺市文化賞に選ばれたことは光栄に思い改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

当時はあまりよく理解できていませんでしたが、10年ほど前に定年を迎えてからは生誕田辺の地で第1回の文化賞を頂いたことに誇りと、感謝の気持ちでいっぱいです。

受賞者一覧を開くと、明洋中学校太田耕二郎校長（第12回受賞）、益山英吾先生（田辺高校美術、第4回受賞）らが居られ、中学・高校時代は勉学、スポーツに励み、先生方の心の教育が私の人生の支えになり現在があると信じています。

先生方々との出会い、田辺市の皆さんとの触れ合い、頂いた応援がこの79年間にあったと思いつつ、2020年10月10日で80歳になります。1回目の東京オリンピックは体操男子団体とつり輪で金メダルを頂き、2回目の東京オリンピックも健康で迎えることが出来ることも含めて、全てに感謝の気持ちでいっぱいです。

今後一層、田辺市の繁栄と田辺市文化賞の充実、発展を祈念申し上げます。

50年の歩みに寄せて（受賞者のことば）



原 盾 二 郎 氏

（第17回受賞者）

田辺市文化賞 50 周年、誠におめでとうございます。そして、田辺市文化賞が関係者のご尽力により、今日まで半世紀にもわたり継続して来られましたことに、受賞者の一人として畏敬と感謝の意を表します。

顧みますと、私の田辺市文化賞受賞は、昭和 61 年の第 17 回でした。当時、私は 49 歳でしたので、まさか私のような若輩者に田辺市文化賞のお声が掛かったことに大変驚いたことを鮮烈に覚えています。受賞時、私は田辺高校合唱部顧問として合唱に打ち込んでいました。教職に就くと同時に合唱部顧問となったわけですが、私は声楽を専攻していたわけでもなく、顧問となった際の合唱部の部員は 14, 5 人と名ばかりの部で、文字通り一からの手探り状態でのスタートでした。

当時の時代背景もありますが、部員たちには学業そっちのけでハードな練習を求めてしまいましたが、それでも部員たちはしっかりと付いて来てくれ、お陰様で田辺市文化賞受賞時には近畿大会や全国大会にもコンスタントに出場できる程の実力校に成長できたことは、今でも良い思い出です。また、昭和 35 年に始まり、有難いことに現在も関わらせていただいております「クリスマス・コーラス・コンサート」は、令和元年 12 月で 60 回を迎え、素晴らしいイベントに育ちました。

「田辺第九演奏会」は、令和元年 12 月、第 34 回の開催をもって 40 年の歴史に幕を閉じましたが、合唱を愛する多くの市民が参加してくれたからこそ、これほど長く続けられたのだと思います。支えていただいた全ての皆様、本当にありがとうございました。

思えば合唱とともに歩んできた人生。たくさんの教え子たちも立派に巣立って行き、幸せな教職時代でした。現在も、教え子たちが中心となって結成された「田辺市民合唱団」の顧問として、毎週、合唱に関わらせていただき充実した日々を送っております。これからも“合唱のまち田辺”を更に盛り上げていただければと願っており、私も出来る限りのお手伝いをさせていただきたいと思っています。

50年の歩みに寄せて（受賞者のことば）



宇 江 敏 勝 氏

（第36回受賞者）

わたしは、二十代は炭焼きをしていた。三、四十代はおもに植林の仕事をした。車の入らない山小屋に住んで、夜は石油ランプの明りで本を読み、文章を書いた。ふだんの労働の様子や、年寄りから聞いた昔の事柄をノートに記録した。

山仕事は嫌いではなかったが、自分はいつかは作家になるだろう、と思った。神戸市にある「V I K I N G」という文芸同人誌へ詩や小説を載せるようになった。都会の売れはじめた小説家や新進の学者たちとも接触する機会があって、大いに勉強をさせてもらった。

四十二才のとき、中央公論社から初めての本『山びとの記』を出版した。山の労働や生活や自然とのふれあいの記録である。その本が話題になって売れたことから、新聞や雑誌から文章の注文が入るようになる。もはや山仕事もしていられない。以来、中辺路町野中に住んで、文筆でメシを食ってきた。

岩波書店、福音館書店、草思社その他の出版社から相次いで本を出してもらった。出版業界の景気もよかった時代である。わたしは注文されるままに文章を書いた。こちらから東京へ出かけることはなく、編集者のほうから来てくれた。ラジオやテレビ出演のおつき合いもした。それから「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録された。わたしは熊野古道の道端に暮らしているのである。またまた文章や出版のはなしが殺到し、講演にもひっぱり出された。

ふり返ってみれば、炭焼きや植林をしていて本を書くような人間は、日本国じゅうでわたしをおいてほかにはいなかった。熊野の山の暮らしや自然や文化など誰も書いていなかった。もの書きとしてわたしは宝の山の中にいたのだった。

わたしも八十歳をいくつか越えた。いまでは熊野を舞台にした民俗伝奇小説を書いている。新宿書房との約束で、一年に一冊、十年で十巻を本にせねばならない。最後の一冊を今年じゅうに出すつもりである。それが終わったら、さて次はなにを書くか。

50 年の歩みに寄せて（受賞者のことば）



玉井 済夫 氏

（第 44 回受賞者）

昭和 45 年、第 1 回田辺市文化賞の受賞者に「万代記」の解説をされた池永浩先生がおられます。田辺高校の 2 年生の時に、「漢文」という授業があり、私は池永浩先生に習いました。池永先生の授業は漢文の読み方やその意味を解くだけでなく、学問をする姿勢や態度にも言及されました。ある日の授業で、私は先生に教科書を読むように指名されて読み始めたのですが、すぐに行き詰ってしまい、次に進めませんでした。しばらくして池永先生は「もういい、座れ」と言われ、その後の説教が続き、私が予習をしていなかった不勉強さと学問への姿勢を話されました。

平成 25 年の第 44 回文化賞で、私は牛尾武氏とともに受賞しました。牛尾氏は日本画家として若い頃から各地の日本画展で次々と入賞するなど、すぐれた作品を描き続けておられました。そして、いつも自然の中にいて自然を描きたいという思いから、平成 3 年から田辺市に住み、「熊野」をテーマに精力的に製作を続けられました。

また、牛尾氏はラグビーが好きで、私が熊野高校の教職にいた頃、対外試合の時によく観戦に来られ、彼とともにベンチに座りました。その牛尾氏は、受賞の前年（平成 24 年）に亡くなられ、受賞式の日、私はまことに残念で寂しい思いをしました。

私は昭和 47 年に、田辺高校の教員として赴任しましたが、その時、田辺高校には熊野の自然調査を非常に精力的に進めていた後藤伸先生がおられ、私もその仲間に入れてもらいました。そして、昭和 49 年、外山八郎先生とともに天神崎を大切にする市民活動に加わりました。後藤先生も外山先生も文化賞の受賞者ですが、第 1 回から受賞された方々の中には、私が習った先生をはじめ、ご指導いただきお世話になった方々が実にたくさんおられます。

さらに、南方熊楠が調査研究し、保護した神島の調査にも関わることができたことは、私にとってはまことに大きな経験でした。こうしたすぐれた先輩の方々のおかげで、私も受賞できたのだと感謝しています。

50 年の歩みに寄せて（受賞者のことば）



政 井 和 子 氏

（第 46 回受賞者）

昭和 44 年、当時の野見市長が私に、「文化賞を創設するがどんな先生方を推奨したらよいか。」と直接聞かれたことがある。図書館司書として奉職していた頃である。無論、諮問委員会も組織はあったのだろうが、何かというと、幼児からわたしの父と交友のあった市長は、文化関係のことは個人的によく私の意見に耳を傾けてくれた。

かといって私から市長には何も職員としてお願いする事はなかったが、高村光太郎の『智恵子抄』や、与謝野鉄幹の詩歌を調べよと言われたりしたものだった。父と交友関係があり心安い部下だったのだろう。「池永浩先生・雑賀貞次郎先生は、絶対挙げて下さい。」と答えた事を鮮明に記憶している。

脇村義太郎先生・原勝四郎画伯。高山格本因坊は名誉市民級の偉大な方々であり、早田卓次氏はオリンピックのゴールドメダリストであり、多士済々というか豪華絢爛綺羅星のごとき第 1 回のスタートであったと思う。

あれから 50 年……。文化賞推薦委員の任命を受けた時期もあり、図らずも第 46 回に受賞末席を汚すこととなったが、「頂いてよかったのか」と今でも思う。

我々文化活動をしていた多くの市民が渴望した文化会館が建設される事となり、寄付・募金も行った。伝統芸能関係の先生方を一つにまとめ、仲良くそれこそワンチームで先生方が舞台に上がってくれた事。多くの皆様に費用をご援助いただき、6 時間半にわたる開館記念の「伝統芸能まつり」。それと「勸進帳」の公演を実現出来たこと（紀南文化劇場旗揚げ公演）。

わずか 30 年ばかりの働きであった。それも現実には旅館経営という立場との折合いをつけた事であり、自分の中では大変な事だったが楽しく、そして激しい情熱的な毎日だった。平たく言えば阿保になってバタバタした年月であった。

目下、わたくしの最後の仕事になり故郷への恩返しになることをしたいと思っている。受賞はやはり想定外・身に余る出来事でした。

50年の歩みに寄せて（受賞者のことば）



古 久 保 健 氏

（第 46 回受賞者）

私は、昭和 12 年（1937 年）に生まれ、1 歳で父を戦争で失い、母と祖父母に育てられました。戦後は、様々な制約から解放され安心して生きられる生活が戻ってきました。そして、新しい憲法の下で、貧しいながらも未来へ希望の持てる時代を過ごしました。

後期高齢者になった今、私は、当時の体験や史実を次代に伝えたいとの切なる思いで生きています。残された時間をどう使うか日々考え迷いながらも、歴史の証人として戦中・戦後の体験を語り継ぐ活動を続けているところです。

また、文化財を守る取組も関心事の一つではありますが、力不足と年齢による制約で、何もできていないのが現状です。

これからの社会は様々な分野で変革が進み、私たちの生活は大きく変わろうとしています。しかし、その全ては過去の歴史の上に成り立っていることを忘れてはいけません。生活様式や生産様式、働き方が変わっても過去から学ぶことなくしては未来を展望することはできません。古文書も公文書も文化財も、一度失ってしまえば元に戻ることはありません。だからこそ、歴史の事実や遺産をきちんと保存し、語り伝え、後世に残すこと、そしてこれからの人たちがその事から学べるように道標として残しておくこと、それが私たちに課せられた責務ではないかと思うのです。もう少しの間、私もその責務を果たすために微力ながら頑張ってみようと思います。

田辺市文化賞 50 年の歴史の片隅に置いていただけたことに対し、関係者の皆さまに感謝いたします。

あ と が き

(田辺市文化賞に携わって)

あとがき（田辺市文化賞に携わって）



田辺市文化賞推薦委員会

委員長 橘 勲

手元に田辺市文化賞規程という訓令のコピーがある。昭和 45 年 4 月 1 日の発布になっている。第 1 条には、この訓令の趣旨が書かれ、「市の文化の発展に貢献した個人に対してこの規程の定めるところにより、市長がこれを顕彰し、文化賞を授与する。」とされている。

さらに、第 3 条には、「この規程において「文化」とは、学術、芸術、体育、生活文化等をいう」と文化を規定している。丁度、50 年前に制定されたものであり、平成の大同合併で新しい大きな田辺市が生まれた際に、規則として同じ内容が規定されたという経過があるが、文化賞に関わるものは、この規程（規則）のほかにはない。

私自身、その 50 年前に配属されていた田辺市役所の当時の庶務課は、田辺市文化賞に関する事項を所管事務の一つとされていたので、第 1 回文化賞については承知している。初回ゆえに、故人 3 人を含めて 6 人の先生方がお受けになり、そのお一人だった脇村義太郎東京大学名誉教授は、和歌山県文化賞に併せて、ダブル受賞に輝いたと記憶しているが、完成間近だった現在の庁舎への移転作業が日一日進んでいた当時のことも思い出す。

実際、毎年の文化賞は、推薦委員会において審議を尽くして、市長に答申していくための決定をしていくには、やはり推薦の方向性、継続性、バランス等々、一定の基準を設定した上で決定していくのであって、いろいろ配慮しながら、確認しながら人を決める作業には難しいものがある。しかしながら委員会 50 年の経過と経験の中で、一定の方向性が確立され、記録されてきていて、その方向に従って、あるいは、その時どきに舵を切って特別の存在等を認めるなどなど、柔軟な方途をもって、文化の香り高い本市の適切な受賞者の推薦を決定してきていると思う。

そんな中であって、第 50 回の節目を数える今回においても、推薦委員会の推薦のとおり、去る 11 月 22 日の贈呈式において、笑顔いっぱい松本濱次さんに 74 人目をお受け取りいただいた。その上で、50 周年記念誌をまとめられた次第である。

この記念誌こそ、郷土の文化の発展に思いを馳せ、ご努力いただいた先生がたそれぞれの、輝く轍の跡を広く読み取っていただくための資料「田辺市文化賞五十年」である。

田辺市文化賞五十年

(田辺市文化賞 50 周年記念誌)

発 行 令和 2 年 3 月
発行者 田 辺 市
(担当部署) 田辺市秘書課
〒 646-8545
和歌山県田辺市新屋敷町 1 番地
TEL 0739-22-5300 (代表)

印刷所 アート印刷社

